

兒童は始めは或行爲の動機乃至意向といふが如きことは全く考へず唯唯行爲の外部に見はるゝ結果についてのみ考ふるものである。併しそれも漸次經驗を積むにつれ他人に對する自分の態度の上より行爲に甲乙の差別の生ずることを自覺する。この如くにして同一事にも人は結果についてとはなく内部に潛む動機について賞讃し又は批難することを知る。初め兒童は全く他人は自分の行爲についても結果の上よりのみ判断を下すものと考へて居たのであるがそれが動機によりて差別あることを知るや今度は如何なる事にも誤りて爲したるにて態となしたるではないと言譯すれば罪を免れるものとして盛んに之を濫用する時期が見られる。しかしこれも經驗の積むに従ひて變化し例令不用意になしたる事でも若し注意さへして居れば左様には行かぬのであるといふ事に氣付き不注意に關して自己に責任があるといふことを感ずる。この如くにして責任の感が明瞭になると同時にそれに關する條件も明瞭となつて來るのであるがその充分に熟するのは青年期にある。

責任の考が漸次明瞭となるに就いては世人も腕げにその標準を立て年齢の進むにつれて漸次責任を負はしむる程度を加へるのである。責任の感はかくて漸次發達するといへば兒童の考は具體的なる自我以外には及ばない。故に青年期に達する迄は兒童は何か失策せる場合には事情止むをえず或は自分は天性愚鈍故止むをえず或は天性微力故止むをえずといふ類のことを口にしない。併し青年期に達すれば多くの場合に自分の失策の原因を周囲の事情或は自分の天性或は造物主の罪に歸し幾分自己の責任を軽減しようとする考が見える。他人に對しても之と同様で十二三歳の兒童は成績不良の同級生に對しても決して假借せず彼れは勉強しても出來ぬのであるとの事はなか／＼曉らず従つて自分の能力には元來限りがあつて此事は到底出來ぬとの考は起り來ぬものである。青年期になつても起らず努力して自分の理想と現實とが甚だ遠きに對して苦悶を感ずるは二十歳前後の常態である。それが四十歳頃になればこれは自分の力に合はぬ事と斷念し煩悶が無くなるのである。



### 第六節 兒童と尊敬

概言すれば人はその公私の生活に於て、社會の慣習に従ひてその規律を守り、團體の思想を尊重する時は、公衆より尊敬を受けるものである。若し一般の風習に背いても、尙他から尊敬を受けるといふ場合あらば、それはその他の點に於て傑出した所があつてあの人ならばと、他より是認される場合に限る。

個人が社會に適應する態度の中で、社會より尊敬を受くるといふ事は、餘程不確實であり間接的であつて、例令或行爲があるにしても、それが直接に明瞭に衆人の注意を惹く場合でなければ、餘り尊敬を受け、批難を招くに至らぬものである。故に盜賊殺人等は人の注意を惹き易く、屢々その一地方の人をして不安の思ひあらしめる。之に反し商人が暴利を貪り買占をやるといふ類は、その害毒を流す點より言へばその範圍甚だ廣汎に亘るも、さして目立たぬがため、人の噂にも上らぬ位である。又戦争にて殊勳を立て

長者に對する尊敬

たとか、火事の際人命を救つたとかいふが如き事は、非常に世人の賞讃を博するに足るが、教育者などの様に數十年間獻身的に努力しその功績測るべからざるものあるに拘はらず、世人には一向省みる所とならぬのである。この如く世の名譽尊敬なるものは甚だ不確實であるといふことが出来る。或國人例へば支那人、伊太利人、獨逸人等は頻りに年長者を尊敬すべきことをその子供に教へる。中には之を以てその國の教育に於ける唯一の目的であるかの如くに重視する所もある。唯に年長者のみに止らず、國家の教會寺院及その代表者たるべき人は之を尊敬せねばならぬと頻りに教へて居る。かく年長者を餘りに尊敬するに過ぐる社會は何れかと言へば、固定的であつて安固といふことは出来るかも知れぬが變化に乏しく、單調であつて、潑刺たる所がない。獨逸英國の如きはこれに近い。此等の國民間に於ては、米人などよりも一層多く兩親教師或は教會の牧師といふものに對して尊敬を見はして居る。併し一步立ち入りて考察すれば、尙其處に疑ふべき點のないでもない。蓋し兒童が此等年長者に對して尊敬の意を表



するは往々外面的で唯社會の習はしに従つて行儀作法を守るに止まるといふ觀がある。心裡より敬意を表するものではないといふ場合が多い。幼ない兒童は兩親に對して別に尊敬するといふ考へがない様である。唯兩親が物を爲すに上手であり或は腕力があり或は知慧があつて自分等に便利を與へて呉れるといふ立場からこれを偉しと思ふのであつて畢竟兒童が夫の運動家或は技術者等に對して拂ふ賞讃と同性質に屬し敢へて兩親その人の人格に對する尊敬といふ意は餘りないやうである。寧ろ恐怖の一種と見るが當つて居るかも知れぬ。

尊敬と自重自尊とは相互に手を擧げて發達するものである。一體青年期前の兒童は自分の行爲を反省して耻しいと思ふやうな事は滅多にないものである。時として他より批難を受ける場合に力めて自分を辯護する場合などは恰も自分の行を耻ぢて然るが如くにも見ゆるがそれは事實耻を知るといふ所から來るのではなく寧ろ自分の過失は確定したるものではない罰を受けてはならぬといふ考に支配せられて居るやうである。故

に社會一般の準則に基づいて自分と他人とを同一に責むるといふが如き事はなか／＼兒童の能くする所ではない。大人ならば非常に深く感じて長く頭中に残り痛く自我の念を傷けらるゝやうな批難を受けても兒童は直ちに忘れ去るのである。これ畢竟兒童には未だ自重尊敬の考が充分發達せぬが爲めである。要するに兒童は自分に對する世評の如何であるか等については一向無關心の状態にある。これ大人の心理と最も著しく異なる所であらう。

一般に尊敬なるものは行爲の外面よりは寧ろその内面の動機に對して起るべきものである。然るに兒童は内面の動機については深く考ふることが出来ぬ。かく他人の行爲は如何なる意向より出でしかを知るには多少發達せる頭腦を要する。故に兒童には尊敬も自重も兩つながら著しく見はれずこれらは青年期に至りて發達する。他に對する尊敬は要するにその人を信用しても可なりといふことである。信用するに足らぬ人は又尊敬するに足らぬのである。青年期になれば何人でも自分の態度の背後



に潜んで居る所の動機に照して自分を判断する様になる。かくて時の事情に随ひ彼れをして或は自重の念を強からしめ、或は反對に自暴自棄の境に驅らしめる。

自尊の念を失ふといふことは、總ての社會に對し何事かを爲さんとする勇氣と自信とを缺くといふことである。この如き見はれば青年期以前の兒童には殆んどない所である。青年期に至れば男女は何れも異性に對して評價をするやうになり、これと同時に廉耻の考も起つて來る。自分の過去を回想して自分の過去の生活は道德上大なる過失あれど將來に於てこれを償ふべき望みがあるといふ自信を懷いて努力する人の社會に對する態度は時に沈痛時に精進猛烈最も複雑を極むるものである。

## 第六章 兒童の道德的判斷

### 第一節 兒童の年齢と操行との關係

吾人は先づ兒童の年齢と操行との關係に就きて兒童研究家の調査したるものを概観し、次で特種の問題に對して兒童の下せる道德的判斷を述べようと思ふ。

伊太利國の「ドムナジウム」及「リシウム」の生徒三千十二人に對し、教師が善惡無記の三等に分ちて附けた操行點の結果につき、マアロー氏は周密なる調査を遂げて居る。右生徒は十一歳乃至十八歳の年齢のものを包容して居る。氏の調査によれば、十八歳には七割四分、十一歳には七割十七歳には六割九分、十四歳には五割八分の善行者あるを示して居る。惡行に關しては十五歳のもの最も多く、十三、十四歳稍少く、十六、十七、十八歳に至れば又大に善行者を増加する傾向がある。概言するに、操行は十一歳の時最も良く、

マアロー氏の調査



十二、十三歳に下り、十四歳の時最も悪しく、其後少しづつ改善せられて十七歳になれば略十一歳と同じく、十八歳に至れば更に善良の度を加へると。同氏は伊太利國の青年期に近い男女の生徒に就き、其受けたる處罰の原因を調査し、左表の如き百分比を得て居る。

處罰の原因	男	女
處罰の原因		
<sub>1</sub> 爭論及殴打	五三、九〇	一七、四〇
<sub>2</sub> 怠惰不注意	一八、〇〇	二一、三〇
<sub>3</sub> 不潔	一〇、七〇	二四、七〇
<sub>4</sub> 悪い言葉遣	〇、四一	一四、六〇
<sub>5</sub> 無禮の言語動作	一〇、〇〇	〇、二四
<sub>6</sub> 作業嫌惡	〇、八二	一、二六
<sub>7</sub> 訓練違背	一九、〇〇	一九、九〇
<sub>8</sub> 遊惰	九、六〇	〇
<sub>9</sub> 逃走企圖	一、七〇	〇

脱走 〇、七二 〇  
シーヤス氏は千人の児童の受けたる處罰の數を百分比例で示して居るが左表の如くである。

不規律	一七、三強
不從順	一六、〇
不注意	一三、三強
脱走	一二、六強
爭論	一〇、〇
作業溢滞	六、六強
粗暴	六、〇
爭鬭	五、三強
虚言	四、〇
窃盜	一、〇
其他	七、三強



教師によりて擧げられた児童の過失につきてトリップレットの作れる統計に據れば、不注意が多きを占めて居る。これ恐らくは教師として最も注意を惹き易いのに起原するのであらう。又児童の擧げた児童自身の過失を統計したるものによれば、争闘、毆打、他童苛め等は最多數で、これに次ぐは盜不行儀、虚言、不從順、遊惰、動物虐待、不潔、貪慾等である。同氏によれば父母の所見は亦これと異なるものがある。即ち強情及我儘が第一で、他兒苛め、喧嘩、用事を爲るを嫌ふこと等が之に次いで居る。

デキスター氏の児童の行爲と天候との關係調査

デキスター氏は児童の行爲と天候との關係につき、頗る面白い研究を遂げて居る。それに據れば、過度に濕潤な氣候は、不品行を生ずる傾向が最も多い。又氣温の昇ることも多く、悪行の増加を伴ひ、氣壓の變化、風の不規律なる運動等も亦同様の結果を示して居る。思ふに天候の犯罪に及す影響は現に監獄、感化院等の監督者によりて一般に注目せられる事實で、爲めに倫敦の銀行者間では、大霧の日には重要な帳簿記入を差止めて居るといふ。氣温が犯罪わけても自殺や遊惰の上に著しい影響を與へることは普ねく

人の知る事實である。

## 第二節 同輩の上に加ふる道德的判斷

カール・パロンス氏は在來慣用せる處罰なるものが児童自身の眼には正と映ずるか又は不正と映ずるかといふことに關し研究せるものの中に、児童心理に關する此種の研究法は又家庭及學校の訓練狀態の如何なるかを窺ふが上に有効であるとの意見を發表して居る。氏の意見に従へば、若し児童は自主の精神に迄教育せられなければならぬとすれば、訓練なるものは、児童の正義感に共鳴する所がなければならぬ。又教師は何が故に児童は此處罰を正當と考へ、或は不當と考ふるかを知らねばならぬのである。

教師はかゝる訓練上の問題に就いては餘りに自己一流の見解によりて事を定むる場合が多いのである。かくて教師の見て正當とするものは總て之を正當とし、児童なるものは當然教師の取れる見地より事物を考察すべき義務があるといふ風に考へて居る。同氏はこれに關し、吾等大人の見地

児童心理と訓練



より児童に加ふる要求の如きはさして価値なきものであること、教師の児童に對するは猶醫師の病者に對すると同じく在來の状態に比してより善くすることもあればより悪しくすることもあること、乃至児童の性格の改善に資するなき處罰は何たるを問はず甚だ不適當である、即ち在來より一層悪い心情、惡意、復讐心、臆病等に驅るが如き處罰の謂れなきこと、等を高調して居る。

校規違反の  
同輩に對す  
る児童の態  
度

このバインズ氏の意見に基き、モンロー氏は校規校則を犯したる同輩に對して、學校児童は如何なる態度を取るかを知らんがため、以下の質問をば、マサチューセツツの二千九百七十二人の學童に發したのである。

或女教師が一日學童に對し教室内で高聲で笑ふことを禁止した。かくて先生が或事のために忙殺せられて居た間に、誰とも知れず、室の一隅から高聲で笑つた。女教師は笑つた人の誰であつたかを尋ねたれど、男女兒は笑つた児童を告ぐる事を好まなかつたから、先生にその名を言はなかつた事がある。

斯様な事件を物語れる後、児童に對し、

汝等はこの男女兒の行爲は正當と思ふか、思ふならば何が故に左様思ふかを言へ、

と。所定の紙上に記述せしめたのである。これが答案は同州の十二以上の都市のあらゆる階級の児童から徴せられたのであつた。性別は約同數であるが、男兒が稍多く、年齢も七歳乃至十六歳のものに亘つて居た。次表は年齢による答の數を示して居る。

年齢	〔言ふを可とする者〕		〔言ふを不可とする者〕	
	男	女	男	女
七	二五	二六	五一	二〇
八	四〇	七六	一一六	一六
九	八〇	一一〇	一九〇	六四
十	九四	一一一	二〇五	五八
十一	一〇六	一二八	二三四	八八
十二	一一二	一四三	二五五	一一五



十三	一二四	一三六	二六〇	一四〇	一一五	二五五
十四	九三	一〇二	一九五	一一八	九五	二一三
十五	六三	四二	一〇五	九一	三八	一二九
十六	二五	一一	三六	四五	一一	五六
總數	七六二	八八五	一六四七	七五五	五六三	一三一八

右の表の示すが如く、児童の百分の五十五は、言つた方を可とし、四十五は先生に告げぬ方を善いと言つて居る。その中男童にありては言ふを可とする者の數は然らざるもの數に比して僅かに七人の多きを占むるのみである。之に反し、女兒の百分の六十一は先生に告ぐるを可とし、單に三十九のみが告げないのを善いとして居る。これを見ても、女兒にありては男兒に比し、校規違背者を告げようとする傾向が餘程迄強いことが知られる。年齢による百分比の次表は又頗る参考すべき價がある。

年齢	男童	女兒
七	五六	六五

兩性の差違

八	六八	七〇
九	五七	七四
十	六六	七一
十一	五五	六一
十二	四九	五九
十三	四七	五四
十四	四四	五二
十五	四〇	五二
十六	三六	五〇

年齢の幼ない児童程、年長けたるものより、先生に告ぐるといふに傾いて居る。見よ、上表に於て七歳の男兒は百分の五十六程違背者を言はうとするに反し、十六歳にありては單に三十六より外にない。之を女兒についても見るも、假令其年齢の増加につれて減少する度合は男兒に比し、少なきにせよ、同じい傾向を認め得る。見よ、十六歳の女兒の百分の五十は先生に



兒童立脚地の三様

告げようといふに七歳にありては六十五九歳にありては七十四といふ率に達して居ることを。

兒童の或者は此事件をば全く自分といふ個人的立脚地から眺め、或者は更に教師といふ立脚地から他の者は違背者其人の立脚地から考案して居る。此問題をば自分といふ立場から考案して居る者も何が故に先生に之を告げねばならぬかといふ理由に至りては三様ある。

個人的立脚地に立てる可論者

(一)眞實先生が問はれた時にそれを言はぬならば假令言語の上に於て欺くことにはならずとも、行爲の上に於て欺くこととなる。男兒の百分の二十四及女兒の二十一は此種の理由を擧げて居る。

(二)惡行爲これを言はぬ事は不正であり卑劣であり虚偽である。この理由は前項に擧げたるものと非常に密接なる關係がある。男兒の百分の十二、女兒の十五を含んで居る。

(三)憎惡の回避男兒の百分の三、女兒の五と二分の一は先生の憎惡が他の無實者の上に落ち來るを欲せぬからとの故を以て違背者を告知せうとする。

教師といふ立脚地に立てる可論者

る。

上述の如く男兒の百分の四十九及女兒の四十一と二分の一は多少はあれ、教師に告げんとする根據をば個人的立脚地の上に置いて居る事が知られる。

男兒の百分の十五及女兒の二十二は教師といふ立脚地から此問題を取扱つて居る。

(一)從順兒童はその女教師に對して從順でなければならぬ。これは男兒の百分の十一及女兒の十六と二分の一のものより擧げられて居る。

(二)これを穿鑿するは教師の爲すべき務めであるからとの理由の下に告げんとするは、單に男兒の百分の一及女兒の百分の一に過ぎぬ。

(三)報告するを適當とするもの他のものを徒らに告發するは正當ではない。しかし教師から問はれるといふ場合には事情が異なる。この理由は男兒の百分の三、女兒の四と二分の一のものから擧げられて居る。男兒の百分の十八及女兒の二十と二分の一は違背者の立場から立言して

違背者の立脚地に立てる可論者



居る。

(一)彼れの不従順、先生は彼れに笑つてはならぬと言つた。然るに彼れは従順でなかつたから、之を告げねばならぬ。男兒の百分の十二、女兒の十三はかゝる判断を下して居た。

(二)彼れの臆病、彼れは自身で告白せねばならぬのである。然るに彼れはこれを爲さないから、告げることはその他の児童の義務である。男兒の百分の三と女兒の四とはこれに屬する。

(三)彼れの懲戒、男兒の百分の三及女兒の四と二分一は小道德家とも言ふべき口吻でいふ。彼れは再び之を爲さざらんがためには懲戒せられねばならぬと。一女兒は彼れの性格を改善せんがために懲戒すべきを言つて居る。

上述せる以外の理由の下に、立言せるは甚だ少ない。男兒の百分の三及女兒の三と二分一は何故に児童はそれを告知せねばならぬかに關し、種々の理由を擧げて居る。十三歳の一男兒は次の如く言つて居るが、これは模

範兒の型に屬するものであらう。曰く、『児童等は教室内で一女兒が笑つたことを告げねばならぬ。かくすれば先生は全體の児童に好感を有つてあらう。故に余は全體に代りて之を告げようと思つた』と。男兒の百分の十五及女兒の十一は、それに對する何等の理由を擧げることなく、簡單に唯言つたが善い、言つたが悪い、といふことを擧げて居る。

告ぐるを不可とする児童も、矢張り告ぐるを可とする児童と同様に、之を三箇の視點下に取り纏むることが出来る。先づ男兒の百分の四十三及女兒の三十四と二分一は個人的理由を擧げて居る。

(一)金條、即ち人が自分に爲すを欲する様に之を他人に爲せといふ道德律に抵觸するものである。男兒百分の十三及女兒の十四と二分一は何れも自分等が他に裏切りするを欲せぬから何事も黙して言はぬを可として居る。多くの児童は如上の金條を引用して居る。

(二)告發は批難すべきものである。男兒の百分の二十三と二分一、女兒の十八は、告發者には好感を有せぬから何事も言ふまいとする。



(三)此等は自分に何等關係のない事だから言はぬ。男兒の百分の六及女兒の二は曰く、それを告ぐる事は兒童の與り知る事ではない。多くはこれを發見するは教師の爲すべき所であるといふ。しかも一男兒はそれに附け加へていふ、何となれば諺に言はずや、自分の事は自分で之を處理せよと。第二類即ち沈黙の根據を學校乃至教師といふ立場に於て立言せるは甚だ少ない。若し教師が兒童全體に誰が笑つたかを問ふても、男兒の百分の二女兒の一は黙して居るといふ。而してそれに關し一兒の言ふ所によれば、『余は正に熱心に先生の課せられたる學校の仕事に従事して居たであらうから』と。又男兒の百分の四及女兒の一はいふ、『先生の間に沈黙するといふは餘り宜しからぬ事である。しかしそれにも拘はらず、この學校に居る間は何人も告げぬであらう』と。

第三類即ち違背者自身を根據として沈黙を可とするは、正に、男兒の百分の三十八と二分一、女兒の五十一との多きを占めて居る。

(一)校規を蹂躪したるは全く個人的の事柄である。先生に告ぐるといふ

第二類の不  
可論者

第三類の不  
可論者

ことは違背者自身の爲すべき事では他兒童の告ぐべきものではない。男兒中の百分の十九、女兒の三十一は此事件につきて如上の地位を取つて居る。それに關し多くの兒童は沈黙するの不正であることを承認はするが、さりとて彼等の告げなかつたといふ事に對する責任を拒否して居る。

(二)友情、兒童の百分の四、男女兒約同數のものは社會的の禮法とも言ふべきものの上に根據を置いて居る。而して自分の級又は同地位に屬する兒童は何人もその仲間を保護し又其仲間から保護せられねばならぬとする。

(三)告發は罪惡である。如何なる人をも告發するといふ事は不正である。四人はそれに就き聖書中の文句を引用し、三人は教師、二人は兩親の言を典據として答へて居る。男兒中の百分の十、半女兒の八はこれに屬して居る。

(四)違背者の敵意、男兒の百分の二及女兒の五は違背者の意に觸るゝを欲せなかつたものである。

(五)懲罰を免れしめんがために、男兒の百分の七及女兒の四は若し某がこれを爲したといふ事を告ぐれば、教師がこれを懲罰するであらうと恐れて



沈黙を可としたものである。

男兒中の百分の九半は彼等の告發せないといふ理由を擧げない。又女兒の八半は同様簡單に先生には告げないと言つた計りで何故といふ問には答ふる所がない。理由を答へない兒童の比例は夫の違背者を告發せないといふ方の側に多く、且兒童の小なるもの程多きを加へて居る。しかし通じて女兒は男兒よりも理由を與ふるものゝ多きを示して居る。

兒童は上述せる如き際に際し校規違背者を告ぐべきか又告ぐべからざるかに關し論議するは別として、吾人は何事も單に兒童の立脚地から離れて之を眺めんとするを欲しないのである。學校の訓練の實際に於て最良の効果を收めんには、兒童の陳述せる如上の理由を省みることが甚だ大切である。兒童の道德的判斷たるや如何にも幼稚未熟ではあるが、さりとて彼等の道義上正しいとして居る様な事に矛盾する規定に従ふべく、彼等を強ふる時には、學校訓練における良果は收め難い。實に兒童中には成人間に存する古き道德律とは頗る相距ること遠き新綱領の支配を受けて居るこ

此種研究の  
教育的價值

とあるは、少からぬ所である。故にこの種兒童心理の研究の學校訓練の上  
に及す主要なる價值如何といふは他なし、即ち教師の指導啓發が如何なる  
點に向つて必要であるかを知りえんがために、先づ兒童の立脚地から行爲  
の正不正に關する兒童の信念の根據を衝かうとするにある。

猶此種研究の所得として、總ての兒童に多少特有であると思はるゝ傾向  
を指摘すれば左の如くである。

(一)男兒は女兒に比し校規違背者を告發しようとするものが少い。

(二)兒童が若ければ若い程告發しようとするものが多い。

(三)自我觀念は女兒よりも男兒により強く發達をなして居る。

(四)男兒は女兒よりも校規違背者を庇はうとする傾向が多い。

(五)友達の罪狀を明らかに告げるといふ用意を缺くは、多く團體的精神  
の然らしむる所である。かゝるは寧ろ團體的精神の誤用せられたもので  
あるにせよ、教師が之を威壓しようとして種々の努力をなすは甚だ不明の  
遣り方である。違背者の誰であるかはかく全體に發問するといふ様なこ



とを爲さずして他に發見の方法が存するであらう。寧ろ教師たるものは兒童の名譽心は大人とは頗る異つて居る事や、學校内に於ては各員の共力協同が規則秩序の維持に役立つといふ團體精神を發達せしむる事やについて細心の注意を拂はねばならぬ。

### 第三節 處罰と兒童の道德的判斷

社會はその道德的の判斷やその全體の意志やを注意の外に置く様な人をば反社會的として待つのである。而して社會の定むる懲罰なるものは畢竟その非社會的の各員の上に加ふる社會的の反動に外ならぬ。未開人にありては懲罰なるものは時に報酬といふことを目的にして居る。稍進んでは非社會的の各員は社會自身の正當防衛のために處罰せられる。非常に利他心の發達せる條件下において、非社會的の各員に對する社會の反應たるや、最早單に報酬的の懲罰でもなければ又防衛的の懲罰でもない。寧ろ賢明なる方法により、違背者をば社會有機體の有用なる一員に教育す

處罰と文野  
の程度

るを以て懲罰の目的として居るのである。

學校兒童は適當なる懲罰の種類として如何なるものを認めて居るかを知らんがために、米國の某記者は七歳乃至十六歳の千二百二十の男兒と千二百二十八の女兒とに對し、次の物語を聞かせたのであつた。

一少女あり繪を書くことが好きでそのノート中には多くの繪が書かれて居た。その誕生日の時彼女の母は綺麗な毛色の小猫を與へ「それを汝のノートの中に繪に書いて見よ」と言つた。一日母が外出したる留守中に少女は母の居間に入り、母の最も愛して居る椅子をば赤緑青黄等の色々の繪具で彩つた。母が家に歸つた時、彼女は母に向つて言ふには「母よ這入つて御覽、私は汝の居間の椅子を大變奇麗に彩りました」と。

汝等若しこの少女の母の地位にあらしめ、たならばこの場合如何に爲したであらうかを尋ねて、これが答を書き下さしめたのであつた。集められた答は次の如き結果を示して居る。



四百六十二の男兒三百六十七の女兒は打懲らすといふ。彼女の繪具を取り上げるといふものは二百十八の男兒と二百四十六の女兒とがある。九十三の男兒及百四十五の女兒は彼女を叱り附けるといひ、六十八男兒四十三女兒は彼女をして椅子に塗りつけし繪具を洗ひ落さしむるといひ、十四男兒と五十一女兒とは何といふ懲罰であるかは明示せないが單に彼女を罰するといふ。彼女をして再びかゝる事を爲さしめない様に約束せしめるといふものは二十二男兒と十九女兒とがある。十九男兒十六女兒は彼女を威し附けるといひ、十一男兒十八女兒は彼女の遊戯を禁止するといひ、七十三男兒及百十八女兒は彼女をして如何なる損害を生起したるかを説明せしむるといひ、五十六男兒七十六女兒は彼女は損害を生じたといふことを意識して居ないから之を免すを可とし、六男兒十七女兒は彼女は母を愛して居ることを示さんがためにした事であるから全くその罪を問はざらんとし、其他色々の事を言つて居るものは四十一男兒と四十七女兒とがある。

打懲らすといふ事は最も多く歡迎せられる懲罰の型であつて、男兒の百分の三十八女兒の三十は之を申出で居る。七歳の處を除いては男兒は何れも女兒より遙かに多く打懲らすを可として居る。しかし兒童の年が長ずるにつれて益々減少して居る。詳言すれば七歳の時打懲せといふものは同年齡者の中男兒の百分の五十六女兒の五十九に上つて居るが、十一歳になれば男兒の三十三女兒の三十といふ率に下り、更に十六歳にありては男兒の十二女兒の三の割合を示して居る。其他打懲らすといふ事と非常に近似せる懲罰の他の形例へば平手打にするといふが如き類も略同様なことが言はれる。此類の懲罰の目的は明らかに報酬にある。思へらく彼女は常軌を履み越えて母の權威を蔑ろにしたから、彼女の惡しき行爲に對しては之を膺懲せなければならぬと。

男兒の百分の二十二女兒の二十六のものは或は彼女をして色を拭ひ取らしめ、或は靜かに床中に入らしめ、或は遊ぶことを禁止せんとする。此類に屬するは社會を保護するといふ思想が先に立てる兒童階級を代表して



居る。蓋し少女は報酬の目的を以て罰せらるゝではなく、却つてかゝる非違を再び繰返さざらんが爲めに罰せられるのである。女兒は甚だかゝる種の處罰を歓迎して居るが、その増加は七歳より十六歳間に著しきものがある。

改善を目的  
とせる處罰

男兒の百分の十三及女兒の十八のものは以下の事を認めて居る。少女の椅子に繪ける際の目的はその母を歡ばせんがために爲したものである。或は少くとも無知なるが故に之を行つたのである。故に何よりも先づ少女は教へらるゝ事を必要とする。而して彼女の犯した罪は如何なる種類のものであるかを自身に明らかならしむるに若くはないと。此類に屬するものゝ懲罰の目的は教育乃至改善にある。斯様な意見を持するは七歳に於て男兒の百分の三女兒の七十二歳に於て男兒の百分の十六女兒の二十四十六歳に於て男兒の百分の二十四女兒の三十二を占めて居る。

パインズ氏  
の調査

吾人の因襲的の懲罰の中で如何なる要素が兒童の眼には正當又は不當と考へられて居るかを確かめんが爲めに、カール、パインズ氏は七歳乃至十

六歳のカリフォルニア州の學童二千人に對し以下の如き問題を發したのである。

(一)汝が嘗て受けたる處罰の中で如何なる懲罰が正當と思はれたか、且つ何故それが正當と汝に思はるゝかを言へ。

(二)汝が嘗て受けたる處罰の中で如何なる懲罰が不當と思はれたか、且つ何故それが不當と思はるゝかを言へ。

正當と思はれる懲罰を記述せる兒童はこの處罰の正當であるといふ三箇の重なる理由を擧げて居る。

(一)處罰が非行と正當なる關係に立つて居る。兒童の百分の七十七は懲罰を償であると考へ、苦楚を嘗むることによりてその非行を償ひ得るものとする。年少の兒童は殆んど斯様の考を有して居るが、年齢の増加につれてこの考は減退する。

(二)處罰を課したる人は能く自己の罪狀を知つて居る。兒童中百分の七のものは罰せられた事項については責任を回避して居るが、しかし之を加

是認せる處  
罰



へたる人に就ては彼れ此れと云爲する所なく大部分はそれに満足して居る。

(三)處罰は治療的で有効である。児童中の百分の十二のものは言ふ處罰は正常である、何となればこれ児童をして改善せしむるからである。

懲罰を不當として記述せるは、不當とせる以下四箇の理由を擧げて居る。

(一)無罪であるといふ。即ち児童の百分の四十一は自分等の處罰せられた非行は自分で行つたものではないこと、それが無實であつたこと、乃至第三者はこの懲罰を誹謗して居ることなどを言ふ。

(二)無責任の感情、児童中百分の二十七は彼等の非行を自認して居るに拘はず、此際これ以外の行爲を爲すことの出来なかつた事や、不正であるとは意識して居なかつた事や、又は不従順であるとは考へなかつたことなどを擧げて居る。

(三)不適當の處罰、児童の百分の十九の者は非行を爲した事を認むるが、しかし課せられた處罰の方法に反對する。曰くその處罰たるや嚴峻に過ぎ

非認せる處罰

た、或は依怙屬負の沙汰があつたそれは校規と矛盾してゐるなど、言ふ。

(四)自分の行爲は少しも間違つて居ないといふ。児童の百分の十一は處罰は不當であつた、何となれば當時の行爲は決して不正なものではなかつたからと。

如上の研究は處罰によりて児童には如何なる感情が惹起せられて來るかを示し、而して學校の指導を有効ならしむるが上に重要な知識を與へて呉れる。これに關し、パインズ氏の言へる所は甚だ當を得て居る。曰く「處罰は總て出來うる限りその本來の性質に従ひ、治療矯正の手段として適用せられねばならぬ。故に児童をして以前よりも却つて悪しき心情の状態にならしむる風の處罰や、乃至児童を惡しくし、遺恨を懷かしめたり、或は臆病ならしめたり、失望せしめたりする風の處罰や、は賢明なる教師の立場より見て不當であり間違つて居る。児童はかく／＼考へねばならぬといふ風な事はさして重大な事ではない。寧ろ當面の問題としては正に醫師の病者に對すると同様に、吾人の適用する手段が如何に病勢を善くするか



悪しくするか何れであるかを検査するにある」と。

#### 第四節 學級責任と児童の道徳的判斷

児童精神に關する近時の研究は吾人が児童の行動を支配するには如何なる方法に據るべきかといふ疑問に對して或種の光明を投げて居る。而して以下述べんとする研究は學校訓練上の一問題をば児童の見地より一層精密に立ち入りて究めようとする目的を以て遂行したるものである。教師すら此様な複雑なる問題については意見區々に亘つて居るのであるが對象たる児童その人はこの件に關し如何に考へ如何に感ずるかを取調ぶるは甚だ正常なることである。

次の出來事が、マサチューセツ州内の三千五人の學校、児童の前で物語られたのであつた。

一日教師が學校の給仕の爲めに教室の戸口の處まで呼び出された時に、児童中大騒ぎを爲したものがあつた。併し教師が元の場所へ歸り來

て誰が斯様な騒ぎを爲したかを取調べたれど發見することが出來なかつた。それが爲め全學級児童は放課後留置せられたのである。物語られた児童等は如上の處罰を正當と思ふか、不當と思ふか、又如何なる理由によりて爾かく思ふかといふ理由も併せ尋ねられたのである。次表は此間に返答を與へたる児童の年齢及性別を示して居る。

年齢	男 兒	女 兒
七	一四三	一三九
八	一七〇	一三八
九	一六九	一八九
十	一七四	一九二
十一	一八九	一五七
十二	一九四	一八二
十三	一五八	二一七
十四	一七一	一五三



十五	七七	七五
十六	五三	六〇
總數	一五〇三	一五〇二

男兒の百分の六十六及女兒の七十二はこの處罰を正當とし男兒の百分の三十二及女兒の二十七はこれを不當として居るが男兒中の百分の二女兒中の百分の一は應ふることを避けて居る。概言すれば處罰を正當とする者は女兒に多く且つ年少の児童程學級全體に受けたる處罰を否とするもの、數が減じて居る。換言すれば七歳より十六歳に至る迄年齢が増加するにつれて處罰を不當とするもの、數が著しく増加して居ることを示して居る。

兒童がこの處罰の正當なるか、不當なるかに關して、擧げたる理由に至りては特に興趣の深きものが存する。

第一類にありては違背者を發見するは教師に取りて不可能であるといふ事が主たる理由を爲して居る。この意見によれば罪のない多くの兒童

學級に責任ありとする兒童 共 一

も矢張り違背者と一所に罰せらるゝを正當であるといふ風に思はれるのである。男兒の百分の六十四及女兒の六十はかゝる考に立つて居る。十二歳の一男兒の發表する所によれば、

余は處罰せらるゝは正當と思ふ。何となれば教師は罪人を發見する事が出来ぬから。聖書に言はずや、不正なるものは正なるものと共に罰せられねばならぬと。

第二類の處罰を可とするは男兒の百分の二十六女兒の三十一を有して居る。その理由としては騒ぎたる生徒を告げざる事は教師に對して相濟まざることであるといふ。此類は違背者を告ぐは正に義務であると考える児童を包容するやうに思はれるのである。

第三類は男兒の約百分の十、女兒の九を包容して居る。その主張する所によれば、かく處罰することによりて斯様な不正行爲を繰返してする者を防止するから、處罰は正當であると。九歳の一男兒は言ふ、「斯様に全體を處罰すれば若し教師が其處に居らぬ場合になつても亂暴を働くものがな

共 二

共 三



學級に責任  
なしとする  
児童  
其 一

いやうになるから」と。  
學級の處罰を不當と考ふるもの、過半数は年長の児童で、實に女兒よりも男兒が多い。不可論者の多数を占むるもの即ち男兒の百分の六十五及女兒の五十七は全級の僅かの部員の非行に對して全級が責任を負ふは斷じて不當であると主張する。それにつき十歳の一少女は次の様に言つて居る。

教師が全級児童を學校に残すといふ事は何時に限らず甚だ不當である。何となれば全級は何も間違つた事をして居らぬから。且つ他人の過失に對してさうでない人を責めるのは全然間違つて居る。  
十一歳の男兒はこれに關していふ。

若し教師が非行者の當人を發見することが出来ぬとしても、それにして何も爲さない他の児童を罰せねばならぬといふ理由とはならぬから、全級を處罰するは不當である。

第二類は男兒の百分の十一及び女兒の十三を有す。それによれば全級

其 二

を罰するは非行者をして不正をなす様鼓舞する所以となるからとの理由の下に之を不當と考へてゐる。十二歳の一男兒はいふ。

非行者は自分等の爲したことに對して他の児童も自分等と同様に罪せらるゝことを見る時は、旨い事をしたと喜んで又更に爲さうとするであらう。

第三類は男兒の百分の九、女兒の十二を含んでゐるが非行者を發見するは正に教師の義務と考へて居る。十三歳の女兒が次の如く言つて居る所を見るに、偶々以て教師の隠れたる力に對する信仰がよく見はれて居る。

余は思ふ、教師は順を追うて全児童を一人／＼尋問せねばならぬ。此際騒ぎを爲さなかつた児童は否と應へねばならぬ。斯様にして取調べれば多分騒ぎをやつた者も否と答ふるであらうが、しかし其際彼れの顔面に注意すれば薔薇の如く赤くなるか然らざれば鉛の如く蒼白となるであらう。それに反し騒ぎをなさなかつた児童の顔色は依然たるものがある。

其 三



第四類の兒童は、教師は自分の事を捨て、場所を去つたのであるから、教室の不秩序に關しては教師自身その任に當るべきであるといふ。十三歳の一少女はそれに附け加へていふ。

若し教師は戸口の下に餘り長く立ち留つて其事に拘はつて居たとすれば兒童は又遊ぶべき權利をもつ。

と。十一歳の一少女は曰く、

若し教師が給仕と學校の事に關して話し合ふたものとするれば教師は學級の一人／＼の兒童に就いて取調べてゆくが至當である。若し然らずして學校外のあらゆる事柄について話し合つたとすれば教師は後で騒ぎをなした兒童を取調べべき權利すらない。

と。學級の責任といふ事に關して兒童の立場の如何であるかを見ようとするがこの研究本來の目的である。而してこの研究の結果が一般に小學兒童の意見の表示として見ることが出来るか、少くとも年少の兒童は罪科に對して自己も同時に罰せらるべきものであることを是認する

事が知られるのである。この事たるや一部分は家庭に於て他に代りて自分が害惡を引受くるを可とする教を鼓吹せらるゝの致す所でもあらう。かゝる精神は益々その美を助長するやう啓培を怠つてはならぬ。

比較的、年長の兒童中には、自分一人だけ悪い事をせねば學級の他の一員が如何なる惡事を働いても自分には敢へて關せぬといふやうな孤立獨善的の氣風の存するは畢竟有機的團體の一員としての自覺がないのに、座する。故に一面かゝる思想の蒙を啓くに留意すべきは言ふ迄もない所であるが、一面年齢の加はると共に兒童に對しては益々多くの自由を與へ、以て自主の能力を行使すべき機會と餘地とを提供するに吝であつてはならぬ。この點について歐羅巴諸國の學校の訓練の餘りに嚴峻に過ぐる嫌のあるのは大々缺陷の存する所であると思ふ。將來は男女の成人として自主自律の下に立たねばならぬ筈の運命を有する兒童であるから、學校に於ても家庭に於ても自治的精神によりて教養せられねばならぬといふ意見は一般に承認せらるゝ所である。少くとも兒童の青年期に入り込まうとする



頃迄には社會的の意識が見はれ始むるのである。而して教室も運動場も共に此等社會的の機能を正當に指導せしむるが上に幾多の機會を提供するのであるから、兒童をして餘程の度合迄自ら支配し自ら治むることを知らしむるは、正に後年の生活に於て、より大なる經驗界に立つに際し、彼等に必要なる特性を附與する所以である。

## 第七章 兒童の虚言

### 第一節 虚言と誤謬

誤謬とは、自己の觀察や記憶や信仰やが無意識的に客觀的の事實乃至正當なる論理的の思考の結果と相違するのをいふ。即ち誤謬は觀察思考の不充充分なる所から起る。しかも此等の不完全である事は、殆んど生來的で如何ともすべからざる場合が多い。換言すれば、人類の認識作用が共通的に不完全であるが其因を爲すこと少からぬから、學校及社會生活に於ては、練磨を重ね出來得る限り精緻なる觀察力と周到なる思考力を得しむるに努めねばならぬけれども、さりとて此種の誤謬に對しては、責任を負ふべき限りではない。されば誤謬も自己の輕卒さては怠惰なるが爲めに生ずるが如き際にありては、責務を免るゝことが出來ずして、道德上の過失となるのである。そこで教育上注意すべきことは、兒童をして、周到なる觀察、綿



密なる思考に慣れしめ、自己の経験の結果乃至學修の成績が明瞭的確にして寸分も誤らぬ時にのみ甫めて満足に感ずるといふ風に馴致せしめるにある。反言すれば半知半解に満足せざらしめよと言ふにある。蓋し半知半解は全く知らず全く解せざるものに比してより以上の累を及ぼすことが少からざる故である。兒童を誤謬より救ひ思慮ある國民たらしめんが爲めには單なる言葉主義に依る學習や淺膚にして難駁な知識の注入を避け之に代ふるに銳利なる觀察透徹せる經驗、明瞭なる表象的確なる概念、眞率平易なる言語を以てせねばならぬ。

虚言とは陳述と事實との間若しくは談話と正當と自認せる思想との間に於ける意識的の相違に名づけたるもので陳述の内容と言語とは最早一體とならず言語は眞實の思想を蔽はんがため、の手段として用ひられる。故に上述せる誤謬即ち論理的知的の錯誤に加ふるに情意的方面の缺陷より來る間違が相結んで虚言となるのである。夫の聖書中に「二つの心にて語る」とある如く二様の思想を有して其一を語ると見るが眞を寫すに

庶幾いものである。虚言者は自己の意中に考へてゐる事と聽者が自己の表出せる言語によりて當然考ふべき事との間の相違を故意的に構成するものである。故に虚言は思想と言語との自然的一致を割き兩者の間に嚴たる隔壁を築かしめるに止らず同一人の内的生活に分裂と混亂とを起さしめねばやまぬ。何となれば不正なる思想と麻痺せる言語とは漸次健全にして正當なる言語に相應する思想を墮落せしむるにあらざれば消滅せしめずにはゐないからである。最も恐るべき忌むべき惡徳の一として教育者のをさく警戒を忽にせざるもの誠に故ありと言ふべきである。

### 第二節 虚言は先天的か後天的か

虚偽は先天的のものであるから、兒童は生來立派なる小虚言家であるとの思想は舊に中世の神學を支配して居たに止まらず、モンテソーヌやボンデインやペレリの如き人々も亦兒童にありて不眞實は普通一般事で或程度迄は少くとも先天的であるとの意見を抱持せるかに見える。モンテソーヌ



後天説

は虚言と利己とは恰も身體の成長するが如く、兒童の内部に増長するものであると唱へ、ボンティンは又總ての兒童は虚言者であると書き、ペレーも此意見に同じては居るがその根本理由としては吾人は既に生後一ヶ月目頃から或は嬰兒の泣くを賺さんがため、或は入浴を取らんが爲、欺瞞的の所爲に出づる不注意等を擧げて之に歸してゐる。ルツソ一の如きは之に反し、總て造物者の手によりて造られたるものは皆善である事、又總てのものが人類の手又は文明の下に不良となるものである事を主張してゐる。併し眞理は兩者の中間にある。恰も生時に際しての兒童の心的状態は、道德的乃至非道德的性質の何れも皆無であつて、此等は漸を追うて發達するものであらう。即ち初生兒の性質は眞實にもあらず、不眞實にもあらず、正直にもあらず、虚偽でもない。或は清淨無垢といひ、或は虚偽者といひ、何れもその眞を去ること遠きに至りては同一である。小兒は決して道德的實在とは言ふことは出來ず、寧ろ善ともなり惡ともなり得べき自然の素質を具へて居ると見るべきである。かゝる意味に於て吾人はサリーと共

サリー氏の説

に兒童をば大人の概念に従ひ、善とか惡とか純潔とか虚偽とかいふ種の範疇の中に分類しようとするは、不當の甚しきものと言ふに躊躇しないものである。尙觀過すべからざるは成人の立脚地から眺めて、虚偽と認むべき者でも、兒童にありては多くその然らざることを發見することである。即ち不眞實に對する意識、虚言をなせる企圖が、屢々兒童の所謂虚言中に缺如せる事あるは、吾人の日常經驗する所である。故に成人の見て眞實とし若しくは不眞實とする事も、兒童は爾かく明瞭なる觀念を有するものでなく、往々にして之と背馳する者を有する事すら少からぬを知らねばならぬ。但し兒童には屢々先天的にして父祖より傳來せる素質傾向なるものがある。かゝる所から兒童には想像や利己心に基して不眞實に導かるゝ傾向もあれば、同時に本能的に自ら眞實を好む傾向もある。此等傾向の比較的の強さや表示の數やは各兒童によりて同じからぬ。例へば甲の兒童は不眞實の衝動多きに反し、乙兒童は眞實に傾くが如き類である。しかし如何なる兒童にも此兩者の傾向は認められるやうに思はれる。かゝる素質



を全然撲滅消除する事は人力の企て及び難き所とするも、反對の影響殊に教育の力によりて之を妨げ之を弱め、大部分變改をなすことが出来る所に教育者の領土がある。

### 第三節 虚言の種類

スタンリー、ホルキ及びサリーの分類に基づき、普通兒童に見はれ勝ちな重なる虚言について記述して見よう。

(1) 想像性の虚言。これは虚言中に於て最も無邪氣なるもので、虚言といふ語すらも頗る酷に過ぐるを思はしむる程である。總じて兒童が實際に遠い事物を想像することの出来る頃になれば著しく此種の虚偽が認められる。蓋し兒童の表象の鮮明にして想像の富贍なる實際と詩歌の世界とを混同し、眞實と非眞實との區域を區別し難きに至り、その見聞せし事柄を自己の直接經驗せること、信ずる場合が多い。かゝる際自己の信ずるがままに發表すれば虚言となるのである。實にや兒童の想像力の強き、往々

想像性の虚言

にして生理的の變化を惹起することすらある。

兒童が自己欺瞞といふ事に遊戯の主要なる興味を捧ぐるが如きは、最もこの天馬行空的の想像性を見ずものである。彼れは空しき杯を口にして水飲む様し、木葉を分ちて配膳したりとする。一片の木竹も或は馬となり、人となり、千變萬化窮る所を知らぬ。試みに人形遊をなせる少女と會話をすれば、『今人形が泣いた』とか『此兒は言ふことを聞かぬ』とかいふ類のことを物語るのである。若し暗示的の質問でもすれば、この人形に關して縷々絲の如き長篇の物語を誘ひ出すことも出来る。かく會話が敏活に進行しつゝある際に於ける少女の顔面の輝きより察するも、彼れは不眞實なる事を物語るといふ意識を有せぬを示すに足るものがある。これ兒童の遊戯に於ける想像的の生活は、全然自己を小説物語渦中の人たらしめ、或は兵士に、或は英雄に、或は動物に權化するからである。

尤も荒誕無稽法螺先生一流の傾向に對しては、適當の管理を加へねばならぬこと勿論ではあるが、全然是等を排斥し去るべきではない。詩歌藝術



乃至哲學の發達の如きも將來此種の性質に待つ所多きのみならず現實界の缺陷を補足し人類の諸能力を統合する上に資することが大である。消極論者中には物語類の如きは兒童をして虚言に誘ふものであるとの故を以て排斥するものあれどこれは賛同し難い所である。儘かに兒童に適當せざる物語類を過度に與ふればヒステリー性の虚言を助長する恐れはあるが爲めに假作物語、伽嘶、英雄談等を擧げて之を遠けようとするは所謂養に懲りて膾を吹くものである。たゞ兒童心身の發達程度に鑑み空想上の事柄と實際上の事實とを同一視し若しくは混同せしめざる所に教育上の腐心と技倆とを要する。

(2) 自衛性の虚言 兒童の生活に於て彼等を驅りて精神的の重要な根帯ともなりまた禍根ともならしめる力は實に自己保存の本能である。夫の物理學上に於ける最小抵抗則は又兒童の心的生活の上にもよく行はれるを見る。兒童は自己の保存を妨げられる事多きを加へ且つ精神的に束縛を感ずること甚しきを加ふるにつれ益々最小抵抗の地位に避難しかく

自衛性の虚言

て不眞實虚偽に陥ることが少からぬ。かゝる際兒童は先づ他の攻撃に備へんがために自衛する。而して自衛上虚偽は種々の艱難な時期にも一條の血路と救済とを與へてくれ自己の弱點や罪惡やを隠蔽するに好都合なものであるから兒童は此種の虚言に陥り易くしかも一旦味を覺えたが最後離脱し易からざるものである。若し兒童に對し、『この惡事は汝が爲したるか』問はゞ多くは之を否定するであらう。その他怠惰に對する遁辭として頭痛や腹痛に假託して學校を缺席し若しくは宿題を免れんとし、或は某事の發覺を隠蔽せんとして種々の口實を案出するが如き類が少からぬ。

元來兒童には早くから物事を隠し秘密に附しようとする傾向を有する。これは隠蔽せる者を他に發見せられざるを興がる無邪氣の希望から起るものである。ブライエールは三歳の兒童に於て既に態と隠蔽して自ら喜ぶ事實あるを語つて居る。或日一枚の皿が床上に落ちたる時、兒童は直ちに之を拾ひ上げて後ろに隠し父より『皿は何處』と問はれたるに、『もう

兒童の隠蔽欲



ない」と答へた。此答は何等虚言とは言ふことが出来ぬ。蓋し最早皿は目に見えぬ所にあるから、此意味に於て正答ではあるが、斯様な素振は虚言的のものであると。氏はいつてゐる。かく無邪氣なる本能的の傾向が一步を進むれば、夫の悪事の露顯や處罰やに對し、自衛の手段として隠蔽の惡習癖に陥ることがあるから、指導者は警眼之に備ふる所がなければならぬ。要するに隠蔽の虚言は自衛上有力の武器として、他の攻撃に備ふるものであるから、教育上此種の兒童に對しては、わけて公明正大の襟度をえしむるやう注意せねばならぬ。

(3) 激情性の虚言、これに屬する重なる者を擧ぐれば以下の如きがある。(イ) 阿諛より來るもの、特に女兒にありては愛憎好惡の念が強いから、之より生ずる熱望を満足せしめ、一は自己の快感を増大し、一は他の意を迎へて之を喜ばしめんがために虚言をなす事がある。男兒中にも軽度の虚偽と見るべき阿諛の存せぬでもない。元來阿諛なるものは感奮せる情的高潮より來る虚言で、往々無意識的に起るのであるが、かゝるはさして答ひべ

激情性の虚言  
共 一

共 二

き程のものではない。之に反し、爲めにする所あらんとするより來るもの、換言すれば對者の意を迎へんがために意識的に起るものは、不眞實の第一歩であるから、時を以て戒飭せねばならぬ。

(ロ) 我慢強情より來るもの、教師より責罰を受けた我慢強い兒童は他の仲間から「悲しからずや」と慰められても、否と答ふるが常である。或は不良の行爲をなしたるがため、室内に幽閉せられて午餐を奪はれたる兒童に、「空腹を覺えずや」と言つても、頭を振つて空腹ならずと答へる。かゝる實例は日頃よく見聞する所である。彼等は不眞實を語りて責罰に抵抗するのである。自負心を傷けられまいとして、外見を装ふのである。

(ハ) 恐怖より來るもの、他の反對又は憤怒に觸れんかとの恐怖は正直の陳述率直なる意見の發表を避け、他の喜び聞くが如き虚言をなすことがある。父の不在中器物を破損し、罪を他に轉嫁するが如き類である。此の如き恐怖は臆病となり、臆病は責罰に對する心配となり、虚言中比較的多くの部位を占むるものとなる。畢竟自己を信ずる勇氣の缺如せるに基くもの

共 三



で、殊に精神薄弱なる兒童に多く見る所である。

以上の場合に於て注意すべきは、兒童をして自己を主張するに、不適當なる事情に立たしめざる事である。例ば「私は汝の氣に入らざるか」の如き形式に於て發問せば、多くの兒童は一種の壓迫を受け、本意ならぬ事をも吐露するのやむなきに至るであらう。大人すら此の如き事情下にありては知れるをも知らずとし、若しくは事實と相反するが如き陳述をなすことがある。故に熟練なる教育者は兒童をして虚言に陥らしめる恐れのある断定や誓約等を兒童に要求せない。

(4)黨同性の虚言、英雄崇拜、偏愛又は憎惡といふ風な感情に基いて、此種の虚言を生ずるやうである。夫の虚言に慣れる兒童を見るに、如何なる場合如何なる人に對しても常に虚言を弄するものでない事が分る。多くの兒童は自分と不和なる仲間同志、殊に喧嘩でもしたる際などは格別此等友人に對し不眞實を語るも、毫も惡事にあらずと思惟するらしい。然るに自己の父母を欺くは普通彼等も忍びずとする所であるから、「汝の父に告ぐ

黨同性の虚言

べし」と言へば、容易にその虚言たる事を自白するものである。學校に於ても自己の親愛する教師を欺くは、少くとも善からぬこと位には考へてゐる。文明の程度が兒童の階段に立てる未開人、道德上の水準低き政黨、宗派乃至敵國間に於ては、此種の虚言は普通一般事である。即ち彼等の間には、個人的の好惡の念によりて眞實といへる觀念に、大なる異同がある。彼等は眞實を以て與黨に限れるものとし、その憎惡する敵者に對し虚言を語るは正當にして何等怪しむに足らずとする。換言すれば、眞實を以て自己の所屬團體内に於ける特種の所有物の如くに見、之に普遍的の性質を認めざるにある。

思ふに黨同性の虚言は個人的の利己主義に再考熟慮の加はるありて、稍々擴大せられたる意味の利己主義となつたものである。しかもその範圍は、父母兄弟教師同宗派間等に止り、依然利己主義の域を離脱することは出來ぬ。味方の人々を欺くはやがて自己の不利を招く所以となるから、此等には何事も正直にして隠し立てをせぬ。然るに自己のため、或は自己の所



屬團體のために、他人及他の社會を欺くは、自己並に所屬團體を利用する所以であるとするのである。若し兒童にして此種の虚言の見はれがあらば、一面その人生觀を向上催進して陋見を破り、一面その所屬の範圍を擴大し、以て眞實の私すべき性質のものに非ざる意味合を十分會得せしめねばならぬ。

義勇性の虚言

(5) 義勇性の虚言、道德學者より時として認容せらるる事ある、虚言はこれのみである。夫の危機に際し自己の生命を保護せんために虚偽を行ふすら、道德上不可とするのであるが、往々高尚なる目的を達する方便として虚偽をなすは、實際生活に於て必ずしも批難すべきものではないとし、以て誠實正直なる徳に對する一除外例を認め、膠柱彈琴の弊に陥るを避けてゐる。例ば親の一命に關するが如き場合にありては、其在宅せるを偽りて窮地より脱せしむるが如き、醫師が命脈旦夕に迫れる病者に對しても、明らかに事實を告げず、却りて詐りて慰安と希望とを與ふるが如き、何れも不正事にあらずして、道德上の本務である。

兒童に於ても往々之に近き例證を見ることがある。例へば仲間同志の懲罰を保護せんがために其實を告げず、知れるをも知らずとするか、若しくは全く虚偽の陳述をなすかの如き類である。此瞬間、兒童は全然自己の利害關係を離れ、一意友人の身の上の爲めを謀る、外餘念なく、動機の純潔可憐なる實に愛するに堪ふるものがある。しかし、弊害も亦これから起つて來る。蓋し此種の義勇性の虚言をなすは、嚴肅平凡なる道德律の單調を破る絶好の機會として、年少者の歡迎する所となり、往々兒童良心の興奮し易き状態の下、幾多の誤謬を伴生する危険があるからである。故に教育者は此種の虚偽を絶對的に排斥し、禁壓して、兒童純潔の心事を毀け、他の爲めに謀らんとする善良なる動機を萎縮せしむるの不可なるを知ると共に、事體の本末輕重を計較してその取るべきの道を誤らしめぬやう、實際の場合に就き深く兒童を警戒して其弊に陥らしめぬことを期せねばならぬ。

#### 第四節 虚言の教育的處理 (其二)



児童に對しては先づ虚言の因りて來る所を明かにし其事情を究むるが第一歩である。此の如くにして甫めて的確なる救済法を發見することが出来る。即ち彼れの虚言は生理的か、病理的か、意識的か、無意識か、防禦的か、攻撃的か等の性質を詳かにしたる後恰好なる處置を取らねばならぬ。責罰に對する恐怖より來る虚言に對しては公明正大の言行に出でしむるやうその薄弱なる意志力を勵ますが如き、黨同性の虚言者に對しては眞實の私有すべからざる所以の理を知らしめて狹隘なる見解を擴充するが如き、奔放なる想像より來れる者には現實と非實際界とを區別せしむるが如き、即ちこれである。かく適切にして應病施藥の手段を取るに至らば禍根は漸次根治するであらう。

以下小虚言を待つ一般的の注意を述べようと思ふ。心すべきは決して懲罰を加ふるに非ずして之を教誨し指導し向上改善を期するにある。多くの場合に於て虚言は児童の意識する所とならぬことを發見する。即ち唾棄すべき風な事も十分之を辨知してなしたるではなく、平氣に行つてゐ

るのである。故に指導者は道德的思想を鼓吹して虚言の惡むべく眞實の尊むべき所以を知らしめ以て彼等の幼稚なる心的過程を補足し催進する所がなければならぬ。之あらんが爲めには靜肅なる一室に児童と膝を交へて諄々教誨を垂るゝもよからう。或は道德上の概念を明かにして情調を強め眞實に對する好愛の念を喚發するが如き程度相應なる格言類を授けて諳熟せしむるも宜しからう。

小なる虚言者は多くは意志薄弱である。感情不平衡にして發作的である。爲めにその瞬間の急を免れんとして虚言を弄するに至るもの比々皆然りである。故に教育者は彼れに對し自信自重の念を喚起せしめねばならぬ即ち児童をして先づ己自身の信用をえしめなければならぬ。虚言は自己の面目にかゝはる事何人も自己の言語をさながらに信ずるものなることを強く深く意識せしめねばならぬ。しかも道德上の直観觀念概念等は之を意志行爲に幾度か繰返す事によりて生命を生ずることを知らねばならぬ。



假令豊富なる知識を有するも、猶不眞實家たり、虚言者たるものあるは、世上の實際である。これ眞實に對する觀念と之を好惡する感情との間に連鎖なく、各異特立するからである。眞實の雰圍氣中に人と爲り何等疑惑の念を挟まなかつた兒童が一朝虚偽の習慣の漲れる生活に入りたりとせば、果して如何。此處にても猶從前の立脚地を把持して誠實裡の人たりうるのであらうか。問題は茲に至れば兒童の知ることの多少ではなくて、幾許の信仰を有するや否やの一點に係る。換言すれば絶対善絶対知なるものに對する信仰があつて、甫めて兒童を誘惑より保護し、危険より救済することが出来る。究竟確信と意志力とは不眞實に打勝つ可能性を附與する重要なものとは言ひえられるけれど、猶未しき所がある。唯信仰となつてこそ、眞に害惡と戦ひ、千萬人の中我往かんの大勇猛心を起さしめる。道徳の眞髓は所詮慎獨にある。目に見えぬものを恐れるにある。しかも、此事は信仰なき人の心には捕捉し難い所である。

兒童に敬虔の念を扶植するの肝要なるは、上述せる如くであるが、同じ意

味に於て虚言に對する責罰は之を外部的に加へずして、内部的に課せよと要求したい。何れの場合たるを問はず、兒童をして率直なる懺悔、赤裸々な告白に至らしむるを期せねばならぬ。此の如くにして有効に永續する習性を養成することが出来るであらう。普通の兒童ならば意識せる虚言に對しては絶えず或種の不安を伴ふものである。殊に最初の虚言者にありては、最も良心の苛責を感じることが強く且つ切である。實に懺悔の情と信仰の念とは、兩々相待ちて人の生活を向上啓沃する滋養劑である。

第五節 虚言の教育的處理 (其二)

兒童を指導して其精神の發達を企圖するものは、一面、兒童に對して誠實の美德を培ふと共に、他面自ら省みて虚偽より遠からしむる手段に腐心せねばならぬ。これアドルフ・マツチアス氏が「吾人は愛兒、ベンヤミンを如何に教育すべきか」の書中に陳述せるが如く、積極消極兩面の用意を要する所以である。先づ積極的方面に就いて言へば、



其 一

(1) 兒童を圍繞する空氣は誠實に充ち、兒童をして出頭没頭之を呼吸する様あらしめねばならぬ。殊に家庭裡に於ては虚言てふ恐るべき萌芽の生育を助長するが如きあらゆる機會を兒童の身邊より遠くするの用意は、兩親の情愛に訴へて之を請求せざるをえない。

(2) 指導者は自ら公明正大赤心を推して、兒童に接し深く彼れを信じて、かからねばならぬ。他人を疑ふすら宜しからぬ。況んや親愛する兒女をや、弟子をや。須らく夫のトーマス、アノルドに倣ひ、指導者と子弟との間には虚言を構ふる間隙なからしめんことを期すべきである。然るに往々我子は虚言をなすか否かを試みんとして、故らに發問を弄するものがある。かゝるは偶々不眞實に驅るに資するばかりで、思はざるの甚しきものである。

(3) 善き實例を示して、兒童をして、そ、る、欽、仰、の、念、を、起、さ、し、む、る、や、う、に、あ、り、たい。兒童を正直に躋ける教育にはわけて實例が重要である。教師兩親の眞實なることを兒童が無限に信ずる限り、單に之を模倣して率直とな

其 二

其 三

消極的方面  
の處理法

るのみならず、此信賴は兒童後年の生活に於て諸種の誘惑に處するも、毅然として彼れを守る一の力たらしめる。それにつけ指導者は自己の誤謬や缺陷やは之を兒童の面前に於て自白することを躊躇してはならぬ。知的の誤解については兒童は之を寛容することがあるけれども、指導者の陰蔽糊塗、矛盾するが如き道徳上の缺陷に對しては、毫も假借する所なく、之を追撃せずんば止まざるものである。故に眞實といふ點に關しては、指導者はその權化たるが如き觀を以て兒童の迎ふる所となり、苟くも虚偽の口より漏れ出づることよきを要する。若し指導者にして兒童の信用なくば、千百の訓誨も空しき口舌上の説教としてよりは聞かれぬであらう。

次に指導者の消極的方面に對しての用意を述べる。若し兒童にして突然虚言を弄するが如きあらば、指導者は之を戒飭し、教誨するに先ち、自己の言動を猛省し、直接間接の影響の然らしめたるものではないかと吟味を遂げねばならぬ。此の如くすれば、案外罪は兒童にあらずして、寧ろ禍根は指導者其人に存するの事實を見ることが屢々である。故にザルツマンは其



ザルツマン  
氏の意見

著「蟹の書物」中、兒童教育の等閑に附せらるゝ罪を不良なる家庭と父母の怠慢とに歸し、「家庭に於ける不良なる教育の原因は父母にあれども、父母は自覺せぬ。若し兒童を良教育の效果に浴せしめようと欲せば、先づ不良なる家庭教育の因由する所は何れにあるかを知らねばならぬ。」とし、更に進んで「兒童は清淨純潔雪の如くである。この天真を傷めるものは不良なる父母の教育である。世の父母たる者は兒童を責罰する前に、何ぞ自身が兒童に對してなせる過失と不注意とを責めざる。」と絶叫し、更に「父母が兒童に對して不快を感じ之を邪魔物視するは畢竟兒童教育の方法を了解せぬから起るのである。兒童に不從順、不規律、強情、怠惰、虚偽等の諸惡徳を自ら教へ、さて後に至り其兒に對し不快を感じずるは、己に出でたるは己に反る當然の理である。」とまで極言してゐる。而して氏は滔々たる家庭裡如何にしてこの虚言者を養成しつゝあるかを指摘してゐる。これ消極的方面に於て、大に反省をなすべき視點と言はねばならぬ。

(1) 早くより虚言を教へたることなかりしか。客の訪問するものあれば、

其

一

其

二

其子に命じて不在と斷らしむるが如き、表面欺待して客の去りし後惡口至らざるなきが如き、父にはかくかく言ひなして眞を告ぐべからずと母の教ふるが如き、泣く兒を賺さんとして一時遁れの言辭を恣にするが如き、數へ來れば虚言を教ふる日常の機會は僕を更ふるも足らぬ。

(2) 虚言を稱揚したることなかりしか。兒童は周囲の人の注意を惹かんがための好奇心から口に任せて途方もなき虚言を吐いて得々たることもある。苟くも虚言の性質を帯びたるものならば、如何に巧妙を極むとも、斷乎として之を排斥すべきに、心なき父母は或は頓智をたゞへて哄笑を以て之を迎へ、爲めに機會ある毎に戲言交りの虚偽を弄して慾望を遂げしめることが少からぬ。

(3) 兒童に虚言を弄する機會を與へざりしか。兒童よりの應答に虚言あらんと豫期せられる場合には、寧ろ最初より之を問はざるの優れるに若かぬ。學校にて教師が堪へざる程の負擔を兒童に向つて要求し、威壓手段を取りて之が遂行を強ふるが如きは、虚言に至る道を開くやうなもので、慎し

其

三



まねばならぬ所である。

(4) 兒童が事實を告白したる時に之を責罰せざりしか。正直に自己の過失を告げて詫ぶるに拘はらず峻厳度に過ぎ寛容せぬ時は事實を陳述して責罰を受けるの愚を了り兒童は沈黙して之を陰蔽し或は他に罪を嫁して自己の痛苦を免れんとするに至る。故に罪状を自白したる時はその勇氣正直を稱揚し自尊自重の念を熾んならしめねばならぬ。ワシントンの正直も賞すべきことではあるが茲に至らしめたる父の寛容指導大に機宜に適ひたるものがあることを知らねばならぬ。

(5) 同輩に對し信義を蹂躪する行爲を取らしめざりしか。兒童の社會も大人のと等しく輿論あり制裁あり正直なるは賞せられ怯懦なるは卑しめらる。而してこの社會に信用あるはやがて他日大人社會に於て信用をうる所以である。然るに父母は動もすれば彼等の交際を無視し多寡が子供の約束など見衒り信義を蹂躪するを敢てせしめ毫も齒牙に掛くるに足らずとするは甚心なき仕打と言はねばならぬ。

其 四

其 五

## 第八章 兒童と暗示作用

### 第一節 暗示の意義

人は暗示的の動物であるといふことも亦一面の眞理を道破したる言で、總ての兒童は言ふ迄もなく成人と雖もその約三十パーセントは被催眠の可能性があるので見てもラキによる暗示の人生生活に於ける意義の一面を窺知することが出来る。

我廣島高等師範學校附屬小學校にては毎週水曜日の最後の時限に所謂合同體操の名の下に全校兒童が集合して紅白の二組に分れ歩兵戰騎馬戰砲兵戰突擊戰の順序に四種の遊技を行ふことになつて居る。かゝる際に吾人の注意を喚起する事實は最初の歩兵戰に勝を制したる組が大方最後の勝利を占むる組であるといふことである。反面から言へば第一着手に於て敗れた組は意氣舉らずして終始するといふことである。此等は固

日常生活に於ける暗示



より常に必ずしも然るといふ譯ではなく、時に第一回に敗れた組でも回を重ねるにつれて頹勢を挽回し來るといふことも少しとはせぬが、注意深き観察者にとりては如上の現象も亦決して看過し能はざる所である。何事によらず、最初の難關を突破すれば、それに續く第二第三の關門は自ら刃を迎へて解破するに難からざるものである。俗解して「勢がつく」とか「勝癖負癖がつく」とか言つて居る。「貧すれば鈍する」といひ、「桶が腐れば菜が腐る」といふが如きは、亦如上の現象を解釋するに足らしむる諺である。強ち一片的の見解を以て説明し盡す譯にはゆくものではないが、少くとも此等の事實に於て暗示作用が重要な役目を行つて居るは、否定することが出來ぬであらう。

登校時と退散時以外には教師に對して敬禮をすることを要せぬは兒童の熟知して日常實行して居る所である。然るに何等かの機會に於て卒然一兒童が時ならずして敬禮を爲すときは、期せずして並み居る他兒童は我後れじと之に倣ふのである。所謂一犬虛に吠えて萬犬實を傳ふとはこの

事である。

かゝる事例は、單に小兒間に止まらず、成人の間に於ても屢々遭遇する所の事實である。夫の犯罪、自殺虐殺等に關する新聞や雑誌などの所謂三面的記事が如何に暗示的の悪影響を及ぼすかは、思半ばに過ぐるものがある。爲めにモイニング、ヘラルドの主筆はその紙上に殺伐な行爲、自殺、其他不良の行爲に關する記事をば掲載しないことを宣言したのである。蓋し此種の記事は感染的影響を與ふること甚だ多く、世道人心の上に寒心すべき陰影を投ぐるを痛切に看取したるに依る。世の新聞雑誌の經營者は何人もかゝる好實例に倣ふ所があらまほしいのである。

又夫の累犯者の數の如きも監獄の制度組織と大なる關係を保つて居る。即ちこれも畢竟暗示の可能性如何によりて増減するといふことを示すものに外ならぬ。ラキによれば白耳義にては累犯者の數は七十パーセントで、佛蘭西にては四十パーセントである。然るに單獨監房に幽閉することによりて前者は十パーセントに減じ、又個別的に懲罰を加ふる組織を取り



暗示とは何ぞ

ポールドウ  
キン氏の説

たることによりて後者は二七弱パーセントに激減したといふことである。此等は相互間の教唆談話等によるのではあるが、亦以て暗示なるものが人生の各方面に亘りて大なる勢力を振ひつゝあるのを知り得るのである。然らば暗示とは何であるか。思ふに暗示は模倣作用に基いて起るもので吾人の精神生活の大部に於て暗示の表示を見ることが出来る。然るにこの暗示をば特に催眠状態を惹起する刺激にのみ限り用ふるが如きは、その用途餘りに狭隘に失するを免れぬ。更に暗示なるものは注意の一形式として考へることも出来るし、又近時暗示は夫の感官の直接の興奮と同様に、思想によりて生ずる一種の運動的の興奮であると考ふるものもある。後に至りて述ぶる如く、暗示の種類は多様であるが、此等暗示の状態として如何なる特徴を具ふるかといふに、或思想や心像や刺激やが外部時に内部からもから意識中に突如として入り來るといふ事である。かくて之に伴生するを常とする筋肉運動、意志行爲を惹起する傾向を生ずるのである。吾人はポールドウ、キンと共に或種の意識及外部から動く刺激と以前より

相聯合して居る様な運動との二者を包有する反應作用をば暗示と稱せんと欲するものである。反言すれば暗示は一の反應作用である。而してその反應たるや以前の經驗に於て多少之を生起せる刺激や觀念と既に聯合せることのあるといふ多少の意識及かかる刺激や觀念に結べる運動を包有するものである。故に習慣になれる意識的の簡單な模倣は矢張り暗示と稱すべきものであるが、意志といふべきものではないのである。何となれば此種の模倣には意識的の選擇作用もなければ、反省省慮もなく、願望もなく、又努力といふこともなく、單に知覺と運動とが有機的に聯合を保てるといふに過ぎないからである。之に反して有意的にして繼續的な模倣には如上以外の新要素が加はるのである。即ち舊習慣の打破、敏活なる選擇繼續的努力等はこれである。而して兒童の意志はかかる有意的模倣を基礎として生起するものである。

暗示を以て注意の一形式となす所以のものは、蓋し暗示せられたる知覺や觀念の上に烈しく注意が集注せられるからである。而してかく注意の

暗示は注意の一形式なりとの説



集注するがために、精神状態は批判的に見る比較差別選擇といふやうな作用は影を潜め、爲めに信仰を抑制する運動作用まで變化を來すのである。實にかゝる注意の集注状態と言へば即ち反對する運動作用を全く防遏するといふことであるが、これが暗示に必要な基本的作用である。故にミユンステルベルヒは其著心理學中に「暗示なるものは或種の行動に對して運動中樞を變化せしめる。而して反對の運動を生起することを不可能とし、之に依りて反動的に又反對の行動に相應する觀念をも如何なる感覺上の刺戟があつても發動せしめないやうにするものである」と言へるはよく此間の消息を語つて遺憾がない。

猶暗示の意義を明らかにせんがために、他の二、三類似概念との異同を擧げて誤解と混同とを避けようと思ふ。

暗示は之を強迫觀念又は強迫衝動と區別しなければならぬ。強迫觀念はかゝる觀念の間違であるといふ意識と相結び又強迫衝動によりて起れる強迫行爲は、不正であるといふ意識と相結んで居る。故に強迫觀念や強

暗示と強迫  
觀念との異  
同

迫衝動やに對する有力なる反抗が長きに亘りて繼續するのである。例へば街路を行くに電柱の數を何本／＼と計上せねば氣が濟まぬとか、體操の際教師が側へ來て矯正しようとする時思はず手を擧げて教師を打つとかいふ場合には、慥かに電柱を計上することの無意義教師を打つといふことの不正を意識し、かゝる病的觀念かゝる病的衝動を驅逐せんとして之に反抗するのである。然るに暗示にありては自己の觀念が間違つて居るとか、又は自己の行爲が不當であるとかいふ風の反省もなく、更に是等に抵抗して苦悶を覺ゆるといふ種の状態を見ぬのである。

眞實なるもの的確なるものとして行爲に影響する上より言へば暗示と信仰とは頗る類似してゐる。しかし以外の點に於てこの兩觀念は慥かに區別することが出来る。此事は眞理であるとの實證をこそ經ねど、若し機會と事情とが許しさへすれば、親しく之を経験し得ると考へらるゝものは先づ之を信するのである。例へば地理上博物上の知識の如きはこれである。蓋し吾人は適當なる機會、例へば旅行か其他によりて該事實の存在を

暗示と信念  
との異同



確かめ得ることを信ずるによる。同様に吾人は其ものを親しく見たことはなく、否生涯見ずに終るであらうにしても、氷山や極地の存在に就きては疑を有たぬ。次に吾人は自己の考乃至識見が眞理を洞察するには餘りに狹隘であると思ふことから或物を信ずる。絶對の實在に關する如きこれである。以上兩者の如き場合を指して吾人は之を暗示とは言はぬ。或時期に於てその眞理の證明を親ら遂げられるといふこと、乃至かゝる證明は單に自己の限られたる見識を以てしては考ふべからずといふ反省は兩つながら暗示の際には見はれぬ。暗示にありては明白に證明せられたる事實として、或種の實證などの媒によらず直ちにさながら心理に攝取せられるのである。

暗示は又行爲の動機としては、たらく限り、に於て外見上命令と相類して居る。命令にありては或は恐怖の念によりてか、或は服屬的の感情によりてか、或は命令を正當なりとする自由意志の決定によりてか、その何れたるを問はず、恰も自己の意志に出でたるが如く行動するのである。併しなが

暗示と命令との異同

ら他人の意志の影響せるものであつて、その正否やその内容やは自己の理性により徴檢し得るとする所の意識は命令と共に隨伴し、時に發露する所命令者に公然反抗するのである。併しながら暗示にありてはかゝる事がない。切言すれば被暗示者がその暗示せられたることの正當なるか否かを徴檢し、又は之を眞とし偽として認識するといふことになれば、これと同時に暗示は消滅したるものである。故に命令に於て命令者に對し、疑問を挟みうる種の事柄は、暗示に於ては除外せられて居るのである。

## 第二節 暗示の種類

暗示は主としてその作用する精神的方面より眺むるときは、(一)知性に関する暗示、(二)感情を惹起せんがため、暗示、(三)慾求を生ぜしむる暗示となるべく、行爲を誘發する暗示の性質よりいふときは、(一)單に動機のみを與ふるもの、(二)動機とそれによりて生ずる決意とを與ふるもの、(三)直接に決意を兒童の精神的內容に與ふるものである。例へば被暗示者に對して「勤勉は成

性質、作用より見たる暗示の種類



功の母である」と暗示するが如きは動機のみを與ふるもので、『勤勉は成功の母である。故に汝は成功せんと欲せば勤勉なれ』は動機と決意とを與ふるもので、『汝は勤勉なれ』といふは決意のみを與ふるものである。

又暗示が自己の意識よりか意識以外より來るかによりて之を(一)自己暗示(二)他動的暗示となすべく、暗示の起る意識状態によりて(一)覺醒時の暗示(二)催眠状態の暗示(三)病理的の暗示となすべく、暗示現象の行はるゝ範圍よりすれば(一)個人的暗示(二)社會的暗示といふ風に區別して考ふることも出来る。今左にポールドウキンの著『兒童及種族に於ける精神的發達』に基き暗示の多様なることに就き一瞥をしようと思ふ。

生理的暗示  
感覺的運動的暗示

生理的暗示 生後第一ヶ月頃に於て、乳母は嬰兒の顔を下に向け軽く脊髓の一端をたたく時は眠に落ちるが如き、又眠れる人に冷やかな物を當てるときは寢臺の上から落ちぬやうに足を屈めて自衛的態度を取るが如きは、これである。かゝる際刺戟は之と聯合せる運動を誘起するものである。感覺的運動的暗示 生後六ヶ月の兒童は着衣せしむる時にはモウ兩手

意識状態又は範圍より見たる暗示の種類

自動的暗示

を伸張し、頭を下へ屈しなどする。而して狂れたる乳母が傍に居るといふことだけで子供は泣くことを止めたり、眠に就いたりすることが出来る。かゝるは感覺的運動的の暗示といふ。

模倣的暗示

自動的暗示 ポールドウキンは他人を睡眠せしむべき可能に關して實驗をなしたのである。それには被験者が或人の睡眠の有様を心中に思ひ浮べることが明らかになればなる程、被験者自身も益々眠氣を催し來るのである。かくて約十分後には睡眠に落つるのであつた。かゝるを自動的暗示といふ。

統制的暗示

模倣的暗示 子供が木片を取つて續け様に大鼓を打ち、或は一度聞いた言葉を幾度も繰り返す等のことをする。即ち兒童が一度適當な運動の聯合を得たる際には同様な事を繼續して模倣することに於て、殆んど飽くを知らざるものである。一度成功を占めたとする觀念は、常に運動を惹起する暗示として働き、かく循環的の反應作用を見はすに至るのである。

統制的暗示 兒童が兩手を屈伸したり、握つたり、上下したりすることを



知れば、最初の中は何時にても、何處でも、かゝる運動をなすのであるが、此等は漸次統制せられて来る。換言すれば、かゝる自然的の手足の運動は抑制を受けて適當な時、適當な場合にのみ、之を用ふるやうになるのである。これ畢竟運動を統制する所の視覚、聽覺、觸覺と筋肉覺との間に一種の聯合が作られ、爲めに筋肉感覺と聯合せる運動に對してのみ、統制的の感覺は暗示として働くからである。

反對的暗示

反對的暗示 若し或兒童に此物は甘味しいと言つて出したものを、不味と之を拒否して反抗の意志を示すことがある。又兒童が外出用の帽子や外套の取出されたるを見れば、假令外出を喜ぶとは言へ、拒反の態度を示すことがある。この如き反抗的精神は大人に於ても往々見聞するのである。上述せる統制的の暗示に於ては、筋肉運動が或種の制約を受けるといふことであるが、此場合に於ては、かゝる運動的作用は抑壓せられて却つて反對の方面に驅らるゝ迄に強度となつたものと見るべきであらう。主我的自立的の意志の萌芽も此處にあれば、他人の申出をば一切否定し去る風な頭

曲りも此處から生ずるのである。

巧妙なる演劇家、演説家、乃至教育者等は自己の懷抱せる願望、思想、感情をば、或は身振に於て、或は抑揚ある言語に於て、或は緩急ある語調に於て、さながら之を聽者に傳へ、己と共に拉し去るの概がある。暗示はかゝる場合に於ては上述せる自動的暗示の擴充せるものとして考察することが出来る。

第三節 暗示の効力

暗示の効力の範圍 暗示の効力の可能なる範圍は、感覺、知覺、記憶、感情、意志、及動作等精神生活の各方面に亘るのである。換言すれば、暗示の現象は特別なる意識にのみ現はるゝものではなく、意識の如何なる状態にも見られるべきものである。故に速水文學士は『暗示の作用は實に精神作用の基本的性質に屬するもので、人は社會的動物であるといふ語に同じ確かさを以て、人は暗示的動物であるといふことが出来る。』と言つて居られる。

効力變化の條件 暗示の効力如何といふことは、第一暗示として、働く、刺

暗示の効力の範圍

効力變化の條件



載の性質や強度に非常の關係のあるは言ふ迄もない。即ち暗示となれる感覺や觀念の勢力が強大で之に反抗すべき力が乏しきか若しくは暗示と一定の觀念又は動作との聯合が至極密接なるときに於て最も有効となるものである。

次に暗示の効力は個人によつて色々の差違がある。ラキは自分の子供である八歳と六歳半との兄弟が共々に一二時間位他の兒童と遊戯したるのを觀察せるに、弟の方はその舉動や身振りや言語の發表迄悉く他の兒童のを真似るのに、兄の方は殆んど興り知らぬ様であつたといふ。同じ兄弟と雖も被暗示性にはかくばかり相違あるを示すは驚かるゝばかりである。斯様な差違を認めしめる機會は甚だ多い。例へば教室に於て兒童が一旦自分の記憶した所として發表したる事に對し、教師より、「果して汝のいふ所はその通りか」といふが如き質問をすれば各個人々々によりて區々なる答をうるのである。即ち甲の兒童は倉皇として前言を取消し、乙の兒童は狐疑決せず、丙兒童は確く前言を固執して動かぬが如きをいふのである。

以て個別的の被暗示性の如何を察知することが出来る。

其他兒童の被暗示性は年齢によりてもまち／＼である。兒童が若ければ若い程被暗示性が強い。又女兒は概して男兒に比して被暗示性に富んで居る。知能の劣等なる兒童はより強い被暗示性を有する。其他氣質によりても趣が違ふ。モイマンによれば衝動的にして多血質なるは特に被暗示性に富み、粘液質なるは甚だ乏しいと。猶一時的的精神状態例へば豫期疲労感情の興奮せるとき、群衆の中にあるとき等は暗示に對する感應力が昂進して時に辨別判斷の力を失ふに至ることすら少しとせぬ。

暗示の効果 暗示は單に信仰能力等を生起するのみならず、精神上の疑惑、不能状態をも惹起する。衝動行爲と言はず、これが障害防遏といふことでも暗示することが出来る。吾人は一般に自己を信ずること篤きが故に、又自動的の暗示も大なる影響を與ふるものである。ナンシーやパリイではこの暗示が最も熱心に研究せられて既に教育上精神療法にまで利用せられて居る。ギューヨに從へば、盜癖あり、懶惰にして無性なる人が暗示に



身體方面

よりて正直勤勉にして清潔好の人に變化し得るといふ。この暗示を利用することによりて、異常の傾向を支配し、又薄弱若しくは尋常なる傾向を一層増大ならしむることも出来るのである。

次に教育者は暗示によりて身體的狀態に影響を與ふることが出来るかといふ間に對しては、直ちに然りと答へざるであらう。若し解剖學や生理學の深い知識を有し、從つて兒童の或種の病的狀態をば神經上の機能障害と認めうる所の教育者であつたならば、醫家と同様に、此種の狀態をば暗示によりて治療し得るのである。このために別段催眠術を行ふのではなく、單に教師の暗示に對し、兒童の心からの歸依信頼があれば充分である。否多くの場合に於ては、此種の信頼すらも要せず、病的の見はれを爲す兒童の意思を他に轉向せしめ、かくて暗示を與ふれば足りるのである。蓋しこれといふも或機關の實際の障害から來る苦痛ではなくて、神經の作用に基するものであるが故に、暗示によりて之を消殺することが出来るのである。強烈な號泣、輕躁な笑、戰慄、憂悶などを治するが如きは、教育的暗示の結果と

して生起せしめることが出来る。しかし、吳々もかいる事が暗示の本來の面目であるといふ風に考へてはならぬ。寧ろ此種の病癢が暗示によりて除かれるといふ意味は、畢竟此種の激情に伴ふ身體狀態を止むるといふことであるから、暗示の目的は身體狀態を變へるにありと見るよりは、此種の激情を除くにありと見るを妥當とする。

學生に多く見はるゝ機能障害と言へば吃音である。これは主として心理作用に歸すべき神經上の言語障害である。故に多くの精神現象と同様に暗示によりて好影響を與へうる譯である。年經たる吃音者にしてその禍根が深い者でも、大抵催眠術に於て治するとさへ言はれて居る。其他教育的治療をなしうる教育者が暗示によりて好果をうるものには、虚言的傾向、好闘家、左利、拇指を甜る子、爪噛む子、頭を振り目を瞬く子、頭曲り、學校忌避者、人嫌する兒、盜癖、偷食癖等がある。固より催眠術を用ふるに際しては、非常に強烈なる教育的手段として輕視すべからざる危険に對し警戒を怠つてはならぬ。況んや教育上の全治療法は暗示であるといふ風に總てを之



暗示と催眠

に期待してはならぬのである。

暗示と催眠、暗示の最も顯著なる形式の一として半睡的の催眠状態に言及するの必要がある。しかも催眠状態を以て普通の意識と没交渉なるものとして特別視するが如きは謬見と言はねばならぬ。即ち催眠状態における被暗示性の現象は兩者の意思相互間に行はれる神祕的關係と見做すべきものではなくて、寧ろ健態の精神に見はるゝ所の被暗示性が非常に昂進したるものに過ぎぬ。換言すればかかる状態は與へられたる暗示を無條件に攝取し、之に反對する觀念の生ぜざる場合である。

被催眠者に光輝ある物を續け様に諦視せしめたり、軽く摩擦したり、語勢ある説得を爲したりすれば、斯様な状態になるのである。被催眠術者は前で爲される運動を真似し、林檎であるといつて渡された葱を食ひて矢張り林檎の味を感じ、葡萄酒と言つて與へられたる染色液を飲み、白紙を出して赤十字があるといへばその様な色覺を有し、加之綠色の殘像をさへ認むるのである。彼れは以前に讀める書物の全頁を暗んじて繰返すことも出來

るのである。而して視覺的の觀念の場合には甚顯著に眉毛眼瞼の運動を示し、聽覺的の觀念の場合には頭の運動、嗅覺的の觀念の際には鼻の運動、觸覺的の觀念の際には指の運動を示すのである。斯の如き場合に於ても吾人は又觀念は運動と相結合して居るといふことを認むるのである。若し被暗示者に汝は大将であるといふことを暗示すれば、彼れは命令的語調を以て語り、軍人の如き素振りを示すのである。即ち彼れは大将といふ感じを有し、その様に行爲する。催眠術の効果如何といふは主として催眠術者の權威と被催眠者の信頼とに關係する。

所謂睡遊といふ名の下に言ひ見はされてゐる催眠の階段に達すれば、覺醒後にも影響を與へることが出来る。かかる階段にある人が或種の命令を與へらるれば、此等は數時間後否數日數週間後に至りても之を實行するといふ。郵便切手が膏藥であるといつて腫物の上に貼らるればやはり膏藥と同様の効果を擧げる。故にジェームスは「患者は悉く術者の言を信じて命ずるがまゝに行ふ。通常意思の及ばざる範圍例へば唾、分泌、顔面の



紅潮、蒼白、體温、心臟の鼓動の變化、腸の運動等の如きものでも術者の堅い決心とその結果の發生に對する患者の確信とさへあれば、之を生起することが出来る。」と云つて居る。

常態の暗示作用

暗示の教育的治療に於ける効果は上述せるが如く、精神上、身體上、兩方面に亘りて卓越なるものがあつて時に驚嘆を禁ぜざらしめるとはいへ、これが適用の實際に當りては常に念頭に逸すべからざることがある。他なし、教育上に於ける常態の暗示作用といへば所謂人格から人格に、及す感化であつて最も自然の間、持續的且合理的に被教育者の上に働いて居るものである。これに比すれば催眠術の如きは非常時の教育的手段として特殊な場合に限り用ふべきもので、細心の注意を拂ふでなければ禍害を貽す虞があるといふことである。

#### 第四節 暗示と環境

細胞や生物の上に加へられたる刺激は何れも運動を惹起するのである。

暗示は適應なりとの意義

而して愉快にして有利なる刺激に對しては之に接觸せんとし、不快にして有害なる刺激に對しては之より遠ざからんとする傾向の存するは生物學の教ふる所である。心理上の根本作用も亦かゝる生物學上の根本作用に相應する。意識上に與へられたる刺激は何れもこれに相應する運動の反應を生起する。この如く生物學上に建設せられたる原理は又暗示の場合にも見はれ來るのである。暗示は環境に對する適應を意味し、従つて又在來成立せる行動の形式、模倣、收得、及び發達等の上に多少の變改を意味するのである。かくて暗示は一方にありては現在の行動形式を維持し、鞏固ならしめんとする習慣作用に反對して之を破壊し、改造せしめんとし、他方、ありては新なる適應新なる慣習を創造せんとするものである。見よ流行、趣味、思想、時代精神の如きは殆んど感染的に働き、非常なる勢力を以て、小なるは衣服の色合、形狀等より、大なるは詩歌、音樂、工藝等に對する時々の見解、形體等の上に至る迄、あらゆる事物に浸徹するではないか。又見よ、吾人は政治の中に、道德の中に、將又科學の中に囚はれて、殆んど暴虐なる君主の支



社會團體内に於ける暗示作用

配下にあるが如き状態に處しながら、しかも平然として唯々之に甘んずるではないか。更に又古い習風や慣用やは何なる權威を以て吾人に臨みつゝあるかを見よ。ラキの言を以てすれば、實に社會生活といふものは畢竟相互間の暗示の平均に外ならぬとさへ考へらるゝではないか。吾人は總て環境の暗示を受けて之より全然離脱することは出来ぬ。單に僅かの範圍に於て稍々暗示に抵抗する力を有するに過ぎぬのである。然らば暗示的に働く環境には如何なるものがあるかといふに、街路の生活あり、遊戯あり、娛樂あり、祭典あり、新聞雜誌あり、書物あり、衣食住あり、社會團體あり、自然あり、何れとして皆然らざるものはないのである。而して個人がその社會的本能によりて適應せんことを力むる社會的團體には家族あり、學校あり、同僚あり、俱樂部連盟あり、寺院あり、國家がある。かくて家族にありては家族の精神即ち家風、團體にありては團體の精神階級にありては身分に關する意識が存して居る。一言すれば各社會團體の中には社會意識が支配して居る。此等各社會的團體の公共的の所有物たる特殊の思想感情乃

與黨の勢力と暗示力

至努力の一系統として組織立てるものが漸々と其社會團體の一員として加入する人々の上に抑へ難くやみ難き力を以て働き無條件無抵抗無選擇の間に包容攝取するのである。

團體内に於ける暗示作用は全く兩親教師長上等の人物を崇敬する上に見はれ、種族の道德慣習の上に見はれ、家族、學校、寄宿舎、地方、寺院、國家等に於ける傳承、風尚、慣例等の上に見はれる。此種の社會團體内の人々が如上の人物や制度やに對して懷抱する所の信仰、崇拜、態度等は新に入れる各員の上に傳はつて行く。而して與黨會員一味の數が益々多きを加ふるにつれて如上の人物なり制度なりに對する尊敬が益々強く益々大になるものである。新加入者、新會員の就いて學ぶ所の先輩先達は團體における權威の力を増大ならしめる。而してこの黨類一味の社會的地位が高まれば高まる程、暗示はますます強烈を加へて来る。權威を信仰するに力あらしめる要件は何であるかといふに、一般にその權威者の識見の如何とか、客觀的内容の如何であるとかいふことには關せずして、寧ろ之に響應、和同する聲



の多いといふことに存する。故に如何に不合理にして且つ不都合なる意見にしても、大多數の人が正當として之に満足すれば群衆に容れられるのである。他の人が眞であり善であり美であるとして神聖視して傳へたるものをさながらに受容し繼承するは至つて容易の業である。然るにかゝる間に處し、自己の意見によりて判断し行爲せんとする場合は、大に自己の頭腦と勇氣とを要するのである。多數者が之を否定するが如き際に於ては特に然りとする。一體權威を信仰するといふことは兒童及無教育の人人には有勝ちのことである。教育が進み判断力が増加するにつれて、これは益々衰へるが常である。さはれ吾人の判断は多くの場合に於て權威に依頼し勝ちになるのであるが、これはさもあるべきことで強ち尤むるを要せぬのである。何となれば過去に於て數百萬の人が數千年間に經驗し研鑽し來つたることを、吾人の短い生涯に於て自立的に獲得しようとするのは不可能のことでもあり、且つ愚かなることであるによる。故に權威に依頼するはするとしても條理を立て、これが根據を示さなければならぬ。

要に逼つた場合には教授によりて之を闡明し、知見の光に照して疑義を存せしめざる様留意しなければならぬ。夫の盲目的の權威、盲目的の從順等にして後年に至り突如として懷疑の念を生じ、かくて多年最上の教養、至高の法則として率由せし所のもの、哀れや一朝根柢より覆滅し、瓦解してしかも悔なき事情に驅る所以のものは、矢張り知見と心情との教育によりて之を鮮明にし、且つ一層深く徹底せしめざる、不用意の罪に歸せねばならぬのである。

以上は人事界わきても各種の社會的團體が如何なる暗示作用を吾人の日常生活の上に與へつゝあるかを略叙したのであるが、自然界と雖も亦之に漏れるものではない。夫の天候氣象の差異により、或は地勢、地貌乃至景物の相違によりて、各特異の性情慣習を人々の上に印せしむるは人のよく知る所である。唯一言して終りたいのは、無生物と雖も大なるもの、美なるものを發露して靜かたをあれ、止み難く、抑へ難く、人を動かすことに於て絶大なる暗示力を有し、眞の教育者も及ばざる感化を垂るゝものが少から



ぬといふことである。先人の傑作を見て若い藝術家の創作力は啓示せられる。この場合作品は決して死物ではなく、新なる生命の芽を含み、適當なる機會の近づける各瞬間に、暗示を與へつゝあるものと考察せられる。唯人事界の程直接的でないがために、とかくにこの方面は注意の外に逸し易いといふ迄のことである。

### 第五節 兒童被暗示性の實驗

被暗示性とは暗示に感應する可能性に名づけたるもので人々により富めるもあれば、貧しきもあり、多きもあれば少きもあり、その程度同一であるといふ譯にはゆかぬ。

兒童の被暗示性に關しては、心理學者や實驗教育學者は種々の實驗を行ひ、色々の報告を爲して居る。概して兒童の被暗示性の實驗には、回想作用の重に關係して居る方法が利用せられて居る。これ回想なるものは何れも不精密不正確のものであるがために、個人々々により多少こそあれ、特に

### 感覺の方面

暗示に左右せられる機會を提供するからである。しかし被暗示性は精神生活の各方面に亘りて認めらるゝ現象であつて特殊な範圍に制限せらるるものではないが、茲には便宜上行ひ易きものを選びて記述するに止める。感覺 シ、シ、ショアの爲せる實驗は抵抗ある針金に電流を通じ、被驗者が之を掴めば温覺を生ずる装置となして置く。さて最初數回は眞に送電するも、後には單に接觸點を閉ぢ送電するやうな爲ねして其實送電せぬにも拘はず、被驗者の多數は温覺を發生したる報告をなして居る。

又ラキは兒童に嗅覺味覺に關する被暗示性の實驗をなして居る。それは蒸餾水に或種の香料を加へ、之を兒童の舌の上に乗せし時は全然無味なるにも拘らず、甘いとか鹹いとか味覺の名を與ふるが常である。これは香氣が暗示となつて味の感覺を誘起したるものと言はねばならぬ。

知覺 エム、エーチ、スモールは玩具の駱駝の頭の處に紐を結びつけて之を動かす様な振りをしたのである。しかも駱駝は其場に固定して毫も動くことはしなかつたのであつた。之を見たる三百八十一人の學校兒童の

### 知覺の方面



中で二百九十一人がこの駱駝の動いたのを見たと主張したのである。

ビネーは夫の握力計を用ひて握力試験を爲さしむるに際し、被験者に「汝の精一杯の力を出して握れ」といふよりも、實驗者が一度握つて見せ、扱て「汝は私の壓し上げた處まで遣れ」といふて握らせた方が、大なる成績を擧ぐることを發見したのである。

又ガルトン氏の棒を用ひ距離の目測をなさしむる場合に、「長過ぎた」「短過ぎた」「丁度善い」などいふ種々の暗示を與へ、それが目測の上に如何なる影響を與ふるかを見るが如きは、知覺の上に於ける暗示の働きを示すものである。

運動 觀念は之を妨ぐる事情の存せざる限り、不知不識の間運動に見はれんと力むるものである。しかも多くの場合に於て、當人は唯その觀念を意識するのみで、之に相當する動作を爲さんとする意識のないのを常とする。或は又その運動を實行したるを知らざること少からぬ。殊に催眠術にはかゝる運動を活潑に生起せしむることが出来る。福來博士の催眠

心理學によれば、

例へば被験者の右手をして筆を取りて紙上に置かしめ、帝國萬歳といふ事を熱心に觀念すべしと命じ、且つ同時に右手甲又は掌を少し刺戟する時は、その手は自働的に帝國萬歳と書記すべし。其他如何なる觀念を熱心に思はしむるも、彼の右手は自働的に該觀念に對する文字又は圖解することを書き出すべし。

とある。此等は何れも觀念が暗示となつて運動を誘發したるものと見るべきものである。

又神經の過敏なる人々にありては、他の運動することを見て居るだけで既に自身の運動は誘發せられる。夫のテーブルタニング、狐狗狸、自働記器等又はブランセットの如き觀念運動若しくは兒童が知らず識らず他人の舉動を模倣するが如き模倣運動にありては、暗示せられたるものは即ち運動である。

記憶 兒童の被暗示性の研究を爲せる最初の人としては、ビネーを擧げ



ねばならぬ。就中その叙述の實驗は吾人の兒童に對する質問につき教育心理上幾多興味ある副次的の結果を齎らしたのである。

ビネー氏の  
實驗

ビネーの實驗其一、ビネーは小學校長に依頼して次の如き實驗を行はしめたのであつた。即ち五十耗の長さの線が八十六人の學校兒童に示され其後之を撤回し回想によりて同長の線を描かしめたのであつた。兒童の多數は此線を実際よりは短かく描いて居た。即ち二十八耗と六十耗との間を出入して居た。さて校長は言ふ様「今度前の線よりも一層長い線を見せるから前者と同様に回想して之を描け」と。其實第二回目に見せたる線は四十耗の長さしかなかつたのである。この結果としては八十六人の兒童中唯九人のみが第一回目の線より短く書いたに過ぎなかつた。一人だけは丁度四十耗の長さに描いた其他の七十七人は何れもこの暗示的の質問にかゝり第二回目の線は第一回の線よりも長く描いたのである。即ちこの増加せる長さは〇耗より二十耗の間を出入して居た。次に校長は更に第二回目の線よりモット短いの見せると暗示して實は第二回目

其  
二

のと同長の線を示して第三回の實驗を行つたのである。この暗示の結果は第二回のに比して稍感應薄く七十人の兒童がこの暗示にかゝつたのであつた。

ビネーの實驗其二、氏は一の厚紙の上に六個の物體即ち銅貨切符銅半身寫眞郵便切手雜誌口繪を載せ巴里の小學校の兒童に就き被暗示性の實驗を行つたのである。この厚紙が實驗室に於て一人々の兒童に十二秒時間示された後種々の質問を試みたのであつた。質問の性質は之を三様に見ることが出来る。

其一は單に純粹の回想による質問であつて如上物體の色とか形とか紙上に於ける位置とかを尋ねる類である。例へば郵便切手は何錢の切手であるか其色は如何であるかといふ風に暗示のない質問であつた。然るに斯様な質問にも頗る間違へる叙述をなすものが多かつた。二十四人の子供の中で十五人は切手の色を間違へて言つた。四人の子供は捺印のない切手の上に消印を見たと言ひ加之その消印の形や捺されてあつた位置や



町名までも答へるのがあつた。鉤は綴ぢ附けられて居たが、其場所を間違へたるは、百分の二十一といふ率であつた。

斯く兒童に爲したる四十の質問中平均十一(即ち二十七パーセント)が間違へる返答であつた。間違の最も少きは五で多きは十四であつたといふ。其二は質問の性質が暗示的であるが故に、間違へる答を導きうるであらうと豫想さるゝ風のものであつた。例へば寫眞(半身)中の人は兩足を交叉しては居なかつたか、彼れは帽子を被つては居なかつたかといふが如き類である。

其三は暗示性が最も強烈なるもので、その質問たるや、當初から全然間違つて居るので、これが返答としては當然間違である、と明答せなければならぬものである。例へば寫眞中の人物は右足を左足の上に載せて組んで居たか、若しくは左足を右足の上に乗せて居たかの類である。斯く質問の暗示性の強きもの程間違へる返答の数も多くなり、殊に暗示性の強烈なる如上第三種に屬する質問の如きに對しては正答よりも間違へる叙述の方が

共  
三

非常に多かつたといふ結果を見たのである。

ビネーの實驗、其三氏は更に三人の子供を一緒にして試みたる特殊の實驗に於て、兒童が相互に影響しあふといふ事は豫想せなかつた位の度合に迄達するといふ事實を證しえたのであつた。蓋し氏の提供せる質問に對し、三兒中の一人が音頭取となつて物を言へば、他の二兒は直ちにこれに附和雷同し、有ること無いこと真しやかに叙述するといふことを知つたのである。

シテルンの實驗、ウキリアム、シテルンは兒童に對する質問の暗示的の效果の如何を研究せんが爲めに、特に十二の暗示的の質問即ち混亂と疑惑とを生起する風の質問を試みたのである。氏は兒童に繪畫を示したる後、その繪畫の上には見はれて居なかつた事實について問ふといふ風に、特に暗示的に働く質問の形式を選んだのであつた。被験者は七歳乃至九歳の學校兒童男女合計四十七人であつた。個別的に二分間だけ色彩畫人の居る農家の室が示されてよく観察せしめたる後、之を撤回して、先づ兒童

シテルンの  
實驗



の観察せる繪畫の内容に關して記憶から思ひ思ひの報告を爲さしめたのである。次に氏は質問表によりてこの繪畫には全く無かつた様な物體に就き暗示性の質問をなしたのである。この實驗は多くの興味ある結果を齎した。固より最初の報告體の叙述は次に行へる質問による叙述に比して間違が少なかつた。中にも質問が面倒になればなる程叙述の間違も益々多きを加へたのである。答の總數五百二十二の中で正答即ち否と斷定的の答を爲したるは三百〇八で五十九パーセントに當り、間違へる答を與へたるは百三十一で二十五パーセントに當り、其他のものは何れとも不明瞭なるものであつた。故に事實上全く知覺せなかつた百三十一の物體は暗示性の質問のために、観察したることゝ間違へられたのである。氏によれば年齢と共に暗示性の質問に對する反抗力が増加する。ために七歳の兒童では二分の一の割合であるのに、十四歳の兒童になれば五分の一位より暗示性の質問に對する効力がないといふ。年少の兒童の叙述の中には主に人物や物體やを書く物體の知識の階段。多少長じて八歳位のはもう

アガルド氏の報告

また多くの行動をも注意する(行爲の知識の階段)。更に長じて九歳より十歳位のものには又物體の特質、相互の時間空間的關係をも叙述することの出来るを示す。(關係及特徴を捉ふる知識の階段)。

アガルドの報告 氏は一兒童を教壇の前へ招びつけて三度鞭ちて體罰を課したることがある。この事實を見たる證人は全級五十二人の兒童であつた。五日を経たる後氏は全級兒童に次の如き質問をなした。曰く「エフといふ生徒を私が鞭つたことを誰が見たか」と。四十の兒童は見たといふ。「私は何日にかゝる懲罰を加へたか」三十一人が正しい日を挙げた。何時限目の時間であつたかとの間に對しては二十六人しか正しき答を與へなかつた。何遍鞭つたかといふ質問には二十四の正答があつた。「私が鞭つ前エフは屈んでは居なかつたか」といふ質問に對しては、これは間違である主張したるは十二人のみであつた。懲罰の理由に關しては三十五人の兒童が八様の種々なる叙述をなしたのである。

グロリス氏の報告

グロリスの報告 氏は他の小學校教師の報告によりて興味ある實例を



示して居る。曰く一日或少女が筆入を學校内で失つたといふことを告げて來た。この女兒は確かに其箱を持參して所定の椅子の何處々に正しく置いたといふことを主張する。其側に居る他の兒童等は何れも今朝の授業の際其場に於て認めたといふことを裏書し同時に自分等は之を窃取したるものにあらざる旨を辯疏するのであつた。何ぞ計らん斯様に事々しく訴へ出たる女兒は翌日その學校で失つたといふ筆入を携帶して登校したのである。聞けば家庭に忘れて置いたのを歸宅後見附けたのである。これと同様な實例が先年東都の小學校に起り月謝紛失事件として教育上各種の方面に注意を喚起し多大の教訓と警戒とを齎したのであつた。當時の雜誌『小學校』に委細登載せられたことは普く人の知る所であらうと思ふ。

如上諸家が兒童の被暗示性に就きて試みたる實驗中特にビネーとシテルンとのに基き余は以下の實驗を當附屬小學校の兒童に試みたのであつた。

實驗其一

實驗其一

- 一 被驗兒童 當校第二部兒童百九十二名。内男兒九十四名、女兒九十八名。
- 二 準備品 瓜生保女史が胸部に一箇の勳章を懸けて端坐する繪畫。
- 三 注視時間 一分間。
- 四 質問 繪畫を撤回したる後左の質問を發して豫め配布せる紙片に筆答せしむ。  
女史の胸間に懸けたる勳章の數は二箇なりしか、三箇なりしか。
- 五 檢答 一箇とあるを正答とし、二箇若しくは三箇と答へたるを暗示にかゝれる兒童とす。

實驗其二

實驗其二

- 一 被驗兒童 當校第三部兒童八十八名。内男兒四十三名、女兒四十五名。
- 二 準備品 露頭に足袋を穿てる男兒が母の側に立てる繪畫。
- 三 注視時間 一分間。



四 質問 繪畫を撤回したる後、左の發問に對し筆答せしむること實驗共一と同じ。

- 1、男兒は帽子を被り居りしや否や。
- 2、男兒は下駄を穿てりや若しくは草履を穿てりや。

五 檢答 露頭足袋とあるを正答とし『帽子を被れり』『下駄又は草履を穿てり』と答へたるを暗示にかゝれる兒童とす。左記圖表の答否とある中(1)と記せるは二者の一を誤れるもの(2)とあるは二者共に誤れるを示せり。

備考 本實驗は各學級主任の手に依託することなく、同一實驗者によりて終始せり。

筆答の際兒童相互に行はるゝ暗示作用を誘起すべき機會は豫め之を防止することに力めたり。

質問に用ふる言語は低學年兒童にも充分理解せられたるものたるを要す。例へば草履下駄等の稱呼の如きは地方によりて或は兒童に通ぜざ

男女兒童被暗示性比較一覽表其一

男					女				
學年	人員	答		被童暗示百分率	學年	人員	答		被童暗示百分率
		正	否				正	否	
1	9	5	4	44	1	8	5	3	38
2	10	9	1	10	2	12	9	3	25
3	11	11	0	0	3	10	8	2	20
4	11	11	0	0	4	11	11	0	0
5	11	9	2	18	5	12	11	1	8
6	11	10	1	9	6	11	6	5	45
高男	31	22	9	29	高女	34	30	4	12
計	94	77	17	18	計	98	80	18	18



男女兒童被暗示性比較一覽表其二

		男							女						
學年	人員	答					被童暗示百分兒率	學年	人員	答					被童暗示百分兒率
		正	否			計				正	否			計	
			1	2	計						1	2	計		
1	9	0	5	4	9	100	1	9	3	6		6	67		
2	7	4	2	1	3	43	2	7	2	3	2	5	71		
3	7	5	2		2	29	3	7	4	3		3	43		
4	6	4	2		2	33	4	8	4	4		4	50		
5	7	5	2		2	29	5	7	3	4		4	57		
6	7	5	2		2	29	6	7	4	3		3	43		
計	43	23	15	5	20	47	計	45	20	23	2	25	56		

本實驗の結果

ることなきや否や豫め調査を遂げ置くが如し。右實驗の結果に就き被暗示性は年長兒童よりも年少兒童に男兒よりも女兒に多しとするは諸家の實驗の一致する所である。本實驗の如きも殊に尋常科一二年生の暗示性の質問に對する感應力の如何に強きものあるかを語りて餘りあるを示して居る。女兒は實驗其一に於ては全平均が男兒と同様百分の十八パーセントであつて更に軒輕あるを見ない。其二に於ては男兒の四十七パーセントに對し女兒は五十六パーセントで女兒に多いことを示して居るが吾人の豫想したる程其差が顯著でなかつたことを異とするものである。

就中吾人の注意を喚起するに足る顯著なる二事實は、第一尋常三四學年が高學年に比して暗示的質問の影響を受けることが割合に少いことで殊に實驗其一に於ては男兒中一人だも之を發見することが出来なかつた位であつたこと、第二に高等科兒童の如き小學校に於ける最高學年の兒童にして猶此の如き簡明なる暗示に左右せられたるものゝ多かりしこと、



である。前者は本書の四〇頁に記述したるが如く、所謂分解的の觀察期なる發達階段に屬する兒童と見てよからう。後者に關しては次節の劈頭に記せる兒童の意志に影響する諸條件を讀まば、さして怪しむに足らぬことと思ふ。猶被暗示性と知能、氣質、意志の定型等の關係も考察すべき好個の視點であるといふことを附け加へて置く。

#### 第六節 暗示の教育上の適用

兒童の意志は、滿十四歳頃に至る迄、外部の影響を受けて種々動搖し、不定の状態にあるは、諸種の實驗及日常の經驗の吾人に教ふる所である。兒童の意志の決定せらるゝは、外部的の生活状態や兒童が其中に住み遊び働く所の境遇やに因る所が多いのであるが、又有意的か無意的かに於て影響を與ふる人々若しくは質問、目配せ、態度、身振といふ風な瑣細な交渉によりても影響せられるものである。學業成績の如きも、同輩間、學級間、家庭間に支配する精神によりて、又單に教室の中に居るといふことだけによりて、教師

兒童の意志  
に影響する  
諸條件

の監督を受けて居るか居らぬかといふことによりて、一人々々の兒童に對する教師の思はく如何によりて、更に教師の質問の種類に依りても、大に差異を來すことを示すのである。此の如き意味に於て兩親や教師やがその兒童子弟の意志の上に測るべからざる暗示的の勢力を有するものなることを考察する時は、兩親教師の人格があらゆる教育的の結果否實に生徒兒童の後年の全生活の上に對して多大の意義を有するを知るに難からざるものがある。故に本校塚原教授も兒童生活と暗示てふ論文中に「要するに兒童に最も有力なる暗示を與ふるものは父母と教師とであります。故に是等の人々は自己の一舉一動は必ず其兒童に暗示を與へつゝあるものであるといふことを忘れてはならない。之と同時に社會の他の人々も亦幼少なる兒童に暗示を與ふるといふ點からして、常に自己の行動に留意しなければならぬのであります」と言つて居られる。

兩親教師によりて投與せらるゝ暗示は、主として兒童の行爲、不行爲を律すべき見解、感情、評價、信念等に關係するものである。即ち彼等が有意的に



暗示作用と  
移植法

か無意的にか、或は説話に、或は忠告助言に、或は教誨に、或は態度素振等の形式に於て、兒童に影響する所の事實、標準、判斷、要求等は兒童自身未だ經驗せないものでも、丁度自己の直接經驗によりてえたと同様兒童の精神裡に流入するのである。ブラキエルは暗示の作用をば夫の醫學上に於ける移植法と稱するものゝ作用に比較して居る。この移植といふのは他人の身體の一部、例へば皮膚や骨すらも自分のものとなることである。暗示にありては他人の意志が或は主張或は決意の形によりて自己の精神的の内容中に挿入せらるゝといふことである。此の如くにして兒童の心裡に浸徹せるものは、一動機となつて兒童の行爲不行爲を律すべき作用をなすのである。即ち消極的方面には行爲の抑止となり、積極的方面には行爲の發動となる。例へば今しも兒童は未熟なる林檎の果實が累々として枝もたわゝになつて居る庭園に下り立ちこれを取らうとする際、母は次の如き暗示を與へたとする。「未熟の林檎を食ふ人は腹痛を起す」と、この子供は曾て未熟の林檎を食うたことがなければ従つてそれによりて生ずる腹痛の憂目

消極的暗示  
と積極的暗  
示

にも遭遇したることがない。しかし母のこの暗示に對しては彼れは以前かゝる經驗を親ら嘗めたるが如き様に伸したる手を收むるのである。此種のものとは所謂消極的、抑止的の暗示である。又教師は能く夫の名譽心ありしかもとかく學習を閉却する兒童に對して次の如き暗示を慣用するものである。「私は汝等のよく勉強して居るか居らぬかは、その顔面を見れば充分分るのである」と、教師の此言の果して有りうべき事であるか否かは兒童自身の直接經驗によりて確かめられたることはないにしても、この暗示は如何なる影響を與へるかと言ふに、彼れは自己の不勉強は隠すべくもあらず、自己の面貌の上に見はれるといふことを確信し勤勉するやうになることは日常經驗する所である。これ即ち積極的、發動的の暗示である。此の如く兩親や教師によりて行爲不行爲を律せらるゝ暗示にも、合理性のものもあれば、非合理性のものもあり、建設的のものもあれば、破壊的のものもある。しかも世上動もすれば非教育的の暗示が滔々として勢力を有し可塑性に富める兒童の精神生活の上に牢として抜き難き根帯を占めつ



寒心すべき  
暗示の投與

あるにも拘はらず、猶自ら曉らず、平然として舊態を持續するは教育上實に寒心すべきことである。何を以て爾かく背理的・非教育的の暗示の用ひらるゝ機會の多いといふのであるか。見よ、吾人はよく兒童に言ふ「汝等は此問題を考へ若くは此事をなすは不可能である」と。これ即ち教師は兒童に疑惑と障害とを暗示するもので、その結果たるや、果して其言に違はず、不可能であるといふことを示すのである。切言すれば、教師は、兒童の魯鈍、怠惰、缺點及罪惡等を假定し、而して多くは此の如きものを豫定通り産出するのである。教師はとかく兒童が善良優秀の好成績をのみ教師に交附することを當然の義務であるかの様に考へ、之に對して賞讃と承認とを與ふるに於て、餘りに冷酷に過ぐる様の傾はなきか。而してかゝる際、兒童自身をして自己の能力や力量やを意識し信賴せしむることが、如上の義務を果さしむる上に重要義であることを忘れて居るのである。即ち教師は餘りに多く譴責や批難やを用ふるに過ぎて、兒童の能力の各種各様の程度を承認せぬ。此の如くにして兒童をして自己に對する信仰を弱めしめ、自分は拙

らぬもの取手なきものと自ら極め込んで、萎微振はざる自卑自屈の境遇に自らを驅るのである。驅るものが非か、驅らしむるものが非か、三思すべきは此點にある。

更に心なき兩親や無教育なる僕婢やが日常兒童に投與しつゝある暗示に至りては、その非教育的にして背理的なる、寧ろ眉を蹙めしむるに足るのである。泣く兒を賺さんとして或は「鬼が来る」とか「幽霊が出る」とかいひ、むつがる兒に衣服を着けしめんとして「斯様な美しい衣服を着けると誰も皆可愛がる」とかいふ。爲めに兒童は鬼が来るものと思つて一時は暗示者の意に副ふ様な行動もし、可愛がられんとして柔順に着衣もするであらう。しかし此の如くにして腦底に印象せられたる誤れる感情、乃至誤れる價值判斷は迷信家を養成するにあらざれば、虚榮心を挑發するのみであらう。教育の程度低き社會ほどその日常生活の隨時隨處に於て、兒童の柔き頭腦は生涯を通じて拂拭すべからざる迷信、誤解、謬見、妄斷、偏見等の暗示に接する機會が多いのである。



一 上述せるが如き見地の下、暗示を教育上に適用せんとするに際し、以下の様な法則乃至要請を言明することが出来る。

教育上の見地より児童に有害なるが故に避けねばならぬ様な事柄は多少不快なるものとして児童に反抗的努力を惹起する風に暗示し、教育上有利と認むるものは彼れに一種の快感を興へ従つて之を追求して止まぬ動機たらしむべきである。前者の暗示は消極的動機を興へ、後者の暗示は積極的の動機を興ふる。故に前者に於ては反抗的の意志を生起し、後者に於ては欲望を生ずる。

二 如何に僅少なる進歩と雖も之を承認するに於て吝であつてはならぬ。單に顯著に見はるゝ怠惰、輕薄、不従順、其他の非行に對してのみ之を責むるに止め、爬羅剔剗徒らに児童を萎縮せしめ、爲めに自ら割して進ましめざるやうなことがあつてはならぬ。

三 児童は吾人が希望するが如く善き事を行ひ善き成績を擧げうるものと期待し、豫定し、一般に善意を以て之を待ち、好望を以てこれを遇すべきである。

四

更に児童は善をのみ爲すことが出来るもので、惡をなすことは自分には出来ぬものであるといふ信仰を児童に持たしむるは、教育上非常に望ましいことである。

其 五

暗示によりて引き起されたる盲目的の信仰は児童の發達の程度にしたがひ適當な事情の下、合理的の見解によりて信仰の必然なる所以を證明すべきである。夫の後年に至りて此種の信仰が根柢より破壊せられて極端なる懷疑に驅らるゝ破目に遭遇するのは、蓋し此の如き知見と心情との教育によりてこの信仰を鮮明にし徹底せしめなかつた不用意の罪に歸せねばならぬ。

其 六

大人の約三十パーセント及児童の全部は皆被催眠の可能性があると言はれて居る。而して児童は又總て暗示にかゝりうるものである。故に教師兩親等は學校、家庭、街路、運動場等に於ける種々の知覺は何れも児童の行爲を暗示しうるものなることに留意し、児童の思想行爲の上に多少異なる



状態を目撃するあらば、飽くまでその因由を探求し、拔本塞源の識見と用意とが肝要である。就中家にありては家風、學校にありては校風、級風乃至同輩間の氣風等は強烈な暗示力を以て兒童の上に加はり、無抵抗無批評の裡この渦中に拉し去るものであるが故に、教師や兩親やは家族間に流通する家族精神、學校の中に流通する學校精神乃至學級精神等につきては一隻眼を有せねばならぬ。

環境における非教育的背理的の暗示にたいして兒童の反抗力をつよめんがために有力なる手段は二つある。一は自己の生活における暗示的の力に對して判斷力を鋭くするといふことである。蓋し兒童の判斷力が乏しければ乏しいほど、被暗示性はますます大なるものであり、同一の兒童でも精神の發達と共に被暗示性の減する所以は此點にある。他の一は兒童の自信力を強むるといふ事である。これによりて兒童は容易に他の乗ずる所とならず。従つて虚を衝かるゝといふことが少くなるのである。教師の質問は同時に暗示的の副影響を與ふるものであることを終始眼

其 七

其 八

其

九

中において質問の種類、性質形式等を充分吟味せなければならぬ。成人ですら少からず單刀直入的の質問によりてその見解上に、又その決意の上に、影響を受け動搖を生起するものである。されば甚だ被暗示性に富める兒童の如何であるかは更めて言ふ迄もない。質問なるものは兒童に取りては單に知識と判斷力とによりて決定せる返答を導くべき知的の刺戟たるに止まらず、又此質問なるものは發問者の人格に従ひ、言語の形式に従ひ、或は單なる音調に従ひ、多少こそあれ兒童の心情と意志との上に、又兒童の信賴と確信の上にも、影響するといふ教育上重大なる意義を有することを知らねばならぬ。これ現時質問に對する敘述の教育の必要が重要視せらるゝ所以である。

教育者が暗示を與ふるに先ち、豫知せなければならぬ重要事實がある。就中重なる二三を擧ぐれば、

暗示には物理的生理的の制限のあるといふことを知らねばならぬ。例へばオルガンの演奏を知らざる兒童に對し、汝は此曲を奏することが出來



るといふことを暗示しても能はざる類である。

被暗示者が経験することによりて予盾を來すといふ風な暗示は、之を避けねばならぬ。

教育者は暗示を與ふるに先ち兒童の能力に關して的確に熟知する所があらねばならぬ。然らざれば兒童に取りて精神的又は身體的に不可能なることを暗示するに至る。例へば或種の體操を爲すには筋肉の發達が不充分であるとか、算術の解釋をなすに以前の教授に於て未だ適當なる手ほどきが與へられて居ぬとかはこれである。かく能力の測定に誤解がありたるため教育者の暗示も豫期する効果を見ずして終ることあるは、吾人の親しく經驗する所である。故に暗示を與ふるには對象者を根本的に理解するといふことを前提とする。

兒童の叙述や證言や其被暗示性のつよきと回想作用の不完全なることによりて非常に信頼すべからざるものであるを知らねばならぬ。しかもこれ兒童自身では眞實を語らうとする主觀性と一致せざるものである。

されば故意にする不眞實の虚言と此種の間違へる叙述との間には心理上嚴密なる區別の存するを認めねば往々不當なる處理をなすに至ることがある。

外部上の表情姿勢が精神に對し暗示的に働くことは賢哲の教の存する所であつて、一定の姿勢態度がそれに相應する思想や感情を誘發する刺戟となるは兒童に於て特に著しいものがある。袴を着くれば自ら端嚴の念生じ、寢ころべば怠慢の心萌すが如き類であつて、外より内を制する教育法の重要な所以の理蓋し此處にある。

### 第七節 教育者の暗示力

此暗示力を有つて居るといふことはやがて非常なる教育上の武器をもつて居るといふことである。暗示力は之を内部的方面と外部的方面との二者に分ちて考察することが出来る。

内部的方面とは自己の能力につき充分明瞭なる意識を有すること、被暗



示者は暗示者を信頼すること篤くその暗示を受けたる瞬間は眞に豫言者の啓示に接するが如く何等の疑ふ所なく之を受容すること全然その意志力を以て被暗示者を拘束し左右しうることを含む。かゝる効果を擧げえんがためには兒童の精神生活上それに相應するだけの準備がなければならぬ。即ち積極的には兒童の意志が暗示に相應する方向にあるを要すると共に消極的には暗示に反對なる方向に意志の偏倚するを豫防することである。

外部的方面  
の暗示力

暗示力の外部的方面とは暗示者の舉止、音調、身振、沈着き、加減、言語の明瞭、確實や表出の感動的、確信的にして生氣ある等を指すもので、此等は兒童に對する影響を強からしむるに力がある。唯々一種の滑稽劇に類するものがあつてはならぬ。反言すれば其場限りの作爲的不自然の行爲であつてはならぬ。内部に根柢を有たぬ表出は如何に千百の技巧を凝すも畢竟空中の樓閣に過ぎぬのである。

以上兩方面より來る教師の人格が兒童の主觀性に觸れて、心と心と、靈感

する最高潮時には一種の催眠術の行はるゝものと言ふべきである。かゝる際兒童の緊張し集注せる注意は一に教育者によりて提供せられる暗示の上に存し活殺與奪全くその手裡に歸し斷乎たる確信熾烈なる感情さては鐵石の如き決心を生起するに足るのである。



## 第九章 兒童の所有欲

### 第一節 所有欲の起源と發達

クライン氏及フランス氏は其著『所有の心理學』において、財産に定義を下して曰く「財産とは畢竟各個人が自己の生命を維持延長して其存續に利あり、而して一方反對の諸勢力に打克ちえんがために、所有する物件である」と。多くの動物乃至昆虫の如きものすら、自身のため又自己の子孫のために、食物を貯蓄するのである。所有に關する兆候は又幼なき兒童の上にも之を見ることが出来る。然るにルツルノウ氏は「財産の起源及發達」中に述べて曰く、私有財産といふ思想は今日の吾人には如何にも自然のものゝ如くに思はるれど、これは人類發達史上近代に至りて徐々に現はれ來りたる者で、原始時代の人類の間には、單に共有財産の考がありしばかりである。一體財産の價額なるものは時としてはその用途如何によりて之を測り、又

所有の欲望  
の起源及發  
達

時としては之を製作するに要したる努力の如何によりて測る者である。而して妙齡期以前にありては兒童は何でも直ちに役立ちうべきものを所有せんとする念強烈であるが、之を過ぐれば所有欲は形式を異にして見られる。即ち一切の價格を包容するの故を以て、以前はさして注意を拂ふことなかりし金錢その物のために金錢を所有せんことを熱望するやうになる。

### 第二節 兒童の金錢觀と教育

兒童の金錢觀なるものは、夫の未開人の場合に於て見るが如く、最初の見はれたるや甚微弱なものである。

兒童の金錢に關する考乃至感じや強度等を知らうとする企圖の下に、モンロー氏は七歳乃至十六歳の兒童に以下の發問をなしたのであつた。

汝は毎月五拾錢宛の小使錢が貰はれ、それで汝の欲するまゝの事が出来るか、何をし始めようとするか。

實問による  
實驗



と。これが返答は九百二十二人の男兒及一千九十人の女兒總計二千十二人の兒童から求められたのである。次表は兒童中此等の貰ひ受けし小使錢を貯蓄しようとする兒童の百分率を示して居る。

年齢	男兒	女兒
七歳	四十三	三十六
八歳	四十五	三十四
九歳	四十八	五十
十歳	五十三	五十五
十一歳	七十一	五十八
十二歳	八十二	六十四
十三歳	八十八	七十八
十四歳	八十五	八十
十五歳	八十三	七十八
十六歳	八十五	八十二

以上の數字は年齢の増加するにつれて又貯蓄心の増加することを語つ

貯蓄の理由

共 一

共 二

て居る。固より小使錢云々は想像上の事柄で事實問題ではないといへ、此等は以て或程度迄教育の影響の然らしむる所であることを考へぬ譯にはゆかぬのである。金錢を貯蓄しようとする希望は、概言すれば何れの年齢に於ても女兒より男兒の方が強烈である。而してかゝる性別上の差違は年を追うにつれて漸次減少しつつある。

何が故に貯蓄するかといふ理由も同時に尋ねられたのであるが、その返答は非常に興味ある社會的の傾向を指示して居る。

男兒の百分の九及女兒の十一は衣類、帽子、靴等を買はんがために貯蓄しようとする。此種の希望は年齢と共に増加する。故に最も少なきは七歳に、最も強きは十六歳の時に見はれる。

第二類は男女兒の各百分の四を含んでゐるが、これは薪炭、食物、家財等の如き必需品を買はんがために貯蓄しようとするものである。若し此類は夫の實利主義者を包容して居るものとすれば、亞米利加の兒童に於ては吾人の普通想像して居る如くには多數に上つてゐないと言はねばならぬ。



共 三

猶小經濟家の第三類に屬するものは、何等か自己の享樂の用に充てんがために節約しようとする。例へば玩具、菓子類等を始め、自分の個人的の愉快を充さんとするが如きである。男兒中の百分の十四及女兒の九は此類に入る。年齢から言へば十歳乃至十四歳の範圍に分布して居る。

共 四

第四類は誕生日や祭日の際に贈物をして他の満足を求めんがために、貯蓄するものである。男兒の百分の四及女兒の七はこれを代表して居る。學校兒童の社會的の意識に關する以外の種々の研究の結果と同様に、又この研究に於ても利他的傾向の表示は男兒よりも女兒が優つて居る。

共 五

同様の事實は又明らかに第五類中に見はれて居る。これは書物や繪畫やを買はんがために、貯蓄しようとする類を包容して居る。男兒の百分の三及女兒の七はこれを代表して居るが、或程度迄この類は調査せる二千人以上の兒童の知的乃至審美的の興味を見はしてゐるものと言へる。

共 六

第六類に入るは男兒の百分の二及女兒の三半を有する汎愛家である。彼等の貯金は之を貧民や教會やの爲めに、充てようとするものである。

金額の多少と貯蓄の關係

猶氏は上記の間に於けるものより以上の大金であつたならば、如何なる反應を呈するであらうかを知らんがため、十一歳の男女兒に對し、上記せるもの、外以下の問を發したのである。

若し千弗の金があつて汝の欲することを爲しうるとすれば、それを以て如何なる事をしようとするか。

と。然るに上表に示せるが如く第一問に對しては此年代の男兒の百分の七十一が月々五十錢宛の金を貯蓄しようといふたに、第二問の千弗に對しては之を貯蓄しようとするものが百分の九十八に達して居る。女兒に於てはこの差が男兒程大ではないが矢張り大金の貯蓄には一層重きを置く様子が著しいものがあると言へる。即ち第一問に對しては貯蓄せんとするものは百分の五十八であるのに、第二問に對しては七十二の多きに上つて居る。

氏は又百二人の男女の成人に質問紙を配布して、彼等が金錢問題に關する兒童期の希望等を回想によりて、告げんことを求めたのである。此等の

金錢に關する成人の回想



大多數者は金錢に對する感じは彼等兒童期の精神生活の過去に於て特に強烈なる要素であつたことを明らかに告白して居る。即ち彼等の中百分の四十五は青年期の遊戯に際し金錢を非常に欲求したことを回想し、七八のものは兒童の遊戯に際し金錢が最も重なる役目を行つて居たことをいふ。釘や鉛や擬せる貨幣やが之に用ひられる。

又此等成人の百分の十二はその兒童期に於て一定の小使錢をえたる事をいひ、百分の三十五は兩親親類友人等から貰ひ受けし金錢を所有した事をいひ、百分の五十九は御使等によりて金を儲けたといふ。彼等の百分の五十七は所持金を貯金箱の中に、二十は金庫中に、二十は柱時計の内などに貯へて居たといふ。

貯金の動機や使途に關しては百分の二十二は特に友人や親類により獎勵せられたから貯へたのであるといひ、百分の十三は非常に熱望せる物品を買はんがためであるといひ、百分の三十二は兒童期中に得たる金をば歡樂のために費消し、百分の十三は實用品を買ふに投じ、百分の十は他に贈る

物品を買ふに充て、百分の十七は博愛的の事業に之を投じて居る。

成人の金錢に關する諸種の回想中に於て百分の五十五は金錢と結合して居る色々の迷信を告げ、兒童期中全くこれを信じてゐたといふ。百分の八十二は金錢が重きをなして居る風な空想を逞しうして居る。即ち此等の中の百分の二十二は富豪の養子となつて之を遺産せんことを夢み、百分の十三は金錢を發見せんことを希ひ、百分の十五は自己の努力例へば有用なる器具器械類の發明又は賣行よき著作の發刊等によりて富者とならうと言ひ、百分の五は富者との結婚を望んで居る。

亞米利加合衆國にありては最近數十年來、學校教育の力によりて、金錢の問題に對する兒童の態度の上に影響する所あらしめよう、と種々の努力を爲して居る。即ち一方學校をして金錢に關する兒童の理解力を向上せしむると共に他方金錢を貯蓄せうとする希望を懐かしむる地位に置かしめる。爲めに學校では兒童の衣服、書物、玩具等の價值についての考を與へんとし、特に兒童發達の程度に應じて金錢の價值に關する計算問題を與ふる



に腐心する。しかも小學校に於ける經濟上の指導をなすが上に最も有効なる方法としては學校貯金制を擧げねばならぬ。これは元來貧兒をして些々たる貯金をなしえんがために設けられたる慈善的の施設であるが、漸次あらゆる階級の兒童にも擴大するやうになり、教育上貯蓄心や自立心を喚起するが上の要素となるに至つたものである。

ペスタロッチーは夫の「リンハルトとゲルトルード」中に於て將來といふことについては何等顧念する所なくして生活せる瑞西の農夫に對し、その經濟感を巧みに刺戟することによりて、これを救済したことを記述して居る。同氏は、兒童期の發達中に貯蓄心の啓培を爲さねばならぬことを述べ、主要なる教育上の眞理を此處に認めて居る。貯蓄なるものは明らかに、或種の精神上の特質を前件とすることによりてのみ生起することが出来る。即ち

- (一)は想像力であつて、これは利益を先明しうる能力があることを要する。
- (二)は絶大なる意志の強さであつて、各個人はこの意志力によりて長期間

に亘りて非常に隔てる所にある目的に向つて絶えず追求するをうるのである。この第二の特性は普通兒童には殆んど缺如するが常である。加之貯蓄心とは單に金錢問題に限つたことではないことを知らねばならぬ。故に例へば絶えず紙や筆やを費消したり、書物を汚したり、玩具を毀つたり、衣服などを破るを何とも思はぬ兒童は、この儘にして置けば社會的經濟的の生活を營むを不可能たらしめる。かゝる際指導者たる者は須らく兒童教育上の要素として浪費の惡習性を抑壓し、誇大的の要求を斥け、事物の價値を知悉せしめ、以て自己の住する環境に適應せしむるの用意が肝要である。

亞米利加と我國とでは大人間に於てすら金錢に關する考に於て、彼此頗る徑庭の存する國情である。在來動もすれば強兵主義の教育にのみ流れ勝ちなる我國は更に眼を一轉して富國主義の下に、兒童を教養する必要はなきか。守錢奴は最も卑しむべきではあるが、さりとして宵越の金は使はぬなど、豪語するを以て廉潔など、許せる時代は既に過去である。大に財を集めて大に財を散ずるといふ見地の下に、教育と經濟との關係について



攻、究、し、確、乎、た、る、方、針、を、樹、立、す、る、こ、と、は、今、後、非、常、に、重、大、な、る、問、題、の、一、で、あ、ら、う、と、思、ふ。

## 第十章 兒童の社交定型

### 第一節 概説

總て或傾向の見はるる程度強弱乃至その傾向の繼續する時期の長短といふやうな事は、兒童の各個人によりて著しく差違の存するものである。發達するにつれて、兒童は普通既有的態度や傾向を離脱するものであるが、しかし或場合に於ては自然的や環境上やの諸原因の囚ふる所となつて望ましからざる態度が執拗につけ纏うて、成人することもないではない。此の如く性格の個人的の差違に關する原理は既に承認せられて居るに拘らず、猶それに相應する丈けの實際上の注意を受けて居ないのは遺憾である。故に茲に吾人の記述の目的とする所は個々の分岐點に亘りて敢へて詳説を試みんとするものではなく、唯兒童の尋常の發達中に見はるる傾向就中彼等の一般の社交的傾向に關して何れ程のタイプが存するかにつき、考察



通俗哲學の  
上に見はる  
社交型

を下さうとするものである。  
吾人は先づ通俗哲學に於て承認せられて居る社交性の定型があるといふ事から出發せねばならぬ。それに關しては普通の説話や書物やは種々の事を述べて居る。若し吾人にして一般に流行する文學書類を通讀して人生の具體的に表現する有様を調べたならば概して人の社交性を二つの主なる定型に彙類することの出来るを認むるであらう。その一は當人の行動は概して其生活する特種の社會的環境の要求する所に一致し調和するといふ風な個人である。故にこの種の人は該社會に於ける人々の承認をうるは固より稱揚する所とさへなるのである。第二は可なり多數の人を包括する他の定型であつてこれに屬する個人は自己の所屬する社會に於て表明し若しくは適用せられて居る意向とは何等かの點に於て相反したる行爲をなし従つて多少はあれ該社會の人々の反感を誘起し敵意を挑發するのである。第一種の定型は適應性があると言はる。此定型の人は外圍の社會的信條及實行を採用しうる人であり又外圍の人が自己の

言動の表示に對して抵抗的態度を取らぬ様に外圍を影響することの出来る人である。概して言へば此種の人には小にしては同輩大にしては公衆と一致的關係に於て生活しうる人である。第二の定型の人は普通社會の標準や習慣やに従ふを好まぬが故に乃至彼れが建設しようとする新しき標準信條が社會公衆に承認せらるるには不適當なるものであるが故にこれに離反せんとするのである。

然らば此等の定型の兒童及青年に於ける見はれは果して如何。學校及家庭に於ける團體の一員としての兒童の性行の評價に關し屢々聞く所の語は彼等が溫和か調和的か正直か若しくはこれと相反して居るかといふ事である。兒童研究家の言に従へば兒童は滿二歳頃から彼等の友人若しくは自己の上に權威を以て臨む人若しくは自己と何等かの關係を有する人々と彼等の適應しうる所の速さの遅速適應性の強弱やに於て異るといふことを示すのである。さればとて吾人は如何なる兒童も全く適應性のものである即ち彼等の上に加へらるゝ行爲に對して何等抵抗を示さぬも



のであるとは言はぬ。これと反對に如何なる兒童もその適應性に於て全然缺如して居るものであるとも言はぬ。單に社會に於ける意見習慣制度等に對しての反抗の意は甲の兒童よりも乙の兒童に於て最も著しく且つ執拗に見はるゝものであると主張するに過ぎぬ。しかも外圍に對して著しく反抗の意を有する一兒童は矢張り一生涯亦然りであるかといふ事は全く不確實ではあるが、恐らくかゝる傾向は成人生活迄依然繼續するは稀有な場合であらう。五六歳頃四周の人と絶えて適應せなかつた兒童が十五六歳に至りてかゝる傾向は稀になつたといふ幾多の實例がある。此等の場合に於ける著しい變化は九歳乃至十二歳の間に起つて居る。而して此期間に於ける適應性の新なる態度は概して成年期を通じて繼續するものであるらしい。

### 第二節 適應型と非適應型

適應型 外圍の人々に反對して自己の考を表明するに急にして且つ攻

擊的なる兒童は、少くともこれに接觸する成人には好まれぬであらう。これと反對なるは大人しい兒童乃至調和的の兒童と言はれる。若し彼れにして長者の言ふとを聞いたり、彼等に譲つたり、或は恭しい態度を見はすと、いふ風に適當な敬意を長者に致せば、「此兒は謙遜である」「恭順である」と言はれる。勿論兒童は夫の所謂「つゝまじやか」といふ態度の本質とも見らるべき傳習的の行儀作法に習熟し又は體得するの程度に於ては區々である。故に取り分け年長者との關係に於て、便宜的の形式儀容に注意を拂はないやうな兒童は假令彼れにして眞に社會的道德の根本に對して何等敵意を挾む所ないにしても、不遜とか傲慢とかいふ風に考へられ勝ちである。普通恭敬にしてつゝまじやかなる兒童は年長者や長上やには好かれる。蓋し彼れは外見上此等の人々の尊貴なることを承認するが如くに見え、且つ此等の人々の人格を度外視して自己を主張することをなさぬが故に、彼等に快感を與ふるからである。彼れと同輩や大人に對して敵意の感情を起さしめないやうな兒童にして若し同時にその日常生活の活動に於て、或程



軟弱型

度の氣力と能率とを示しさへしたならば、實に申分なき天使の如き兒童といふべきであらう。

軟弱型、夫の一寸した微風のそよぎにも直ぐ腰を低くして屈下を事とする蘆の如き兒童は到底之と交際する友人の強き感情を惹起し賞讃を博するとは出来ぬ。最も年長けたる婦女子の如きはかゝる定型を善いものと考へぬではない。軟弱型の一般的の傾向は、特に約同年齡同社會階級の交際に於ては注目すべきものがある。自分の獨力では仕事を開始することの出来ぬ人、他人の行爲を善とか悪とか決定することの出来ぬ人、常に附屬者の地位に居り指導者とはなれぬ人は、多くは他からその存在を忘れられる。甚しきに至りては、彼れが一層活力ある仲間によりて利用せられる場合を除きては、蔑視を受けるのである。これ即ち軟弱型の兒童である。故に適應型の兒童にして眞に友人間の賞讃をえんがためには、彼れの能率にして優れたるものあると同時に、其謙遜や恭順やは衷心より出でし者で、毫も作爲の痕があつてはならぬ。尤も謙遜とか恭順とか鄭重とかいふ類

の性質はあまり兒童社會に於て重視せられざる徳目である。畢竟衷心に服従して恭敬なる兒童(換言すればお人善しの兒童)しかも自力にて新天地を開拓するといふ風な能力と意氣とを缺ける兒童は、その社會的の適應に於ては、單に服屬的地位を獲得するに過ぎぬのである。彼れは眞面目に人々に反對するといふことも出来ねば、又大に此等の人々を喜ばすといふことも出来ぬ。何となれば彼れには人を妨止して或種の目的企圖を破壊するといふ力もなく、さりとて彼等を助けて其目的を遂げしむるに與るといふことも出来ぬからである。此の如き人は、丁寧な人、乃至善い人といふ事は出来るが共同生活に於て提携一致事に當る會心の人ではない。五十の兒童を包容する一學級内には、會心的の定型のもあれば、單に善い人といふ程の型もある。後者即ちお人善しの軟弱型は、普通その團體の上に及ぼす影響たるや、中性的である。彼れは教師の推稱も受けて居るのに、又自己の計劃企圖をば譯もなく放棄して他に聽従するといふ程軟弱でないのに、それに夫の活力ありしかも同時に合理的の適應性ある兒童の如く



に或種の強き感情を他に起さしむることが出来ないものである。團體はよくくゝの處で、單に「お人善しの兒童」に對しては、有れども無きが如く、無頓着である。しかも時としては彼れの中性的にして旗幟不鮮明なるの故を以て、積極的に之に對して敵意を示し、之を苦しめるといふことも少からぬ。個々の兒童の言動に關しては、團體や教師や、兩親や長者の意見が必ずしも同様であるとは言へぬ。概言すれば、長者や教師や、祖父や隣人や、謙遜、順なる兒童を喜び、同輩や、兩親や、他を率ゐる、統率者乃至頭目としての特徴のある物を有するに足る、創意と活力とを期待するものである。此の如く兒童の關與せる種々の社會的團體より兒童の上に加へらるゝ評價なるものは全く區々であつて、或ものは之を賞するに、他のものは之を貶し、又或物は若し彼れの性格にして全く中性的であるといふ時には彼れを度外視して相忘れるといふ次第である。

才子型

才子型 兒童が漸時發達を遂げ絶えず其社會的の環境が増大するに至りても猶他と一致調和するといふ態度を維持し且つ之と同時に活力と創

意とを示すならば、彼れは相當な時期に於て敏腕家又は外交的の人となる。即ち、かゝる人の行動は、外見上自己の四周の人々の希望や乃至自己の關係せる社會の傳習やに反對するといふ風に見えずして、しかも自己の複雑なる目的を遂げうるの人である。他との衝突を避けて自己の目的を遂行しえんがためには、社會關係が益々複雑を加ふるにつれて、益々用意周到に自己の進路を遂げたい必要が切となつて来る。他方敏腕の人々は直接に自己の到達せんと欲する目的の方に邁進する。而して自己の仲間の希望や乃至それに關係ある社會の傳習等に關しては注意を拂ふことが少ない。彼れは自己の行手を妨害するものがあれば、之を遂から取除けようと努める。しかも多くはこれの反動を忘れて居る。彼れは自己の目的を成就しようとする觀察にのみこれ急にして、自己の行爲に關する他の思はくの如何態度如何といふやうな事は感受出來ないのである。如何なる事件に關しても彼れは用意の周到なるを缺いて居る。所謂才子肌の人は、常に自己の行動によりて影響を受くる人々の態度に就いては、細心に適應すること



を怠らぬのである。彼れは自己の企劃する事業の上に他の及す反應を見ることが出来る。而して彼れは此等の賞讃と此等の共働とを安全にしうる風に自己の行爲を調節しようとする。とにかく適應性の個人が自己の同輩に對する關係がまず、紛糾を極むるにつれて、彼れは敏腕といふ域を脱して外交的の人となる。

策士型

策士型、才子肌の一步を進めたる外交的の態度なる者は、身心の發達が全く完成を告げるといふ時期迄は見ることの出来ぬものであるといふ事はさして喋々する必要がない。固よりこの外交的の態度の基本的要素なるものは、時としては明らかに若き兒童にも存するのである。即ち彼等は助力を求めんとする人に先づ好感を起さしめて自己の目的を安全にしようとするこのないではない。とはいへ青年期前に於ける兒童の生活に於てこれが主たる態度の一であるといふことは誣言である。たしかに或兒童は他の兒童に比して彼等の要求をなすに當りても甚だ静かであり、控目であるといふ事はある。この種の兒童は長者に對して直接の衝突を避

けるのであるが、しかしこれを以て外交的とは目し難いのである。青年期前の兒童は自己の要求によりて動かさるゝ人々の一致的状态を誘起せんがために、十分なる注意の下に計劃するといふ程に反省的ではない。又彼れの行爲は常軌以外に馳するものではないといふ風に見せかくるか、或は自分の行動は四周の人々の意見や安全やに好都合であるといふ風に構ふるといふ事はしない。固より甲の兒童は乙の兒童よりも一層無禮であり、傲慢であり、又は強壓的であるといふことはあるが、普通兒童といふものは自己の所望を表出する際に直接に問題に觸れる。その音聲に於ても、又態度に於ても、兒童は自己の希望するものをば哀願的に得ようとはせずして、之を要請するといふ風がある。要するに兒童は自己の要求を見はすや率直平明であつて、自己の希望の眞目的が最初から鋒鋒を見はさない風にするなどとは前ながら企てない。上述せるが如く、或兒童は如何にも無禮な態度で、これが許否の權を有する人に自己の希望を提起するのに、他の兒童は頗る哀願的であるといふことはある。しかし、概言すれば、青年期前は



非適應型

單純であり、直接であり、且つ非外交的である。外交といふことは、發達の最後の階段及成人の時期に限り有する一の技術であると言はねばならぬ。

非適應型 自己の四周の人々と概して調和的關係を保つ兒童の定型と相反せるは、此等と多くの點に於て相乖離し、相背馳する兒童である。年長者や長者やに表はすべき尊敬といふ事について、概して無頓着であつて、彼等と接すると同輩に接すると同様なる兒童は、とかく『出過ぎる』とか無作法とか、鐵面皮とかいふ批判を受ける。上述せるが如く兒童は概して彼等の長上に敬意を拂ふことを拒まうとする傾向を有するものであるが、しかし或兒童は他の兒童よりも一層強く且つ長き時期に亘りて反抗の意を示すものがある。元來控目にしてつゝ、まじやかなる兒童は尊敬すべき人の面前にありては同輩と居る時の場合とは異りたる行爲をする。即ち自分の仲間と同等の言葉使を交換してゐる時は、彼れは自他の關係に於て何等謙讓的服從的の關係の象徴を示すことがない。彼れは見知らぬ人が團體の中に居るといふ感じのある時の外は、全く自己の行爲を控目にし、又は抑

制する事はない。彼れは總ての行動に於て對手と五分五分の立場を取り、第三者が希望する風に應接せねばならぬといふことなどは全く意識しない。然るに自分とは年も長じて賢く、且つ強いといふ人に對しては、全く別様の行動を取るのである。今や前述せる同輩の場合に於けるが如く、五分といふことはなく、總てを長者に與へて己の取る所は皆無であるといふ風な態度若しくは事情によりてはこの反對の舉措をなす。その舉動に於ても、その言語に於ても、彼れは意識せると否とを問はず、自己を劣者と考へて居るといふことを示して居る。故に彼れは服從し且つ奉仕せねばならぬとする。

これに反し長者の權威を承認しない兒童は、長者に對すること猶同輩に於けるが如く、矢張り五分五分の關係を取らうとする。而して年長者はとかくその年齢に於ても、又社會的地位に於ても、彼等以上にある人に對して若い人の普通取り居れる態度の如何であるかを注意して觀察してゐないが故に、若い人の舉措は生意氣として考へ勝ちのものである。しかし、こ



れを兒童側から言へば、恐らく故らに長者の氣を損じようとする考へもなく、又長者に蔑意を示さうとする目的もない。彼れは單に仕事の時や遊戯の時に同輩と行動した通りに、父であれ、教師であれ、長上であれ、これと同様に交際するのは當然の事であるとして居るのである。夫の生意氣といふ風な性質は事實子供の意識中には存しない。こは寧ろ拂ふべき敬意の足らぬといふとに關し、兒童の上に加はる大人の憤怒の感情に外ならぬと見るべきである。此の如くにして尊敬を缺ける兒童の考とこの兒童と接觸して服従を求むる大人の意見との間には常に多少の乖離がある。勿論兩親といはず、教師といはず、兎に角長者が自身子供となることが出来るとすれば、彼れは子供と五分五分の關係を保ち、従つて生意氣呼ばはりをするやうな問題もその交際に於ては生起せぬであらう。かく見來れば、特殊の家、特殊の學校、乃至特殊の町内等に於ては、面白い、創造的な、快活な、動的、獨立の子供であると考へられたものも、他の家や、他の學校や、他の町内等に於ては、無作法、無遠慮、乃至無禮な奴であることさへ考へられるかも知れぬ。かくて

厚顔型

普通に生起する場合としては、家庭、學校、其他の處に於て、總ての事柄に全く適應してゐる子供も、その外面的の行動が如何にも敬意を缺くといふの故を以て、偶然知り合ひとなれる人等には、正反對の印象を起すといふこともありうる。

厚顔型、兒童は無遠慮であるとはいへ、その傳習の事柄に反抗するや、これがために他をして報復的の行爲に出でしむるが如き迄の程度には至らぬ。しかし彼れの厚顔なるや、或程度まで、その行爲によりて影響を受ける人々を憤怒せしめる。元來兒童各個人の無作法とか無遠慮とかの行動にはその程度に於て著しい差違がある。その表示する謙遜といふとも眞の意義に相當する者でないかも知れぬが、或者は他兒童に比して著しく長者の尊貴に打たれるといふ事がある。然るに、大都市に於て、教養せられ、粗野な條件の中に人と爲れる兒童は、著しく無作法にして、時に無禮に至ることさへある。彼れの日常の經驗たるや、一般に、何事にも抵抗するといふ風に馴致せられ、大人に對して攻撃的態度を取ることさへ少しとせぬ。彼れ



は尊敬とか崇拜とかを彼れの上に加へらるゝときは殆んど本能的にこれに抵抗し、又自己の周囲の人々に對して何等か侵略するやうな行爲を取る。彼れは自己の上に權威を加へんとする人尊敬の要求を横へる人にも此種の態度を示すやうになれば彼れは漸次傲慢の態度を取るやうになる。彼れは自己の愉快や自己の進歩やの上に何等かの寄與をなすことの出來ぬ仲間を之を眼下に見下すのである。

非適應性を顯著に表明する嘲弄的侮蔑的態度たるや、決して年若き兒童や年長せる人でも優しく謙遜なる人には見ることの出來ぬものである。これは社會に於ける競争が漸次劇しくなり、且つ道德的意識が鋭敏を加ふるの時即ち先づ青年期の後半に至りて現はれる。この態度を取る場合は多く感情を直接に筋肉によりて表示する事が抑止せられて、その効力の如何はさて置き、動的の度合に於て劣れる他方法によりて置きかへらるゝ際に起る。若し九才十才頃の兒童にして侮蔑嘲弄といふやうな言葉によりて見はさるゝ如き情緒を起すことが出來るとすれば、彼れは筋肉的に彼れ

侮蔑的態度

の感情を見はさうとするものである。肉體的の膺懲の外何物も十分に彼れを満足せしむることは出來ぬのである。しかし青年期になれば彼れの課しうる最も嚴峻なる責罰としては、彼れの敵手をして常に侮蔑的態度で刺戟せられて居るといふ感情を惹起せしむるといふことになる。一體嘲弄なるものはそれが向けらるゝ相手の生活の最奥部に浸徹して、その社會的の自我を傷けるものである。對手に強烈なる反情を懷きてしかもこれを實行に訴へざる型の人のみが、この侮蔑嘲弄といふ態度を取るものである。長じて彼れが社會の諸慣習諸制度と活潑々地の接觸をなす様になれば必ずやこれが愚弄者となるのであらう。かゝる態度を取りつゝも、彼れは自己の反對を唱ふる慣習制度を變更し、若しくは消滅に歸せしめんとして有力に自己の感情を實現しようとは企てない。彼れは單に甚深なる反感を懷くのみで、この感情を骨を刺すが如き言語に表はしつゝ、之を他人の間に播布せうとする。普通動的の人は人や制度やを嘲笑しようと思ふものが多いやうに思はれる。かゝるは寧ろ靜的の型に多く見る所であ



ある。蓋し靜的の人の感情たるや甚だ活潑ではあるが、しかし彼れの希望するが如き改良を實現するには不適當であるによる。

### 第三節 豁達型と通達型

吾人は更に進んで各學年の兒童につきて見ることを、且甲者が乙者よりも顯著であるといふ風な社交的態度につき別箇の見地から瞥見をなさう。

豁達型 先づ社交的關係に於て、快活にして正直なる態度がある。之と正反對の地位に立つは、秘密瞞着狡猾の態度である。正直なる兒童は彼れの思想感情の表出に於て、無邪氣であり、放縱であつて、毫も羈束せらるゝ所がない。彼れは眞實であり、朴素であり、率直である。或視點から言へば、彼れは道德的の勇氣を持つと言ひうるのである。何となれば彼れは故意ではなく、寧ろ衝動的であるとは言へ、常に自己の行動の結果は善惡を問はず、男らしく自分の者として承認するの用意があつて、これを他に嫁しう

とはせぬ。若い兒童としての彼れは單に無邪氣に正直である。しかし彼れが漸次發達して自己の同輩に對する自己の行動が益々複雑となるにつれ、かつ眞直一本筋の道を取ることが困難となるにつれても、猶誠實にして寛大の性格を失はぬ。彼れの表出たるや、それによりて何人も欺かれることの出来ない風に、物事を有りのまゝに表示する。彼れは自己の行爲の自然の結果から自己を隠蔽することもしなれば、又外圍の人が爲めに誤られる風な詭計を弄して自己の希望を安固にしようなどゝのさもしい事は爲ない。

豁達型とは正反對の定型がある。そは狡猾にして、自己の行爲の目的や方法をも隠蔽するものである。此型の人は豁達型の如くに、無邪氣にして公明ならず、直接にして單純ではない。故に此種の人は眞の道德的の勇氣を缺如する。蓋し彼れは自己を究地より救済すると考へる時は、誤れる表出を爲して以てその目的を達せんとし、或は然らざる他の手段を以てしては獲得することの出来ぬ風な事項を詭計によりて手中に收めようとする。



彼れは自己の行爲をば權威者乃至公衆の感情の要求する所に適合するが如く見せかくることを努むるによりて、自己の不正の行爲の結果を避けようとする。長じて彼れの生活が廣くなるに従ひ、恐らく不誠實の人となるであらう。彼れは故意に或一時的の利益を占めんがために、自分の利害關係を有する風な事柄を偽りて表出する。故に詐僞的にして當てにならぬ型である。これに反し上記裕達型の目的とする所は眞に有りのまゝに事物を叙せんとする。或は行爲の結果が在來の風習や規約やと相一致せざることを齟らすとしても、自己の考ふるがまゝに、その動機や目的やを公言する。然るに非裕達型の目的とする所は、若し彼れにして外圍の人々の希望と相副はぬ行動であると感ずる際には、眞の意志の所在を隠さうとする。而して事實彼れの目論める最初の目的を保持して居るのに拘らず、異なる目的を取ると揚言して外圍の承認と賞讃とをえようとするのである。四歳以後の兒童五十人もあれば、上述せるが如き相反せる定型を説明するに足る好模型を發見することが出来る。

通達型

通達型 前節に於て裕達なる語は如何なる定型の兒童を言ひ顯はすに適用したかと言ふに、兒童の行爲が或は外圍の人々に或は自己自身に不利益な結果を來す風なものでも、之を隠さうとせず又は自己の行動を控へ目にする方が却て外圍の人から同情を惹くやうな者でも、之を包まうとせぬ風の兒童を稱したのである。しかし如上にては猶盡さざる所があるから、特に此型を加へて之を補ふのである。補足的の意義とは他なし、例へば茲に八歳なる「春川」といふ兒童は如何なる經驗も自分だけに之を保存するが不可能であるといふ類のものをいふのである。彼れは自己の見聞したり行爲したることや、他のものが自己に爲たることやは一切之を他に告げねば居られぬといふ事が自然的に起る風に見える。従つて彼れの思想や感情やに取り入れた細大事が自己の社會の環境に傳達せらるゝ迄は、緊張して何うも氣が濟まぬといふ状態にあるらしい。言はゞ、彼れの有する一切の經驗は、發表的の神經機關の上に、一種の支拂命令を交附したるが如きものであつて、支拂が終る迄は、平均状態は、恢復しない。しかし上述せる裕



達型の代表者例へば「夏野」はこの通達型の「春川」程には自己を表出しようとは待ち構へては居らぬ。彼れはこれに比すれば自己の内部に貯ふる事が多いのである。「夏野」は「春川」ならば何等の躊躇なく他に告ぐる風な経験を發表しようとする衝動をしかく内部に感じないのである。若し彼れにして斯様な迫れる感情を持つにしても彼れはこれを行爲に表はすを禁止することが出来る。「春川」は外圍の人が如何に之を取らうかといふ風な事は考へずして簡単に何事をも他に告ぐる。尤も彼れと雖も自己の四圍の人々の反動が敵意を有すること明白であるといふ際には、或程度迄自己の發表を差控ふることはある。故に此等の點に於て、此定型の人は危険なる機會に遭逢することが少しとはなさぬ。

#### 第四節 自識型と戯曲型

##### 自識型

自識型「秋月」といふ兒童は彼れの面貌舉動の上にも見はる、如く外圍人の態度に對しては一層感受性が強い。換言すれば外圍の人の思はくを

##### 戯曲型

氣にする程度が大である。従つて「冬原」といふ兒童に比ぶれば一層用心強く、自己を包んで居る。「冬原」は明らかに外圍の人は自己の表示することは何であれ好意を以て受けて呉れると自信してゐる。故に彼れは彼れが行動を見聞する人々が自己の表示に對し、如何に反應するかを注視すること鋭敏ではない。これ外見上彼れの意識は社會的の反應の結果を計算の中に入れることが不可能であるかと思へば、寧ろ發表的の行動を取るのである。「秋月」は「冬原」に比すれば趣を異にし、少くとも「冬原」の如き程度には至らぬのである。前者は後者よりも外圍の反響を期待し、且これを感じることが多い。故に彼れは自己の行爲に全然支配せられて居るものと言へぬ。これは彼れの友達の注意が彼れの上に集注する時に、多少困亂するといふことに見はれる。「冬原」ならば自分の遊び仲間や年長者やの前で何等の躊躇なく、即ち自意識なく、平氣で、滑稽を演じ、惡戯もする。然るに「秋月」は同様の事情の下にありては、とかく羞らひ、又は臆病である。

戯曲型「冬原」は學校等で一所にやらうなど、言はるれば如何なる種類



の活動でも出来るだけに没頭せんと待ち構へて居り、誰が之を観察して居らうが乃至その表示が如何に異様であらうが左様な事には頓着なく赤裸々に行動する。彼れは仲間の注意が自己の上を集注する時でも困惑しない。『秋月』はこれと異り、これ迄自分が各種の様子をして屢々出會つた事のある人々の面を除いては、如上の事情の下、困亂なしには自己を表示するとは出来ぬ。見知らぬ人の面前では彼れは羞らひて居、如何に遊興のためにと誘はれても抵抗して之を肯んぜぬ。『冬原』は『秋月』に比すれば何等の躊躇なしに萬人の中を通過するといふことや、彼れの所爲は何であれ彼れの聴衆の歓迎を受けるといふ事を一層自信してゐるやうに思はれる。即ち彼れは四周の人々の態度に關して顧念しない。『秋月』は少くとも見知らぬ人の面前に於て自己を表示するとか、自身が特殊の地位を占むるとか、自己に注意を集むるとか、いふことについては多少本能的の恐怖をもつて居るらしい。彼れの反應に徴するも、彼れは痛く他の嘲笑を恐れて居ることを示し、観察者が如何に見るであらうかと氣遣ふのである。

如上述べ來れる定型は發達の各時期に於て見ることが出来る。青年期に於ても快活にして胸襟を開けるもあれば、物事を秘して外部に見はさぬもあり、或は寡黙なものもある。後者は前二者に比すれば、自分丈けに物事を保存して居る。即ち彼れの發表が外圍に好意を以て受容せらるゝといふ事についての自信が少ないやうである。前者は自分の經驗は瑣細なことに至るまで之を人に傳へようとするのに、後者は單にこの中の重要なことを告ぐるのみである。前者は人の喝采を博するを喜び注意を惹くやうな行動をなすのに、後者は假令人々の誠實な反應を受くるに際してすら、ある特殊の地位に身を處するには多少畏縮する。疑もなく引込思案の人は、公衆から要求せらるゝいろ／＼の註文に相應するには不適當であるとの感じが強いのである。

### 第五節 侵犯型と順良型

侵犯型、児童が自己と接觸する他の人々の感情や希望やに對し、これに



感應する程度の差違に基いて、以下の二型を擧げる。ここに『石川』といふ男兒がある。この兒童は自分よりも若く、自分よりも弱いやうな仲間は絶えず不幸に陥れようとする。彼れの仲間は始終彼れに虐められるとを啣つてゐる、彼れはあらゆる方法を弄して自己の虐めうる距離内にあるものを侵害する。故に彼れは多くの遊び仲間から悪評を受ける。彼れは自己の行動の結果が自分に取り又仲間に取りさしたることを仕出かさぬとすれば、彼れの仲間を困しめるのを楽しんでゐるらしい。始終彼れの同輩に對しては虐遇的態度を取り、年長者や長上に對しては反抗的態度を取る。學校内にありては、彼れは教師に厄介を掛けることが夥しい。教師は彼れの座席の近くに居る兒童から種々の訴を聞くこと頻々であるがために、屢々彼れの座席を變更しなければならぬ。若し同級生の或者が彼れの噂でもすれば、何時迄もこれを忘れず、告げ口屋には報復の手段を取らねば止まぬ。彼れは他を寛容することも出来ねば、又他の寛恕を請ふこともえらせぬ。彼れは侵略的の生活を喜ぶものゝ如くである。彼れは常に自己

の所爲に對して有効なる報復を爲しえないやうな人々を苦しみ、又は惱ますとも目論んで居る。運動場に在りては、彼れの仲間は彼れの爲めに揚足を取られたり、蹴られたり、衝きかゝれたり、乃至何か乗ぜられはせぬかと氣遣つて絶えず戒心して居る。彼れは滑稽を好み、何か少し異つて居るやうな人には遠慮なく嘲笑を向ける。同時に彼れは自分が虐められる事があれば痛く憤慨し、自己の身の上につきて嘲ふやうな人には復讐をする。要するに彼れは好んで他を侵犯するが、自分に對して苟も侵略を敢へてするものがあれば、あらゆる手段を講じて報復の途を取らざれば止まぬのである。

順良型

順良型 如上の粗暴な我儘な定型とは正に相反對に立つものである。これは前者の様に自分の仲間を侵略するとも爲さず、寧ろ他の攻撃に對して勇敢に抵抗する事さへもえせぬものである。子供は元來普通他を侵害し、而して他の侵害に抵抗するものであるから、この種の型は年の極めて若い子供には餘り顯著に見ることが出来ぬ。併しながら三歳頃になれば、こ



の點に關して既に個人的の相違が見はれて來る。甲なる兒童は相變らずその侵略的の傾向を繼續して改めぬに、乙なる兒童はかゝる傾向を統制支配するやうになり、自分の仲間の感情や興味やに對して餘程の敬意を拂ふのである。

『花岡』といふ女子は九歳の頃後者の型を代表して居るやうに見えた。最早や彼女は他の苦惱を惹起するが如きことは滅多になさず。年若き者力弱き者より彼女は嫌らしいとか卑劣であるとかいふ風な苦情の持ち上ることは絶無である。彼女は相手が自分より年長けやうが若からうが乃至同年であらうが、一切他を侵略する事を爲さぬ。彼女の教師は此處數年間彼女の行動に關して如何なる過失をも發見しなかつたといふ。彼女は自己の上に加へられたる小なる損害は固より夫の上記せる『石川』が時として彼女に仕向くるが如き侵略に對してもこれを寛容し、且速かに忘れて仕舞ふ。さりとて彼れの掠奪に全然抵抗すべき傾向を有せぬのではない。彼女は如何なる人に對しても温かき感情を有し、友達好きで、何人とも應接す

る。而して此等の友達を腹立たしめぬ様立居振舞ふのが自分の仕合であるといふ風に見える。これとても恐らく彼女は他をして愉快にあらしめねばならぬといふ風な反省をなすによるでなく、自然にかゝる圓滿なる行動に出づるものらしい。彼女は自分の仲間に自分の所有物を分配するにも寛大である。而して何等かの方法に於て多少でも彼女を助けることがあれば、大に感謝の念を持つ。若し彼女の日常生活に於て怠惰等のために兩親から叱責せらるゝとがあつても、之が辯解をなすといふ事は稀である。故に彼女に對しては之を折檻しようとか、又は不愉快に感ぜしめようとかいふ氣さへ起らぬのである。彼女は無邪氣に叱責を受け、而して叱責が終れば知らざるものゝ如く、以前の仕事を續けるのである。此の如きは順良型と稱すべきものである。

最後に、社交上の定型なるものは、兒童及青年期を通じて、可塑性に富めるものであるといふとを、一言しようと思ふ。兒童としては頑固であつたものが青年として興し易く、時としては女々しき迄に性格の一變することあ

社交定型の  
可塑性



るは、一般に見聞する所である。七歳頃仲間の暴れもの好争家としての兒童も二十歳に至ればさり氣なく、最も平和にして惡意のない團體の一員となるといふことがある。かかるは外の總ての定型にも適用しうる事實であるが故に、年若き兒童の社交上の傾向を觀察してさて向後成人すればかく／＼の特色の人と爲るなどの斷言は容易に出来るものでないといふ事を附け加へて置く。

### 第六節 要 結

社交性の定型といふことは寧ろ通俗の考によく見はれて居る言葉であつて、嚴密に之を分類することは難い。普通言ふ所によれば二大別がある。其一は適應性の兒童で、他人の意見仲間の習慣、社會の制度に容易く服従する兒童のタイプである。その二は此等に適應せざるタイプである。これは兒童期、青年期、成人期間に於ても常に發見せられる。

適應型の兒童は常に年長者或は長上よりは温順とか成人らしいとか雷

つて重寶がられる。之に反して容易に適應せぬ子供は長上より頑固とか無禮とかいふ風に考へられる。しかし實を言へば前者は獨立心を缺き、自發的の活動に乏しい。而して事を爲すに當り十分なる自信を有することが出来ぬから社會の生存競争場裡に於ては遂に弱者たるを免れぬ。しかし長者はかゝるタイプの兒童を喜ぶ。これ人の言ふことを聞き忤らはぬからである。しかし子供仲間にては如何であるかといふに、餘り尊敬せられず、概言すれば馬鹿にせられて人の注意を惹かず、甚しきに至りては他から全く除外せらるゝやうになる。左様でなければ他の活氣ある兒童に利用せられる。所謂善い兒なるものは假令祖父母や先生や隣人やよりは時に愛せられるものであるが、同輩間の團體的の活動に於ては常に人の後塵を拜するに過ぎぬ。かゝる兒童が長ずれば愚圖愚圖してゐなければ、敏捷なる才子肌乃至外交家的の人となる。一方非適應性の兒童は屢々年長者より無遠慮である、鐵面皮である、横着であると言はれる。これ彼れは社會の偉き人を別に偉しと思はず、同輩扱にするからである。街路で遊んで育



てられたる兒童は殆んどか様な傾向を有する。社會の傳習には中々従はず、加之注意して之に従はせんとする人に對しては故らに忤つて見る事がある。これが段々強くなれば殊更に他を罵り、社會の規約禮法を無視する舉動を爲す。人に對しても、習慣に對しても、又社會の制度に對しても、左様である。

他方から見れば兒童にも青年或は成人にも、無邪氣にして磊落豁達なるタイプがある。かゝる子供は長じては極く正直にして誠實なる人間となる。この種の兒童は自己の利益損害得失を考へずして、自己の見聞せるものはその儘人に傳へ、己の信ずる所はその儘人に語りて之を實行する。之と反對に絶えず自己の矯飾に力むる兒童がある。自分の行爲に就ても、眞の動機は隠して示さない。これ何か不利益の結果を齎らざるやを恐るるからである。

又、兒童は彼等の經驗せる事を人に傳ふる事の如何によりて區別する事が出来る。或兒童は己の見聞せる事乃至經驗せる事は細大人に語るこ

とが著しく目立ち、反對に何事も一切己の心中に閉ぢ込めて人に言はぬがある。

或子供は著しく自意識に富み、自分の考自分の技倆を容易に見はさず、殊に見ず知らずの人の面前にては自己を人に示さない。故にかゝる人からは臆病である、恥かしがりである、内氣である、或は温良であると言はれる。これに對して戯曲型即ち芝居氣のあるきはめて出しやばりのタイプがある。之は前者の反對で何でも出しや張つて見たいと言ふものである。彼等は之を見聞する人の感じなどといふ事は殆んど考の中に置かない。然るに前者は之と異り、常に自ら檢束して謹慎に、自分の言行が他より如何に見又は考へられるかを餘り重く氣にし過ぐるのである。

最後に子供の中には、絶えず侵犯的の態度を取る者と、服從的の態度を取る者との二がある。青年にも成人にもこの二型を見る事は出来る。前者は他人を支配し、服從させ、又は之を苦しむる事を愉快とするのに、後者は斯様な事をせぬのみならず、人に使はれても不平のないものである。



此の如く種々の定型はあるが、これは一體に固定せる者ではない。されば五六歳頃には非常に我儘であつたが二十五歳に至りては全く別人の如く温順となる場合も發見せられるのである。

## 第十一章 兒童と嗜好

### 第一節 玩具の好みに見はるゝ兒童心理

兒童の精神  
發達と玩具

幼稚園の加擔者は久しい以前より玩具の教育的價値を高調して居たのである。フレイベルがその著「母及子守の歌」中に指示して居る様に、この世の中の生活状態は遊戯によりて兒童に反映するのである。而して兒童は實世界の生活その物を遊ぶことによりて無意識的に生活の中に存する真理や生活の尊むべきことや、乃至生活の目的といふ事などを理解して來るのである。玩具によりて兒童に傳へられる社會的方面の經驗は頗る大なる範圍にわたり、且豊富に利用せられて居るのである。セグキンの言つた様に、吾人は兒童の立派なる玩具を貰へる時、心からの喜悅と感謝とを觀察することが出來ると共に、此玩具なるものが兒童に所有といふ感じを喚起するを認むるであらう。兒童は私有といふ概念につきては何等理解せざ



る前に玩具を持つことによりて所有の意義を感じて来る。この種の感じたるやかつて自己の衣服などに對しては有せざりし所のものである。或種の玩具が一旦兒童の手中に入るとすれば兒童は各種の想像を以てこの玩具に興味を附ける。かくの如く玩具に對する同情的の考によりて兒童は未だかつて知らざりし未來といふものゝ中に覗き込むのである。此處に人類の想像力の造れる大なる書物が展開せられて来る。

元來生活の實際と兒童期の稚態との間には大なる間隙が存しこれは單にいろ／＼多様の遊戯の世界によりてのみ補足し得るのであるがこの兩者を連結せしむるが上には玩具は特に適當のものと思はれる。故に兒童の玩具に對する興味、これに對する愛情は如何であるか等の事を研究するは頗る有意義の事である。モンローは七歳乃至十六歳の六百七十八の男兒と七百七十の女兒とに對し、以下の問を發したのである。

汝が最も氣に入る玩具は何か、而して何故それを玩ぶのが面白いかと。この答によりて得たる兒童の好愛する玩具を分類すれば以下の如き

兒童の好愛する玩具

共

一

ものがある。(一)摸倣、(二)競争、(三)騒響の樂み、(四)吃驚、不意、これである。

第一類即ち摸倣的の玩具は兒童によりて述べられたる各種の玩具中の百分の四十九を占めて居る。この摸倣的玩具とは兒童がかつて見聞した事のあるものでいろ／＼とその摸倣慾を煽り立つるものである。男兒の百分の十五、女兒の三十四はこれを舉げて居る。中にも人形は最も多くの兒童によりて舉げられる處で、此類中の女兒の百分の六十八及男兒の五を占んで居る。人形に對する興味は女兒は何時の年齢に至りても男兒より強烈であるが、九歳から十三歳の間には最も盛んである。男兒には唯僅かに存するのであるが、それも七歳から十一歳の間に最も著しく減退する。人形の爲めにする附帶道具様の玩具はこの類における第二位に立つ。男兒の三分の一、パーセント及女兒の百分の五はこれに屬する。各種の交通器具例へば楫、馬車、及汽車等は男兒の百分の三、及女兒の一を有し、第三位にある。庖廚道具は男兒の二分の一、パーセント及女兒の百分の三を占め、第四位にある。其他のもので摸倣的玩具に屬するものには手工道具、家、船兵



其二

士等である。

第二類は競争及結果に對する樂みの玩具で、球戯、獨樂、風骨牌、氷滑等、男兒の百分の二十七、及女兒の十一を含んで居る。就中球戯は此類中最も好愛せらるゝ玩具で、男兒の百分の五十三、及女兒の二十はこれである。最も多數を占むるは十三歳の時にある。獨樂は第二位で男兒の百分の四十六、及女兒の十五を有して居る。ムルメルンは第三位にありて男兒の百分の三十三、及女兒の百分の四を占めて居る。この研究に従へば競争、危險對抗等の精神は主として男性に屬するといふ事である。

第三類は騒がしき音響を出して喜ばうとする類の玩具で、男兒の百分の九、及女兒の二は之を代表する。横笛、狩喇叭、其他の吹管類は第一位に立ち、此類中の男兒の百分の十七、女兒の六を占むる。烟火仕掛、火器等は男兒の百分の二十一、女の三分の一パーセントを有し、これに次ぐ。大鼓は男兒の百分の十二、及女兒の二分の一パーセントを有する。オルガン等の樂器類は其數に於ては少いが、又此類に屬する。

其三

其四

玩具に關する婦人の回想

第四類は吃驚と不意とを惹起する玩具類で、問はれたる兒童の僅かに百分の二によりて擧げられて居るに過ぎぬ。女兒よりも男兒に多く、ピツク、箱蛇仕掛等の類がある。

各種の階級の成人の婦人、五十二人に問を發して、最も好めりし玩具に關する回想をなさしめたるに、次の如き結果をえて居る。

(一) 摸倣的のものが百分の六十六を占め、中にも最も人氣の善い玩具として人形は此類中の百分の九十二に達して居る。

(二) 競技は百分の二十六で就中ムルメルンは第一位を占め、此類中の百分の二十一である。

(三) 騒響に對する樂みは全數の百分の六に當り、就中樂器が最も好まれ、てその中の百分の八を占めて居る。

(四) 吃驚不意打的の玩具は僅かに百分の二である。

如上の研究によれば、人形は最も多くの人によりて擧げられて居る玩具である。詳言すれば、質問せられたる兒童の百分の七十三、及回想に依れる



婦人の百分の九十二に達して居る有様である。而してこの玩具は單に最も好まれるのみならず、長きに亘りて兒童を引き附けることの出来る玩具である。夫のスタンレー・ホール氏及エリス氏等が兒童の人形に對する興味に就いて統計的研究を爲したる結果は、大に發生的心理學の方面に光明を投げて居るのである。この研究たるや、畢竟以下の疑問に關する説明を與ふるものである。曰く、人形は如何なる材料で作るが善いか、兒童は如何なる心理的特質をこの人形に歸しうるか、人形の營養乃至兒童がこれに食事を與ふる方法は如何、衣服、香料、衛生、睡眠、さては人形の家族、學校、仲間、結婚病氣、死去、葬式等は如何といふ類である。

ホール氏の指示して居るが如く、兒童期の研究者にとりて、兒童の精神裡に最も深き瞥見を與ふるものは何ぞやといふに、あらゆる方面より發達せる人形遊びに若くものはない。この人形遊に於ては、その他の場合には隠されて容易に見はれぬ勝ちなる兒童期の本能などが明らかに見はれる機會を提供して呉れる。人形は屢々幽靈や雷鳴やを恐れ、或はその性の何た

るかも意識して居る。若し正しい地位に居らぬとか、不秩序である時などは、打ち懲られる事がある。かゝる中にも兒童が秩序清潔といふことの價値を漸次認めてくる様が窺はれるのである。兒童は人に對するよりも、時に一層親しくかつ快活に人形に向つて物語りする。人形には兒童が最も善く知つて居るとか、乃至兒童が最も多くの興味を捧げて居るものが提供せられる。少女の道德的の考は何によりて知るかといふに、人形の上に加ふる彼等の毀譽褒貶によりて最もよく想察しうるのである。兒童が喜んで人形と共に遊ぶ所の婚禮や葬式や授業や宴會やは、彼等の最も深き印象を刻めるものゝ模倣である。兒童の生活などに關する考は最も明らかに、しかも最も自然に、人形遊に見はれるのである。

玩具は兒童の感覺的生活の發達に取りて最も健全にして最も信頼すべき手段である。かゝる意味に於て教育者の逸すべからざる研究の對象たるべきは勿論である。セグマンはいふ、如何なる玩具も持たない兒童は實物を把捉すること極めて遅くかつ決して理想を構成せない。又美術家や



手藝家や文學者やに觸るゝことの出來ない國民は十分兒童に玩具を供給することを怠つてはならぬと。吾人固より何らの選擇なしに玩具でさへあれば之を兒童に與へよと言ふものではない。寧ろ兒童の年齢や個性の如何やによりて精選を加へ假令兒童の好む所とても時に之を與へず或はさして好まざる所にしても時に之に親ましむる必要に迫られる事があるであらう。故に教育上の見地より或は兒童心理に背馳する手段を取るの餘儀なきに至ることあるかも知れぬ。此種の識見なくして徒らに兒童心理に倭せんか却つて兒童心理を解せざるに若かざる結果を見ることあらう。

### 第二節 友人の好みに見はるゝ兒童心理

五歳頃の兒童の求むる友達は何か自分の目論見を實行するに當り之を助けて呉れる人とか或は一般に自己の生活を面白くして呉れる人とかである。取り別け自分と一所になつて遊ぶことの出来る様な仲間を求めらる。

五歳前後の  
兒童の好む  
友人

既に兒童は三歳頃から青年期を通じて自分と同様な經驗同様な傾向を有する友達を選ぶのである。故に概言すれば大抵の成人は固より自分の爲すことを共に遊び得ない年頃の兒童は之を疎外する。勿論大人と雖も全く兒童の如くになりて彼等の自發活動を助けうる者ならば如何なる友人よりも歓迎する所となる。何となれば斯様な大人の友達は色々の勤めを爲して呉れる點に於て到底同年輩の兒童などの企て及ぶ所でないからである。

クローリーの  
説

クローリーによれば兒童に好まるゝ仲間は大人にありては兒童と興味を共にして之を助長し増大しうる者であり兒童にありては彼れより年稍長じて色々の能を有する者である。大人の中で彼れの賞讃する所となるは大抵自分の了解しうる或物をなしうる人又は作り出しうる人であつて大工植木師料理人等はこれであると。

若し九歳頃の男女兒童を拉して勇氣とか多藝とかいふ様な性質を具ふる者の仲間に入れば一見舊の如く直に社交的態度を取るを發見する

靜的の友と  
動的の友



であらう。これに反して彼等をして御行儀は善いが働きのないといふ風な友達と應接せしむれば、控目にして不快な面持をする。之を見ても單に靜的の善良とか従順とかいふことは如何なる年輩に對しても重視せられないことが知られる。フーナー、ホワイト、バーネットといふ様な自叙傳記記者の著作中には、如上の問題に答ふるに足る幾多の實例を擧げて居る。今一例を取りて見れば茲にエスとツキとの二兒童があつてそれ／＼七歳と九歳とである。彼等は多くの遊び仲間や友達やを持つて居たのであるが、漸次殆んどその總てを失つて、最後まで残れる眞に好きな友人としては、如何なる遊戯や如何なる冒險やに於ても、後れを取らぬといふ類のものであつた。かゝる友達か、或者は言語に於ても舉動に於ても粗野であるに拘はらず、之を選める所以は、彼等が多くの競技を實行し、諸種の困難なる遊びを理解し居た爲めであつた。試みにエスとツキとに對し、何故にかゝる亂暴な仲間を好んで善良なる兒童に親しまぬかを取調べたるに、彼等の興味の源泉は上述せるが如きものゝ中に存することが發見せられたのであつた。

兒童の傾向中に於ては、動的の技能熟練を稱揚し、讚美するも、靜的の性質のものは如何なる種類のものたるを問はず、之を蔑視して省みぬといふ重大なる表現がある。兒童は簡易素朴にして原始的な生活を營まうとして、各瞬間を利用せんと欲するものゝ如くである。この事は單に遊戯に於てのみならず、他の如何なる事柄に就いても左様である。故に兒童に對しては彼れに摸倣すべき手本を示しうる人、或は實行すべき材料を供給しうる人等が特に感興を誘ひ、若からうが、老いたらうが、かゝる人には社交性を示すのである。然るに社會階級の如きは極めて無頓着である。その證據には金持も、その日暮しの貧乏人も、市長の子も、労働者の子も、互に手を携へて遊ぶのである。又學業成績といふが如きも、好悪の上にさして影響なきものの如くである。即ち單に學課は出來ても、不活潑の子供は排斥せらるゝ様である。他の一方には、席順は最下であつても、活潑なる仲間は愛せられる。要するに兒童は青年期に達する迄は階級の區別、學業成績等には餘り重きを置かずして、單に動的の兒童が好まるゝといふに歸着する様である。



友人の好みに  
關する實  
驗

兒童の精神生活と教育

三五四

以下兒童は如何なる友人を好むかといふ實驗の結果を擧げて上述せる所と對照しようと思ふ。

汝は如何なる風の仲間を最も好むか。

この間は米國に於て七歳乃至十六歳の學校兒童二千三百三十六人男兒一千六十八人女兒一千二百六十八人に對して發せられたものである。

かくて兒童より集れる筆答は年齢性別道德的乃至身體的特性等の視點に基いて分類せられたのである。

年齢に對する  
好み

百三十四人の兒童は一定の年齢に對する彼等の好尚を發表して居る。

即ち百七人は同年齡のものを、二十七人は自分より年長者又は年少者を友人にせんことを望んで居る。女兒は男兒よりも年齢といふ事については、より強い好みを示して居ることが知られたのである。

性に見はるゝ好みは、五百九十一人の兒童によりて言ひ顯はされて居る。中にも二百三十五人の男兒は男兒を友人に、二十人は女兒を友人に、女兒中三百二十八人は同性を友人に、二十八人は異性の男兒を友人に、持たんことを求めて居る。かゝる性に關する好みは、八歳から十一歳迄の兒童に、最も著しく見はれて居る。

體格形容に  
對する好み

體格に關する好みは單に八十九人の兒童によりて書かれて居るのみである。即ち五十八人は自分と同じ身長を友人を望み、三十一人は自分より丈高きものを所望して居る。其他五人の男兒十四人の女兒は奇麗な又は美しい友人を欲し、齒目、髮鼻の形などに關する特別の注文は六人の男兒と三十二人の女兒とより爲されて居る。十五人の男兒と五十五人の女兒とよりは活潑にして強壯なる友達が望まれて居る。

精神上的の素  
質に關する  
好み

各種の精神上的の素質に關する好みとしては、快活なる性質、即ち豁達にして愉快なる友人を求むる要求が主位を占めて居る。洒落家、又は容易に怒らない人、或は友愛に富みて爽快なる人は、百四十一人の男兒及二百二十八人の女兒によりて擧げられて居る。五十八人の兒童は快活にしてしかも天稟あるを、四十二人は懇懇なるを、友人に求めて居る。豫期に違はず道德上の特質に對する呼聲は第一位に立つ。即ち四百七十八人の兒童は深切、



寛大若しくは慈悲深き友人を得んとし、四百五十五兒は眞率、正直にして公平なる人を求めて居る。注意すべきは兒童の叙述中、不用意に見はるゝもので、遊戯が彼等の道德的判斷の教育に非常に重要な意味を有つといふ事實である。十三歳の一兒はそれに關し、次の言をなして居る。

余の好んで交らうとする友達は、ボール遊びをする時に偽らない兒童である。余が一度しか打たないのに、汝は二度打つたなど、虚言をいふ兒童は好まない。

と。其他價値あるものとして計上せらるゝ道德的特性の中、第三位に立つは眞理を好愛するといふ事である。これは男兒よりも女兒に多く、且つ此種の要求は年と共に増加して居る。之に次ぐは何時も變らないといふ性質である。

余は余の面前に於てするが如く、又余の蔭に於ても同様にする二言なき友を好む。之と反對に、余に氣に入る様な事を言ひつゝも、しかも余に關する虚言を流布する友達を好まぬ。

とは一女兒の述懐である。かく不變といふことは溫和と同様に優越なる婦徳である。而してこれは單に年長の兒童の希望の下に見はれて居る。其他自己を捨てるといふことは道德的特性の第五位として、愛は第六として、恭しきことは第七として、従順は八位として、勇氣は九位として、數へられて居る。單に五人の男兒と二十三人の女兒とは、宗教上の友達に對する好みを言明して居る。

四百十八人の男女兒、わけても女兒は粗野ならず又は人と争はない友達を望む。遊戯に對する好尚は特性として女兒よりも男兒に多く、しかも兩性共年長する程、その要求が減じて來、且つ遊戯の種類が分化して來る。

恭敬にして作法の善い友達に對する好みは、九歳前には見はれぬ。兒童が長ずるにつれて、これは一層廣く希望せられるやうになる。而して女兒はこの希望に於て常に男兒に先つて居る。九歳の一男兒は此事を次のやうに述べて居る。

余は作法の善い友達を好む。若し人の足を踏んだ時は御免下さいと



斷りをのべ、知つた人に遇つた時は常に會釋し、惡口を言はず、虚言せず、又野卑な言葉使をなさず、家に入る時は帽を脱し、玄關の前では靴を拭ふ人が好きである。

と。三十六人の男兒と六十四人の女兒とは秘密を保ちうる友人を、九十一人の男兒と八人の女兒とは飲酒せず喫煙せぬ友人を、二十三人の男兒及十七人の女兒は干渉をせぬ友人を、望んでゐる。立派の服装は二十二人の男兒及六十五人の女兒より重要と思はれ、七人の男兒と三人の女兒とは富貴の友を求めて居る。勤勉といふことは餘り重んじられぬが、三十六人の女兒及二十三人の男兒は喜んで働く友を欲するといふ希望を述べて居る。一般的特徴を有する言顯は、しとして、吾人は「善い友」「行儀のよい友」「立派な友」といふ様な語がある。かゝる表出は如何にもボンヤリとして、性格の特性を指すものとも、又は月並的のものとも見られる。これは一番多くの年の幼い兒童に用ひられて居る。しかも此等が年と共に減退するといふ事實は、偶々この種の語を用ふる兒童は觀念が猶未だ明瞭ならず、且つ

不定なる時期に屬するを語るものと思はれる。

青年期の初期に於ては、明らかに有りの儘なる本來の自我と理想我との間に一種の争闘の行はるゝを語るに足るものがある。即ち理想我の聲としては、兒童が最も活潑に渴仰する様な性格の特質を有する友而してこの特性は自分には最も少く所持して居ると自覺する友を得んと願ふ著しい要求を語つて居る。此種の争闘に關して十三歳の女兒は甚だ恰好なる措辭を以て述べて居る。曰く、

余は余の最も好む所の友の如何なる種類のものであるかに就ては言ふことが出来ぬ。何となれば余は二様の友人を欲するからである。余はその友が居さへすればよくと物事を考へず、あらゆる事を忘れて仕まふ風な一種の友を望む。斯様な友達は決して眞面目な人でないことを知つて居る。一方又それと全く反對に、眞面目で余を助けて呉れる一種の友人を欲する。かく自分の心情が二様であるがために、畢竟かゝる二種類の友を欲するのである。



と。其他この少女と同様に自分とは全く異なる性格を有してゐるから好んで之を友にせんとすることを述べてゐる兒童がある。即ちかゝる性質は兒童自身にはないのであるが好んで自分もかくありたいと欲するものである。これ取りも直さず第二の自我であつてこの質問に答へんとするに際し、兒童の心情裡に臆氣ながら浮び出るものと思はるのである。

### 第三節 職業の好みに見はるゝ兒童心理

職業の好みに關する問題は、兒童の心理を研究するに當り頗る重要にして且つ興味あるものの一つである。今左にモンロー氏が亞米利加合衆國のマサチューセツツに於て試みたる研究を紹介しようと思ふ。氏は八歳乃至十六歳の學校兒童一千七百五十五人に對し次の問を提出して筆答せしめたものであつた。

汝が大きくなつたら何に成ることを欲するか。且つ何故これを欲するかを言へ。

職業の好みに關する研究

と。勿論この研究により、一は學校兒童が色々の職業に對して有する特殊の傾向を發見し、一は何故他の職業の數ある中からそれを選むに至りしかといふ動機を知らうといふ希望に出でたものである。而してこの結果として國家が認めて居る殆んど總ての職業が擧げられたのである。調査を遂げたる兒童に就いて言へば農家の兒童は甚だ少數で多數は手業及び工場労働者の子弟であつた。即ち兩親の多くは家庭で仕事をして居るか若しくは労働者として日銀を取りに出掛けるものかである。而して極めて少數者が學問的の職業に従事して居たのである。此の如く調査の始めに當りて兩親の職業の何たるかを明かにして置くことは、本研究を教育上に利用するがうへに甚だ大切である。

重ねて言うて置くが、質問せられたる兒童の總數は一千七百五十五人で中男兒八百七十三人、女兒八百八十二人で略同數に近い。

此等兒童によりて好みであると選取せられた職業の種類の中で、其數最も多きを占むるは教員といふ職である。即ち女兒の四十三パーセント及

選取せられし各種の職業



男兒の四パーセントは、「我等は子供を教ふることを欲する」といふ。この職業を最も多く選べるは九歳の女兒で、同齡の女兒の五十四パーセントは皆これを舉げて居る。最少なるは十六歳の女兒で、同年の女兒中二十八パーセントを占めて居る。男兒にありては教員を好ましい職業として考へる所のものの數は十歳に至る迄増加し、十歳の男兒中教ふることを希望するものは十パーセントに達して居る。この時期から其數は漸次減退し、十五歳に至りては僅かに一パーセントを保つに過ぎぬ。若しこの研究にして現時の兒童の將來の職業を豫言するに當り一の證據となるといふことが許されるものとすれば、さなくとも比較的合衆國などに於ては多きを占むる教師の職業はます／＼女子の手に落つるといふことを意味するものと言はねばならぬ。教員以外の學問的の職業、僧侶、醫師、裁判官等は男兒の二十一パーセント、女兒の八パーセントから望まれて居た。

假令質問を出されたる兒童の兩親の過半数は日傭乃至家業に忙はしい人達であつたとはいへ、唯男兒の六パーセント及びほぼ同數の女兒のみが

家業又は勞働的の仕事に従ふと言ふに過ぎなかつた。加之人類活動の一分野たるかゝる肉體を働かすといふ方面に對する嫌惡の傾向は頗る著しきものがある。其の中に曰く、

余は家政に携はることを好まない。

余は勞働に従事するは嫌である。

と。以て如何に學校兒童は身體的の活動といふことを輕視して居るかが分るのである。

實業中農業に對しては兒童の約六パーセントは愉快の念を有して居る。然るに商業的のことは男兒の三十二パーセント及女兒の約二十パーセントが之を選んで居るに見ても、その好まれる度合が窺はれる。固より商業の細い内容上の區別に至りては男女兒各その好みを異にするとはいへ、何れも年若きよりは年長けるに従つて、益々商業的の仕事に對する好みが多く見はれて來る。

機械師、技手、裁縫師、裝飾物製造といふやうな職業は、所得的及機械的の職



女子と家政

業として同一項の下に分類せられたのである。男兒の十四パーセントは、大工、機械師、或は技手として、女兒の二十パーセントは裁縫師、或は裝飾師として、立つことを欲して居る。

モンロー氏はこの研究に於て、家政に關する顧念が殆ど女兒によりて缺如せることを擧げて、少からず喫驚したと言つて居る。九歳の一少女はこれに言及して曰く、「余の母は家の事を世話し、余の父は車の輪の修繕を業とする。余は余の母のすることを欲せぬから、女教師か演説師かになりたい」と。しかも此の如き滔々たる趨勢の中において、家政に重要な價値を置きし一少女を發見したのは聊か意を強うするに足るものがあると言つて宜しい。且つ其論理は井然として賞讃に價する。今其答案を其まゝに記述すれば左の通りである。

余は善く家を始末し或は善く料理することの出来るを欲する。何となればかくすれば余は余自身を支へて行く丈けの所得は充分なるのみならず、これによりて父母を助けることも出来るであらうから。一

體よく料理し且つ善く經濟をとることは甚だ立派なことである。然るに世には全く料理することの出来ない女兒が澤山ある。

八歳乃至十六歳の九百人に近い女生徒の中には職業を擧げる代りに、將來結婚をするといふを以て答とするものがあらうとは、モンロー氏によりて期待せられた所であつた。然るにかゝる答を爲した女兒は一人もなかつたに反し、四人の男兒は職業を名ざす代りに、彼等が若し大人とならば結婚せんことを目的として居ることを言明して居る。

兒童が多くの職業中より好みとして選擇せるは、如何なる動機に出づるかを知ることは少からず重要なことである。この爲めに各兒童は、何が故にこれ或はその職業に就くを欲するかを告げる様に要求せられたのである。「何故といふに私はそれを好むから」と。即ちそれを欲するの故にとの理由の答をなしたるは、男兒の三十パーセント、女兒の四十四パーセント強に當つて居る。此等の多くの兒童は疑もなく、彼等は人と爲り、この選べる職業に向つて居ると信ずるにやあらう。しかしこの答の中特に女

職業選擇の  
動機

共  
一



兒にありては、彼等が職業をかくと採用するにつき何等明瞭なる理由もない所から、かく漠然と當らず障らずの理由を書いたと自白して居るものもある。

第二に多きを占めて居る動機は金儲けである。男兒の四十四パーセント及女兒の約二十四パーセントはそれに伴ふ収益の多寡に基いてそれぞれ職業を選んで居る。男兒にありては年齢の増加すると共に此動機は益々強くなるに反し、女兒にありては弱くなることを示して居る。カリフォルニアの學童につきウキラードの研究せる所によれば、兒童が職業を選む理由の第一に立つは金であるといふことを發見して居るのである。かく兩氏の研究の略、一致せる所から、以下の疑問の自然に生起するは蓋しやむを得ざる所であらう。曰く「亞米利加の兒童の思想の中には餘りに不似合の程度に迄、金といふ考が入り込んで居らぬか」と。

金儲けといふ動機に比すれば、下位には立つが、「この仕事は餘りに骨折ることが少ないから」といふ理由の下に、職業を選べるは、約男兒の十二パー

其 二

其 三

セント及女兒の十四パーセントを占めて居る。十四歳の一少女は言ふ「私は好んで女教師たらんことを欲する。何となればそれは容易であるから」と。「余は喜んで教師たらんと欲する」と。十二歳の男兒は書いた「何となれば教師といふ職は一日に單に二時間丈働けば済むからである」と。かく兒童がその二十六パーセントも、短い勤務時間及び容易な仕事に就くを喜ぶことは、畢竟家庭又は學校に亘りて流布する思想を表出したものである。仕事及仕事に結べる責任感に關して間違へる社會的の考が頗る勢力を占めて居ることを證するに足るものがある。かゝる謬見を打破するが爲め學校は當然何等かの處置を取るべきであり、又取り得るのである。更に労働は高貴なるものとして稱揚せられねばならぬ。吾人は敬意を拂つて労働の神聖なることにつきて語る所がなければならぬ。地理其他の教科に於て、各種の職業的活動の特徴、及その必要、乃至人生に寄與する主點等については指示することを閑却してはならぬ。學校に手工を取り入れしことは此種の誤解を防止するに效あると共に、この手工的勞作の中に多くの貴



ひべく且必要なる職業の種類を含むを認めしむるが上に多少貢献する所があらう。ウキラード及テローア兩氏によりても提唱せられたるが如く、この方面については教育家の當に爲すべき多くの仕事は餘されてあることを高調せねばならぬ。

男兒の六、バーセント及女兒の九、バーセントは人道的の考から出發して、彼等は人類を助け、痛苦を軽減し、世の中を改善しようとすることを望んで居る。

三、バーセントの男兒、二、バーセントの女兒は自己の職業選擇の理由として、彼等の兩親の話題に上れる噂、評判等を記して居る。蓋し吾人は能く多くの家庭に於て無雜作に以下の如き對話の生起するは日常經驗する所である。曰く、「自分の子供は決して自分の様なつまらぬ職業は執らせぬ」と。ウキラードの研究によれば、父の職業の最も多く男兒に影響を與ふる年は十三歳であるといふ。これは合衆國に於てはこの年齢の時、男兒は學校を退くによるであらうと言つて居る。

共 四

共 五

共 六

權力、名譽、乃至自由といふことの熱望によりて鼓舞せられて居るは比較的少數の兒童である。教育者は普通兒童の社會生活の上に遊戲の及す大影響についてはあまり考慮を費やさないのであるが、九歳の一少女の書けるを見るに、「私は女教師とならうと思ふ。何故といふに、毎晩夕食後、廣い學校の運動場で遊びごとをすることが出来るから」とある。或男兒の職業選擇に際し決定を與へたるは、強制より免れて自由になるといふことである。十二歳の男兒は言ふ。「余は牧師とならうと思ふ。蓋し牧師は純潔な仕事であり、かつ吾人の意の欲するがままに進みうるからである」と。職業の有する見榮え、即ち外見上の誘惑は意外にも兒童の上に極僅少の影響を與ふるに過ぎなかつた。十一歳の一少女は書いた。「私は將來女教師となる目的である。何となれば女教師は善い教育を受けてゐる即ち出來のよい人であるといふ印であるからである。」と。

上述せるが如く、兒童自身の選べる職業の種類及彼等がこの職業をと決定する理由を擧ぐるの外、兒童は又兩親の職業をも同時に告げねばならぬ



のであつた。既に動機の場合に於て見た様に、父の職業の影響は甚だ僅少である。此種の影響を確むる處あらんがため、モンロー氏は二つの異なる地方の代表的の意味に於て、特に二つの學校から筆答を徴し、而して兩親の職業は兒童によりて選ばれたる職業と比較せられたのである。この答を爲せる町の一つは男女兒童同數で總て四百五十四人の答があつた。此等兒童の百三十六人の父は鐵道員であつた。然るに單に四十七人のみが同様な仕事を選んで居るに過ぎぬ。四十三人の父は大工であるが十一人の外之を志望せるものはない。三十一人の父は煙草工場に勤めて居たが、二人の兒童のみこの職業を望んで居る。二十人の父は機械師であるが、六人の兒童は同職業を執らうと言ふ。十六兒の父は農夫であるが、就中十兒は田園の耕作に従事するといふ。これと同様な比較研究が二百四十兒を有する他の一學校に於て試みられた。五兒の父が學問的の職業に従事して居る。然るに百十兒はやはりかゝる職業に就かんことを望んで居る。就中教師の職が首位を占めて居る。二十四兒の父は日傭又は家業をなす

のであつたが、四人の兒童が同一職業を選めるに過ぎぬ。四十六兒の兩親は共に家を離れて事務様の仕事に行く。六十八兒はこれを希望して居る。百三十九兒の兩親は工業又は手業に従事してゐるが、之を希望するは五十三兒である。十六兒の兩親は農夫であつたが、六兒が農夫たらうと言つて居る。

如上の研究は教育上種々の重要な教訓を含んで居る。中にも動機に關する問題は特に重要である。如何なる動機については之と戦はんがために大に警戒する所がなくはならぬか。既に述べしが如く、仕事や及仕事の責任感に對する間違へる社會的の考は存外廣く流布して疑もなく不幸を惹起して居る。慥かに學校は兒童に理想を喚起すべき任務を有するが、反面有用なる職業はその何たるを問はず、その適當なる尊貴に於て之を助くるの用意が必要である。唯此の如き兒童の將來の職業に對する豫想は一時の空想に止つて、果して後來に繼續する意義を有するや否やは大に疑問である。余の知る範圍内に於てはかゝる題目について何等かの光



明を投ぐるに足る唯一の研究はやはりウキラーのものである。氏によれば、如上の問題に對する兒童の返答は兒童後年の生活に於て、ただ僅少の相違を示すのみで、大部分はその嘗て好める職業に就くといふことである。人格的の要素、殊に教師の人格は兒童後年の職業選擇の上に頗る大なる影響を與ふるものと思はれる。公人中にも軍人の如きは時に兒童の將來の職業に關し、決定的の影響を與ふることがある。學校教育に於ては合理的にして健全なる方向に、兒童の職業の選擇に影響するやう貢獻する所がなければならぬ。

## 第十二章 兒童と自然

### 第一節 兒童と日月星雲

日に對する  
感情

人は總て心身共に太陽の子といふべきばかりでなく、日々黒闇々たる夜の幕を開き、朝々纔に眠より目覺めて猶朦朧たる心情を豁如たらしむるものも亦太陽である。此の如くにして人類の精神の太陽に向ふは本能的で常へに吾人を創造せし本體を憧憬する。兒童は旭日の昇るを見て或は床より目覺めしものとなし、或は他より起されるものとする。或は之を以て風船の如く、彈丸の如く、神の眼の如く、燈火の如くであると思ふ。稍、年長けたるは、太陽を以て、恰も奮進して地平線に駆け上らんとするものゝ如く考へ、雲霧と戦ひ、暗黒と戦ひて勝てるが如く感ぜらる。小兒は猶原始人の感ずると同様に、日や月やは別に一定の速力といふものはなく、吞氣に遊行して居るものと思つて居る。地平線上に上り來れる太陽を見ては暗黒を脱



出して勝利を得たるものとして之を喜び意を安んずるといふ風である。其他児童が太陽の光輝について感ずる所は多種多様であつて彼等の思想や想像やの豊富なる遙かに神話や詩歌やを凌ぐに足るものがあると思はしめる。

洞穴などに住む盲目の動物は刺戟の覺醒せしむるものなきがために眠り同様に盲目の児童は光覺なきがために活動が鈍る。然るに之に反して輝ける光線は白痴者をも猶興奮せしむるに足りる。陰鬱な天氣が數日に亘る時は、児童は著しく不元氣となり、怠惰となり、沈鬱となり、消化不良となる。太陽が現はれたる時、又は初雪の降りたる時などは、之に反して児童の活躍喜悅する様は譬ふべきものを知らざる程である。

暗黒の夜が迫れば、児童は、今迄の元氣が失せて萎微、さらに振はぬのであるが、一度點燈すれば、その眼は輝き、その腦は明らかに、恰も晨旦の如く、更に活動し、始むるを常とする。吾人が半ば夜間的の生活を營む所以のものは、蓋し夫の薄暮に光明をうるを以て復活したるが如く、一生面を開きたるが

光線の児童  
に與ふる影  
響

暗  
黒

如く、感ぜらるゝことの漸次發達して茲に到りしものであらう。かくて晨旦に對する樂天的、向上的の熾烈な歡喜の情は甚しく減ぜられる譯ではあるが、一面夜の燈火に對するや恰も曉天の曙光に接したるが如く、向上的精神を振作し、一日の疲勞の回復を覺え、新なる精進の氣の湧くは殊に精神教育のため甚だ有利のこと、言はねばならぬ。

月に對する  
感情

天體、地球に最も近きは月であるから、古來、月に對する思想は、早くから發達して、人類の感興を惹けるは、誠に謂あることである。従つて天體の中で児童の興味を動かすこと月の如く大なるものはなく、月の形狀、距離は如何なる材料にて造られて居るか、月の空中に懸れるは何故であるか、其落下せない故は如何、吾人の目に觸れぬ間は何處に形を潜むるか、月の中に見ゆるは果して兎の餅搗なるかなど、いふ各種の疑問は油然として其胸中に湧き出で際涯を知らぬ程である。

児童の中には月に向つて談じ、或は歌を唱へ、或は玩具を捧ぐるものがある。自分が惡事を爲したる時は、面目ないから月に隠れんことを請ひ、時に



は遊戯の仲間たらんことを願ふ。雲、太陽、星などを月の親類と思ふものもあり、又は月中に亡き父母或は友人の顔を見たと言ふものもあり、又月を擬人視して兒童の善良なる時は月は笑つて光を増し形が大きくなつて近づいて來れど、若し悪事をなしたるときは光は減じ形は小さく且遠かつて影を收むるに至ると思ふものもある。かゝる幼稚にして荒誕なる思想も青年期に至れば殆んど消失して、茲に月は新なる興味の対象となり、宗教的情操的乃至詩的の生活と密邇の關係を有するに至るものである。

月の與ふる暗示の中で最も主なるものは愛憐の情である。少女は月に對して自己の哀愁を告げ祈願を掛けて自ら慰むることがある。或はこれがために懷郷の情を催して異郷月を仰ぐに堪へざらしむることがある。抑も月は人類に對して宗教的感情の萌芽を啓發するもので、未開人も稍開化せるも、皆月を以て崇拜の対象とするのであるが、この情こそ、後年眞善美に對する高尚なる情操となるの素地である。

星に對する感情

兒童の幼稚なものにありては星の忽然として晴夜に光を放つを見て、金

剛石、金、鉛と考へ、空にうたれた釘頭と思ひ、ランプの眼と思ひ、或は火花、硝子、鉛とも見るのである。星の父は太陽で、母は月であり、大家族をなして親睦し、天界の神や下界に見ゆる人類などのことを語り合つて居るとする。殊にその注意を惹くは星の閃光で、十歳頃の兒童にして猶之を以て星が相互に語り合ひ、又は地球の人々に合圖するものとし、時々瞬きを爲してこれに應接するものもある。面白きは彼等の中には或星を以て自分に屬するものとなし、出づるを待ちて禮拜をなし、見えぬ時には悲しみ、或は吉凶の祈禱をなす等のことである。又星を以て父母、友人、偉人、傑士の上天して靈魂となつたものであるとする兒童もある。時々諸星相互の位置に依り、見方に従ひて動物となり、人となり、圓形となり、建築物となる等を喜ぶものもある。

感情の推移

星に對する感情は幼年より進んで青年期に行くに隨ひ益々深く、之に對して應答の表徴を求め、愛と崇拜との融然渾和せる優しみの情を起すものが多い。或は始終星てふ冥想を恣にし、其精神は飄然として肉體を離れて